書き下ろし文芸マガジン

NONSTOP

vol.6 約束

☆『クローバー』 入江棗

☆『Dear My Life』 貴水玲

☆『From・N』 番棚葵

☆『響け、私たちの歌声』 広野未沙

☆『平行線シンドローム』 水島朱音

☆『ターニング・ポイント』 諸星崇

企画・監修　榎本秋

株式会社榎本事務所

書き下ろし文芸マガジン

NONSTOP

vol.6 約束

☆『クローバー』 入江棗

☆『Dear My Life』 青水玲

☆『From・N』 番棚葵

☆『響け、私たちの歌声』 広野未沙

☆『平行線シンドローム』 水島朱音

☆『ターニング・ポイント』 諸星崇

企画・監修　榎本秋

株式会社榎本事務所

書き下ろし＆読みきり文芸マガジン「NONSTOP」の最終号となる第６号をここにお届けする。

本マガジンは二つの全体的なテーマを設定している。ひとつは、北陸地方の海沿いをイメージした架空の地方都市「Ｎ市」を共通の舞台としたシェアードワールドノベルズであること。そしてもうひとつは、「青春」をテーマとすることだ。

これに加えて、毎号の統一テーマも設定した。今回の表テーマは「約束」。本マガジンは今回が最終号だが、この後も各物語のキャラクターたちの未来が続いていくことを想像させるテーマとなっている。また裏テーマとして季節は「春」に統一している。

二つのテーマの統一という事情から、先行する弊事務所発行の電子マガジン「signal」掲載の諸作品と比べ、本マガジンに掲載している作品は続き物としての性質が強めになっている。それでもなるべくどこから読んでも楽しめるようにはなっているが、できれば第一号より順繰りに追いかけていっていただきたい。損はさせない出来のつもりである。

本マガジンには、私、榎本秋と関係ある作家および作家の卵たち、計八名（うち二名は今回急病により休載）が参加している。さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎回イラストコンペを開催していただき、その上位作品を表紙あるいは口絵として収録するという試みもさせていただいている。作品ごとのカバーイラストについては、これとは別に創刊時にコンペを行って選ばせていただいた。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。それでは、楽しんでいただけると幸いである。

榎本秋

目次

はじめに……2
目次……3
口絵……4
イラスト　永野洋生
新名描人
峯松芽夢
神内みさと
（掲載順）
舞台設定……8
〈タイトルクリックで該当のページに飛びます〉
クローバー　入江聚……9
イラスト　伊藤由希
Dear My Life　貴水玲……45
イラスト　ヒトエ
From・N　番棚葵……79
イラスト　伊藤由希
響け、私たちの歌声　広野未沙……111
イラスト　うらら
平行線シンドローム　水島朱音……143
イラスト　正午あきら
ターニング・ポイント　諸星崇……177
イラスト　橘ぽん
鑑賞……199

Illustration: 永野洋生

Illustration: 新名描人

祝卒
Illustration: 峯松芽夢

Illustration: 神内みさと

舞台：N市

☆海に面した盆地上の小都市

○海 -> 山でいきなり切り立っており、海に面していない周りは山で囲まれてる

☆高速道路開通の賛成・反対でもめている

○大きな都市（県庁所在地）と都市を繋げるための道路で、市の活性化を見込んでいる

☆市内に男子校（昇星学院）、女子校（優華女学院）、共学がそれぞれ存在する

☆駅前に大きめのショッピングモールができたばかり

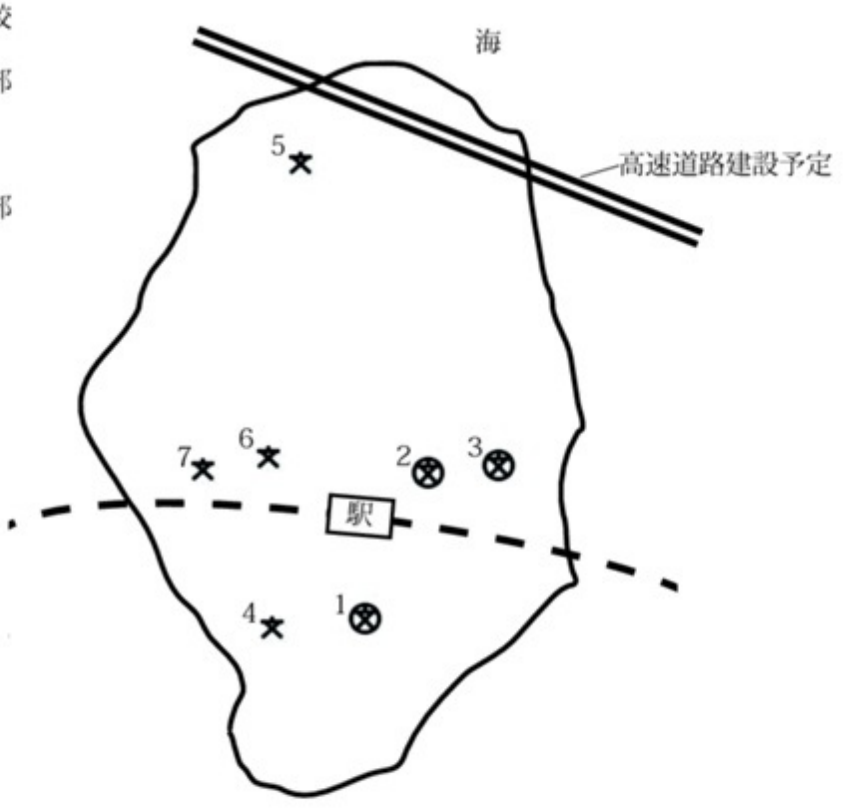
☆地主＝旧家がある

○「塚本家」という地主が存在する

○本家・分家があり市内に家が散らばっている

○高速道路問題では一族で揉めている

1 →市立中央高等学校
2 →昇星学院高等部
3 →優華女学院高等部
4 →市立第一中学校
5 →市立第二中学校
6 →昇星学院中等部
7 →優華女学院中等部



クローバー
入江棗
Illustration: 伊藤由希

あらすじ

楓と孝士に告白され、どうすればいいか悩む千伽。そうこうしている間に時間は過ぎていき、三人それぞれの道に進もうとしている。
年末、千伽が店番をしていると指名手配されていた強盗に襲われてしまう。それを助けてくれたのは楓だった。これをきっかけに、千伽の中で答えが出る。

佐々口孝士

中学三年生。千伽の幼馴染。千伽のことをよく気にかける。

高橋千伽

中学三年生。本屋の娘。本が好きで大人しい性格。

塚本楓

中学三年生。地主の分家の次男。一匹狼で少しわがまま。

第六話　君と歩く春

年が明けて二日目、塚本くんと孝士の三人で初詣に行った。塚本家は三箇日まで親せき付き合いで動けないのかと思いきや、次男はそんなでもないらしい。本人も興味がないし抜け出すのは簡単だったという。

「本家と分家が勢揃いだからな。本家の人間じゃない限り一人くらい抜けてもわかんねぇよ。それに、元々俺はあんまり行事に顔出ししないからな」

それは後継者の権利がお兄さんと入れ替わったことに関係があるのか。少しだけ考えて、すぐにその思念を消し去った。塚本くんにとっていい話とは言えないし、気にしていないのならそれが一番いい。

そんなことよりも怪我の具合の方が心配でならなかった。あの事件からまだそう日は経っていない。塚本くん曰く、まだ包帯は取れないけれどほとんど痛くないという。気を遣ってくれているのが私でも分かった。初詣の人々で賑わう中、無意識に腕を庇っていたから。

「千伽はなにをお願いした？」

お守りなどが燃やされている焚き火にあたりながら孝士が尋ねてきた。
「一番はみんなの受験合格だよ」
夏休みに浅草でお参りした時はいつも通り直前になって願い事が決まらなかった。けれど今回は揺らぐことなく、真っ直ぐな気持ちで神様にお願いができた。
「そりゃそうだ。一番ってことは二つ頼んだのか？」
「三つ。受験合格と、塚本くんの怪我が早く治るのと、卒業まで楽しく過ごせますようにって」
孝士の顔から笑みが消えた。
なにか言いたそうにして、けれど唇をぎゅっと結ぶ。
私なりの答えを出してから孝士はよくこういう顔をする。孝士にとって今の状態が辛いものであることは分かっていたつもりだし、離れていくのは仕方のないことだと思っていた。それでもこうして一緒に居てくれるのは、孝士の優しさ以外に他ならない。

検査の結果は良好で退院した後、塚本くんには電話で、孝士には直接会って思いを伝えた。
「退院できたからって帰ってすぐに出歩くな、馬鹿」
「ええと、ごめんなさい……」
孝士の家に行くと電話したら受話口から耳を離したくなるような大声で「怪我人は大人しく家で待っとけ！」と怒鳴られ、次の瞬間には電話が切られた。その五分後には家に来ていて、ここでも更に説教をされてしまった。

部屋に案内しようとしたら、雪が止んだから外で話そうと言われた。少し前だったら理由が分からず無理にあげてしまっていただろうけど、今は分かる。素直にコートを羽織った。

「卒業まで？」

「そう」

雪はついさっき止んだばかりで、陽も出てきていた。道路一面の白がキラキラと光っている。

予想外なことを言われたのか、孝士は目を丸くし、苛立ちを隠すかのように頭をかいた。

「千伽にしては鬼畜なこと言うんだな。生殺しかよ」

普段より声が低かった。目も合わない。

「見守るとは言ったけどこうくるとは思わなかった」

胸の辺りが気持ち悪くなってくる。緊張する時にいつもなる症状だ。運動したわけでもないのに心臓が大きく鳴って、頭の中が真っ白になってしまいそうになる。

でも、ちゃんと言わないと絶対に分かってもらえない。

「もし、私が今この場で決めたことを言ったら、みんなバラバラになる。孝士や塚本くんが平気だって言っても私が平気じゃない。私、この一年すごく楽しかった。今まで学校が楽しいなんて一度も思ったことなかったのに。大変なこともあったけど、東京行ったり、三人でいろんな話したり、いっぱい笑った気がする。だからお願い、最後まで笑っていたいの」

みんなで、とまでは言えなかった。私の我がままだというのは百も承知だ。

寒いわけじゃないのに手が震える。拳を握りしめると傷口が痛んだ。
「……あーあ」
突然間抜けな声を出したかと思ったら、孝士はその場にしゃがみ込んでしまった。
「塚本が出てくる前に俺のもんにしておけばよかったとか、そういう後悔もできねぇじゃん……」
小声でなにが言っているようだけどよく聞こえない。なんと声をかければいいのか。
「孝士……」
「分かったよ」
膝を伸ばしながら立ち上がった孝士は、手を私の頭に軽く乗せた。
「この一年が楽しかったのは俺も同じだし、塚本は東京に行っちまうし。『最後まで』、な」
含みを持たせた言い方に胸が痛んだ。
いくら近くに住んでいたって、なにか特別な関係がなければ私と孝士も離れてしまうだろう。めぐみとのように延長線の関係が続くとは思えない。それは孝士も分かっていた。
「塚本にはもう話したのか？」
「まだだよ」
「じゃあそれでいいや」
もう一度頭に手が乗る。今度は撫でられた。
手は冷たかったけど、すごく心地いい。
ありがとう、と心の中で呟いた。口には出しちゃいけない気がしたから。

「なんだよそれ、全部神頼みするほどのことでもねぇじゃん」
お手洗いに行っていた塚本くんが戻ってきた。どうやら話を聞かれていたらしい。
「俺と千伽は余裕合格だろ。佐々口は知らねぇけど」
「てめぇ」
「怪我はほっときゃそのうち治るし、三つめだって願う必要はこれっぽっちもねぇよ」
塚本くんは埃を払うかのように手を振った。
「まぁ塚本の言う通りだな。今だって三人でいるだろ」
初詣に三人で行こうと提案したのは孝士だった。
孝士と行く自体は毎年のことだからなんともない申し出のはずなのに、誘われた時泣きそうになったのはまだ記憶に新しい。
「おみくじ引こうぜ。一番運悪かった奴が屋台でたこ焼き奢りな」
「こういう時は言いだしっぺが泣く羽目になるのが定石だぜ？」
二人がどうでもいい話をしている姿を久しぶりに見る気がした。
もう何度目になるか分からない。聞こえないくらい小さな声で「ありがとう」と呟いた。

＊＊＊

内申も充分にあることだし、もう根を詰めなくても確実に合格すると学校の先生にも塾の講師にも太鼓判を押されたので毎日の勉強時間を半分に減らした。
その分の時間はパソコンに向かったり、図書室で調べ物をしたりするのに使っている。

世の中にある職業について調べるためだ。

なにをしたらいいのか分からないなら、まずなにがあるのかを知るところから始めるべきだということにようやく気づいた。

英語が得意だとは思ってきたものの、TOEICでどれくらいのスコアになるのか分からない。これでは自分が社会でどれだけ役に立てるのかも不明瞭だし、どれだけ頑張らなければいけないのか目標値も出せない。

インターネットで一つのワードを検索しただけでも膨大な情報が目にすることができる。真偽はともかく、数秒で手に入る情報を今までの私は野放しにしてきたのだ。

「そっか、英語だったら外資系の会社で働くっていう手もあるんだ」

でもそのためには英語を喋れるようにならないといけない。案外、読めるだけでは戦力にならない仕事ばかりだ。

高校生になったら英会話を始めるべきか。会話だとくだけた表現も多くなるだろうし、必要なのは寧ろそういったスキルだと思う。仮に仕事に使わなかったとしても損はしない。

将来のことを考えると微かに胃がキリキリとしていた。けれど今はなんともなくて、寧ろ色々な自分を思い描けて楽しかったりする。

そろそろ寝る時間になったので、インターネットの画面を閉じた。そのまま電源も落とそうとカーソルをスタートボタンに合わせたが、とあるアイコンに目が行く。

近頃はめっきり使わなくなった、チャットのアイコン。なんとなくカーソルを移動させてダブルクリックした。ログインするとホーム画面が立ち上がる。

連絡先は塚本くん一件だけ。もちろん今はオフライン。その塚本くんのアイコンに合わせてみる。過去の会話が見られることに今更気付いて、使い始めた三ヶ月前をクリックしてみた。

〝千伽はいつか自分でちゃんと決める。それは俺よりあんたが分かってることじゃねぇのかよ〟

見覚えのない塚本くんの発言が目に入ってきた。発言から見るに私と話しているものじゃない。

姉と言い争いになって家を飛び出した日を思い出す。あの時、塚本くんはチャットで姉と話していたと言っていた。

結構長く話していたようだ。手早く上にスクロールする。

〝千伽？　どうしたんだ返事しろよ〟

〝あの子なら出てったわよ〟

〝は？　千伽？　じゃねぇのかアンタ誰だ〟

〝お姉ちゃん〟

本当に話をしていた。覗き見しているような気分になりつつ、下にスクロールしていく。

〝あー、千伽や佐々口の話から察するに陰険ではないけど性格がくっそ悪い姉ちゃんか〟

その後、数行に渡ってお互いの悪口の応酬となっていた。あの姉相手にここまで突っ掛かってくる中学生なんて今までいなかったのではないだろうか。

〝それより、出て行ったってなんだよ。アンタなんか言ったわけ？〟

〝ちょっと突っついてやっただけ。だってあの子自分で全然動いてないのに「あれがない

これがない。だから自分にはなにもない」みたいでさ。ずっとあたしの影に居て大人しくしてたせいね。お父さん達も末っ子だからってなんだかんだ甘やかしてきたからなぁ〟

当時の私が見ていたら「誰のせいで」と反発していただろう。でも今なら姉の言うことが分かる。

〝千伽になにもないとかねぇよ〟

〝ないとは言ってないじゃない。けど積極性がなさすぎてないのと同じになってるの。あの子高校出たらどうするんだろう。適当な大学行ってＯＬやってる姿が簡単に想像できてため息出るわ〟

自分でも想像ができてしまった。絶対につまらない顔をしている。やりたいことを見つからず、ただ人生を消費するみたいに生きているような。

〝アンタ、妹が心配なのは分かるけど、ちょっと見くびりすぎなんじゃねぇ？〟

心配という言葉が出てきてぎょっとしてしまった。

あの人が私の心配をするだなんて、考えられない。

塚本くんの発言が続く。

〝確かにあいつは根が内気だしオドオドしててイラっとすることもあったけど、それは他人のことばっか優先して考えちまうからだ〟

〝それは、確かにそうね。道路の問題だってきっとそう。あなたのお家、賛成でしょう？

無意識に板挟みにされて動けなくなってる。決まる時は決まるんだから気にしなきゃいいのに〟

私に言う時と違って、棘の少ない優しげな口調だった。

本当に心配してくれている？

〝それにしても、短い付き合いなのに分かった風なこと言うのね〟

〝色んな角度から見るようにしてるから〟

〝なにそれ。千伽のこと好きなの？〟

〝好きだったら悪いかよ〟

体温が急上昇していくのが分かった。塚本くんから「好き」という直接の言葉は聞いていなくて。

いつからこんな風に想われていたんだろう。

〝アンタの中学時代がどうだったか知らねぇけど、中学生で将来プランを組んでる奴なんてそこまでいねぇよ。俺だって一応は考えてるけど具体的なところまでには至ってねぇし。千伽はいつか自分でちゃんと決める。それはアンタの方が分かってんじゃねぇのかよ〟

会話はここで途切れていた。恐らく塚本くんが私を探すために出て行ったからだろう。

時間にしておよそ十分間の短いやりとり。この中に、私の知らない二人が詰まっていた。

塚本くんは私が考えていた以上に私のことを大切にしていてくれたし、姉は私がとにかく気に食わないだろうと思っていたけど、そうじゃなかった。

チャットを終了させ、マウスから手を離す。力が入らなくてうなだれてしまう。

「……頑張ろう」

自分に言い聞かせるように呟く。

今までずっと立ち止まっていて、スタートラインにさえ近付こうとしていなかった。

これからだ。まだ全然遅くない。

＊＊＊

進路先が市内の中央高校であることがほとんどである第二中の卒業式は、そう感動的なものにはならない。何人かは昇星や優華に進むものの、ほんの少数だし市内であることには変わらないので、会おうと思えばいつでも会えてしまう。お別れという空気が生まれることはなかった。

私と孝士を除いて。

「受かるだろうなとは思ってたけど、マジで合格するとかつまんねぇな」

塚本くんは卒業証書が入った筒で孝士の肩を軽く叩いた。

「俺はお前の楽しみのために受験したんじゃねぇんだよ」

孝士は見事、昇星に合格した。覚えている問題を教えて貰ったら私なんかには到底解けない難問ばかりで、改めて昇星のすごさにおののいてしまう。成績優秀の塚本くんでさえ解くのに多少時間がかかったようだ。

「そういえば塚本の行く高校ってどんな学校なんだ？」

孝士が思い出したかのように尋ねる。

「一応進学校とは呼ばれるランク。ただ東大とか狙うわけじゃねぇからそこまで必死に勉強しなくてはいいくらいだな。昇星よりは数段階落ちる。なんだよ佐々口、自慢かぁ？」

「違ぇよ。先生達がお前のこと話してたの聞いて気になっただけだ」

塚本くんは「一応」なんて言ったけれど、学校名を聞いていたのでネット検索をかけて

みたらかなりランクの高い高校だった。確かに昇星には見劣りするものの、ただの公立高校に通う私からすれば二人とも頭が良すぎる部類に入る。

受験は案外苦労せず終わり、見直しをしてもほぼ問題なかったので心穏やかに合格発表の日を待つことができた。めぐみの学費免除試験は、本人の目標通り半額免除に合格したという。ご両親はあまりいい顔をしなかったそうだけど、めぐみ本人としては上出来と喜んでいた。

狭い地域に住む四人が全員違う高校へ進む。ここではなかなかない例だろう。

昨日、たまたまなのか私の卒業を知っていたからか、珍しく姉が電話をかけてきた。普段なら私とは話をしないのだけど、今回に限ってあちらから私を出すように言われた。

〝あんた明日卒業式なんだって？　一応おめでと〟

「ありがとう。お姉ちゃん、この間久しぶりにチャット開いたんだ」

奇襲をけしかけてみた。効果があったのか、受話口が数秒静かになる。

〝ふぅん、そう〟

姉にしては歯切れの悪い返事だった。

「去年帰って来た時のことまだ謝ってなかったよね。ごめんなさい。確かにお姉ちゃんの言う通りだと思う。だからちゃんと考えることにしたし、今もう考えてる」

また姉からの返事はない。こちらも言いたいことは全て言ったので口を開けなかった。

〝……まぁ頑張れば。本の虫だった根暗な頃と比べると大分マシになったんじゃない？ついでにめぐみにでも頼んでもっと可愛い服着なさい。高校入ったら今みたいな服装だと舐められるわよ〟

いつもの姉らしいストレートで遠慮のない言葉。素直に「うん」と答えて電話を切った。今度会うのはいつだろうか。その時はあのきつい香水の香りに少しだけ慣れているかもしれない。

「おい、千伽？」

姉との電話を思い出して意識が少し飛んでいた。塚本くんに呼ばれて引き戻される。

「どうしたんだよぼーっとして。どっか調子悪いか？」

「ううん、なんでもないよ」

孝士の心配顔に慌てて手を振って快調をアピールする。その様子を見た塚本くんが呆れ顔を浮かべた。

「佐々口って最後まで千伽のこと甘やかすのに終始してたな。もっと困らせたりするのかと思ってた」

「俺はお前と違って紳士なんだよ」

孝士の言動に困ったことなんて一度もない。好きだと言われた時は気が動転していてそれどころではなかったし。

「俺は紳士どころか天の邪鬼みたいな奴ですよっと。お前みたいな奴と一年も居れたのか不思議になってきた」

「それはこっちの台詞だっての。多分お前、生涯気に食わない奴ランキングでトップランカー間違いなしだわ」

二人がこうやって軽口を叩き合うのを見るのもこれで当分見納めなのかと思うと、式は

終わっているというのに今更寂しさがこみ上げてくる。
二人はお願いを最後まで聞いてくれた。今日まで、とても楽しかった。
「孝士、塚本くん」
筒を持つ手に力が入る。二人の視線が私に向いた。
「お願いを聞いてくれてありがとう。約束、守らないとね」

＊＊＊

卒業式の日に図書室に顔を出す人など先生でも生徒でもいない。その前の廊下もとても静かだった。
この廊下を歩くのも最後、と思うと一歩一歩を噛みしめたい気持ちになる。
図書委員になった当初はここへ来るのが不安で仕方がなかったのに、いつからかあの場所で過ごす時間がとても大事なものになっていた。
その不安や楽しさ、他にも色んな気持ちを私に教えてくれたのは、たった一人の男の子。
「思ったより早かったな」
図書室のドアを開けると、いつか見た光景が目の前に広がった。
受付カウンターの席に座って、本を読んでいる塚本くんの姿が。
「そう？」
「最悪来ねぇかもとも思ったからな。まぁ二番目で良かったけど」
孝士もまったく同じことを言ってた。「今回は後からがよかった」と。

確かにあの話を二番目にする人はそういないだろう。
「そこ立ってないでこっち来いよ」
本を閉じた塚本くんが手招きをしてくる。素直に従って隣の椅子に座った。
心臓の音が大きくなったのが、分かる。
「俺が聞いたのは二つだったな。一つは答え貰ったようなもんか。でも千伽の口からちゃんと聞きたい」
塚本くんの家に泊まった日に言われたことを思い出す。
一緒に来い。
友達をやめたい。
もう随分前のことなのに、当時の記憶は鮮明に残っていた。
姉と衝突し、反論しようのない図星を指されてうろたえ、孝士と塚本くんに想いを告げられる。
怒涛のようなあの日を私は一生忘れないだろう。あの日があってこそ、今の私がいる。
こちらを真っ直ぐ見つめる塚本くんの目にも、臆することなく応えることができるのだから。
「一緒には行けない。私はまだ子どもで、塚本くんと東京に行ってもなんにもならない。そんなの塚本くんの本意でもないよね」
視線を逸らさず言い切れた。声も震えなかった。自然に、思っていることを伝えられた。
「そうだな。俺もそれは勢いで言っちまった部分もでかかったし、今は一緒に来てほしいとは全く思ってねぇ。そもそも物理的に無理だしな」

塚本くんはそこで言葉を切り、「で？」という顔をしてくる。
心臓の鼓動がもう一段階大きくなった。
もう一つの方は平常心で答えられない。無意識に拳を作り、視線を逸らしてしまう。
孝士に返事をした時も同じようになった。直前になってなんと言ったらいいのか分からなくなったのだ。
それでも孝士は急かそうとせず、「ゆっくりでいい」と落ち着かせてくれて、少しずつ言葉を紡ぐことができた。
孝士にはいつまでも頼りっぱなしだ。もっとしっかりして今後は私が頼られたいと言ったら、孝士はこれでもかってくらいに笑って「楽しみにしてるな」と頭を撫でてくれた。
もう一つ、「あいつには遠慮するなよ」、と。
この言葉に秘められた孝士の胸の内を全て掬いあげることは、恐らくできていない。けれど、思い出すとなんだか心が落ち着いてきた。
一度唇を固く結び、視線を塚本くんと同じ高さに戻す。
今度は頭の中が真っ白になることはなかった。
「私も、友達やめたいよ」
塚本くんの瞳が大きく見開かれる。
「それは、俺が思っているのと同じ意味でいいわけ？」
履き違えないように、慎重に慎重を重ねた確認作業のような問いかけ。
「うん」
そう答えた次の瞬間、視界から塚本くんの顔が消えていた。首周りに制服のざらざらと

した感触。
私のじゃない心臓の大きな音が伝わってきた。
「長かった……」
塚本くんのだ。
「お前、本当に意味分かってんのか少し心配だったし、ムカつくけど佐々口選んでもおかしいと思えねぇし。あぁ、くそ。いいんだな、お前、俺のもんなんだな!?」
抱きしめられる腕の力が強くなる。いつもは冷静な塚本くんがこんな大きな声を出すのも珍しい。
塚本くんだって私と同じ十五歳で、差こそあっても私と同じような葛藤をしてきたのかもしれない。
返事がほしいのか、一度身体が離れる。びっくりしてこっちが恥ずかしくなるくらい、塚本くんの顔が赤くなっていた。
「なんだよ、笑いたきゃ笑えよ。けどお前だって今すっげぇ顔してるからな。茹でタコみてぇ」
そんなに赤面してしまっているのか。
「だ、だって塚本くんが俺のもんとか言うから」
「俺のこと好きなら俺のもんじゃんか。これからは一番に俺のこと考えて、優先して、欲しがるんだ」
欲しがるという言葉に過剰反応してしまった。
そうだ、私が塚本くんのものだというなら。

「それじゃあ、塚本くんは私のものなの……？」
口にして、初めて『友達を辞める』の具体的な意味を理解した気がした。
ただ好きってだけじゃない。欲が入り混じって、決して綺麗ではない。
それでも求めずにはいられないもの。
「そうだよ」
手を掴まれ、塚本くんの頬にあてられた。
「俺もお前のもんだ」
手のひらに唇が触れる。
微かに息がかかってくすぐったい。けれど頭の中はそんなこと気にもしていなくて。
恥ずかしい。でも、そんなところにじゃなくて。
「……なに、ここじゃ不満足ってか？」
手を放さないままで視線だけをこちらに寄こす。
いつも塚本くんが見せる、勝気な笑み。
「ちが」
「違う？　ふぅん」
もう一度手のひらにキスされた。
私が思ってること、全部見抜いてる。
それが悔しくて、少し嬉しくて、やっぱり悔しい。
「違、わない。けど、塚本くんだって満足してないくせに。もっと欲しがってるくせに」
言うつもりじゃなかったし、言ってはいけないことまで言ってしまった気がする。

塚本くんの目の色が変わったから。
「へぇ、意外にも千伽が積極的でびっくりびっくり」
手が離され、代わりに後頭部が掴まれた。逃げられない。
「ちょっとした冗談だよ？」
「それで逃げられると思うなよ。舐めんな。もう我慢してやんねぇ」
後頭部が少しだけ押される。徐々に塚本くんの顔が近付いてきた。
「……目閉じろよ。やりずらいだろ」
おでこが軽くぶつかった。視線が今まで一番近いところで交差する。
けれど思い出す。もうすぐこの人は遠くへ行ってしまう。
「塚本くん」
「なんだよ」
「東京行ってもチャットとか電話してくれる？」
「当たり前だろ。長期休みになったら帰ってくるし、千伽もこっち来いよ」
「うん、バイトしてお金貯めて行く」
「だったら、そんな顔すんな」
今自分がどんな表情をしているのかは分からないけど、目の端が少し冷たいことには気づいていた。
返事をここまで引き延ばした私に「寂しい」と言う資格なんてない。
けれど、離れがたい。
塚本くんの手が後頭部から離れて、目に溜まった涙を掬う。

その手をそっと握った。握り返されて、指が絡まる。
「千伽」
頭に直接響くような距離で名前を呼ばれて、心臓が跳ねる。応えるように目を閉じた。
ほんの数秒、唇に触れた感触は柔らかくて、温かくて。
無性に涙が出た。
刻みつけられた気がする、塚本くんが好きなんだと。

＊＊＊

塚本くんと離れて生活するようになってから三年が経った。
高校に入ってバイトを始めて、英会話教室にも通い始めて、めぐみとは相変わらず定期的に遊んで、学校で友達もできた。
私だけでもこの三年間で目まぐるしく環境が変わったのだから、N市だって景色を変えていく。
ショッピングモールの中の店は次々と入れ替わっていったし、近くに大手チェーンのボウリング場がオープンした。今じゃ高校生や大学生の溜まり場みたいになっている。私も併設されているカラオケに何回かお世話になった。
街がどんどん拓けていくのと比例して、北部では一部の地域が区画整理された。
「うちも諦めたよ」
学校帰りの高校生が集まるショッピングモールのフードコート。めぐみはストローでア

イスティーをかき回しながら静かに呟いた。
「それって」
「市に立ち退きの同意書渡した。両隣の家がもうハンコ押してたからね。うちだけ意地張り続ける気力はなかったのよ。両隣だけじゃなくて、今まで反対してきた家の半分くらいは陥落しちゃってるって話。これは千伽の方が詳しいかな」
両親から直接話を聞いたことはない。けれど、集会の回数は明らかに減っていたし、駅でよく見かけていた反対運動も日を追うごとにその規模を小さくしていった。
高速道路ができれば駅はもっと活性化されると市長は謳っていて、市道も整備されていくという。昔からの土地に縋り続ける理由がほとんどの市民にはない状態だった。開通はもう止められない。私達の家も、遠くない日になくなってしまうだろう。
「絶対にさせないぞっ！　署名は集まった。あとは市役所にデモを」
周囲が次々と諦めて長く住んでいた土地から離れる覚悟をしていく中で、うちはまだ頑固に反対をし続けていた。
一年前、おばあちゃんが病床で泣きながら伝えた願いを、お父さんとお母さんは躍起になって守ろうとしている。
『この店をここから切り離さないで』
おばあちゃんは亡くなる直前までおじいちゃんの名前とともに店の不変を訴えていた。
「千伽、お前も署名しなさい」
ガムテープを取りに居間に入ると、お父さんとお母さんが私に一枚の紙を突きだした。道路開通反対の署名紙だ。紙の隣にはご丁寧にボールペンまで置いてある。

うやむやに誤魔化せないだろう。ガムテープを机に置いて、二人の向かいに座る。

今までこの件で私自身の意見を表に出してきたことはなかった。だからといって関心を持たずなにもしていなかったわけではない。市が発行した資料を読み、反対派の訴えにも耳を傾け、自分なりにこの市の未来を考えてきた。

そうしてたどり着いた答えは。

「私は署名しない」

お父さんの平手が飛んでくるのが見えたけれど敢えて避けなかった。温厚で、殴られた記憶なんて皆無のお父さん。おばあちゃんが亡くなってからは反対派が減っていくにつれ、苛立ちを隠せない様子だった。

頬の腫れ一つでお父さんの怒りが少しでも発散されるなら安いものだ。私は冷静に話をしたい。

「お前、それでもこの家の娘か!? 父さんや母さん、おばあちゃんがどれだけ必死でこの土地を守ろうとしてきたか、一番近くで見てきたじゃないか！」

お父さんの隣で、お母さんは手で顔を覆っていた。小さくすすり泣く声が聞こえる。

それを見ても意見を覆そうとは思わない。

「見てきた上での答えだよ」

机の上に拳が叩きつけられ、ボールペンが転がって落ちた。娘を殴っただけじゃ落ち着かなかったようだ。

「お前は東京に行くからそんな無責任なことが言えるんだ。同じ市内とはいえ馴染みもない場所に移されて、愛着のあった土地が道路になっていくのを黙って見ていく人達の気持

ちになってみろ！　お前も千春のように帰ってこないからそういうことが言えるんだ！」
普段は表に出していなかったものの、近頃帰ってこない姉のことを気にしていたようだ。姉は大学を卒業後、N市に帰ってくると思っていた両親の期待を裏切って東京で就職した。
そして私も、明後日には東京の大学へ通うため引っ越しをする。部屋は今段ボールでいっぱいだ。
「高橋書店も俺の代で終わりだ」
うなだれた父はこの三年で小さくなった気がする。別に私が大きくなったわけではない。色んなものに板挟みにされ、守ろうとするものが自分の持つ盾より大きくなって、身を削られていったように見えた。
確かに、お父さんやお母さん、死んだおばあちゃんと比べたらこの店や土地に対する愛着は薄いかもしれない。
けれど私も十八年ここに住んで、近い内にこの家の景色が見れなくなるかと思うと寂しい。昔姉と描いた壁の落書きだってなくなってしまう。
悲しいよ。できることなら、ずっとここが今の形のままで残っていて欲しかった。
それでも、道路が街の未来へ向けて大きな力になるのなら。働き手が増えて活性化し、寂しげな街と言われなくなるのなら。希望のある変化を受け入れたい。
「お姉ちゃんがなにを考えているかは分からない。私も大学卒業してもすぐには帰らないと思う。四年間だけじゃ勉強しきれないし、社会で働いてみたいから。でも、いつかは帰って来て店を継ぐつもりではあるよ。姿形が変わっても、お父さん達が大事にしてきた店ま

でを失くすつもりはない。建て替え改装なんて気持ちにはなれないとは思う。でも残すから。繋げていくから。終わりだなんて言わないで」

拳を解いて欲しくてお父さんの手に触れる。皺が増えた、働く人の手。この手に私は育てられてきた。

「母さんになんて言えばいいんだ……」

「きっとおじいちゃんが宥めてくれるよ」

小さい頃に亡くなった、おじいちゃんを思い出す。顔は覚えていないのだけど、おおらかで笑顔が絶えない人だったと微かに記憶がある。

お父さん達から同意書にサインしたと連絡が来たのは東京に越してから数日後のこと。市には、「我々の犠牲があって成り立つものだと理解し、必ず活性化を成功させてほしい」と話したらしい。市も深く頭を下げてくれたという。

それから少し後、道路開通が正式に決定した。

＊＊＊

いくつか置いていく家具だけを残し、がらんどうになった部屋を見回す。壁が日焼けで少し黄色くなっていたようだ。今まで家具が置いてあった場所とくっきり色が違っている。

お父さん達には駅まで送ってもらい、夏休みには帰ると約束して別れた。改札の傍にある桜の木は蕾を膨らましていて、きっともうすぐ咲くだろう。そうなると東京はもう花び

らを散らし始めてるかもしれない。そんなことを考えながら最近は本数が増えた電車に乗り、新幹線に乗り込む駅へ向かう。

中学三年の夏を思い出した。親に内緒で東京に行ったことが当時はものすごい大事件で、浅草で二人を見失った時はもう二度と帰れないのではないかとさえ思ってしまった。

乗車までの時間に余裕を持たせている。新幹線の改札前にあるという待ち合い席で待ち合わせをするためだ。

何度か来ているので迷うことはない。目的の場所に着くと、見慣れた顔を見つけた。

「孝士！」

私に気づいた孝士は読んでいた文庫本を閉じて軽く手を上げた。

「久しぶりだな」

「うん。孝士が寮に入る時も結局会えなかったしね」

孝士は隣県にある昇星の大学部に進むことになった。勿論家からは通えないので春から寮住まいだ。私より一足早く引っ越しを終えて既にそちらで暮らしている。

「新幹線何時だっけ？」

「十時三十二分」

「あと一時間ちょいか。土産買ってくんだろ？　見に行こうぜ」

さりげなくサブバックを取られてしまった。こういう優しいところは変わらない。

中学卒業の時に予想した通り、孝士とは近所に住んでいてもほとんど顔を合わせなくなってしまった。孝士は一年生から予備校に通っていたし、私もバイトを始めたりしてお互いの時間が全く合わなくなったから。たまに顔を合わせても世間話をする程度の時間し

か取れなくて、今日こうしてわざわざここまで来てくれた。こんなゆっくり会うのは本当に久しぶりだ。

「何人分？　あっちのアパートの大家さんにも持っていくんだよな」

「うん。お隣さんは今居ないらしいから要らなくて、だから三人分かな。あんまり重くないのがいいなぁ。あと日持ちした方がいいよね」

「三人って、あぁ、千春さんか。元気してんの？」

「変わんないよ。あっちの部屋探すの付き合って貰ったんだけど、大家さん相手に部屋の文句言いまくりで冷や汗かいた。けど値切ってくれたおかげでいい部屋安く借りられたから感謝してる」

　中学の時は犬猿の仲だったお姉ちゃんとはそこそこ上手くやっている。この間は彼氏さんが着てきた服があまりにもダサいとかでわざわざ写メつきのメールがきた。確かにどれだけ贔屓目に見てもおしゃれとは言えず、その後の電話で大盛り上がりしたものだ。

「お姉ちゃんにはいいもの買っていかないと後が怖いなぁ。今後頼ることも多いだろうし」

「ここらへんの土産の値段は大体把握してそうだな。奮発しといた方がいんじゃね？」

「だよね」

　お姉ちゃんのだけ高くするのはなんだか気が引けたので、三人分全てちょっといいものにすることにした。お土産と一緒に新幹線の中で食べる軽食とお茶を買い、近くの喫茶店に入る。

「遠距離なんてすぐさま別れると思ってたのにな」

　二人ともコーヒーを頼んだ後の開口一番、不穏なワードが孝士の口から飛び出した。

「別れないで東京連れていくとか、あいつ今度会ったら叩きのめす」
「東京行くのは私が決めたことだよ。どうしても行きたい学科があって」
「分かってるけどさ」
不機嫌そうな顔は小さい頃から変わらない。
高校に入ってますます背が伸び、大人らしい顔つきになった孝士は中央高校の生徒からも人気があった。男子校だというのにバレンタインチョコを袋一杯に持って帰って来た時はさすがに驚いて自分の分をあげるのをためらった程だ。結局チョコは奪われるようにして孝士の手に渡ったのだけど。
告白された回数も両手じゃ足りないだろう。その中で一人だけ付き合った子を知っている。明るくてよく喋る、可愛らしい中高の後輩だった。
「孝士、なんであの子と別れたの？　うまくいってるように見えたけど」
その後輩の子とは委員会が同じで、私が幼馴染だと知ると食べ物や服の好みを聞いてきた。一途でいい子だと思っていたのに。
「……あいつさ、とにかく明るい奴だったろ」
「うん」
「千伽と真逆だよな」
「そう言われると、そうだね」
「だから付き合ったんだよ。千伽のこと、そういう意味で想うの止めようって」
コーヒーがやってきたのに手をつけられなかった。
私のことなんか、とっくにただの幼馴染になっていると思ってたのに。

「付き合っていく内にあいつのことは好きだと思えるようになった。けど、千伽と比べたらどうしても天秤が一瞬で傾いて、それが申し訳なくて別れた。自分でも未練がましいと思うよ」

なんと言い返したらいいのか分からない。この三年間、私は無自覚に孝士を傷つけてきたかもしれないのだ。

「悪い、変なこと言ったな。そんな顔すんなって」

孝士は自分と私のカップに角砂糖を入れる。私の方には二個。ずっと前に話した好みを今でも覚えていた。

「だから大学入ったら本腰入れて千伽以上に好きになれる奴探そうと思って。勿論勉学にも励むけどな。目標はお前らより早く結婚で。お前らって家のこともあるだろうけどなんかのんびりしそうだよな」

冗談交じりの孝士につられて小さく吹き出してしまった。ようやく手が動き、スプーンでコーヒーをかき混ぜる。

「結婚か。するのかな」

「三年付き合って別れなかったんだからしろよ。しなかったら俺の失恋を返せ」

「何回も別れる危機に陥ってるよ？　この間も東京の家のことで喧嘩したし。しばらく連絡取らなかった時もあったな」

一番酷かったのは二年の六月ごろの喧嘩だっただろうか。原因は今考えると馬鹿らしいもので、あの時は二ヶ月近く連絡しなかった。さすがに自然消滅を示唆してめぐみに相談したら「新しい彼氏作れば？」と一蹴されてしまう始末。

結局、お盆にこちらに戻ってきた彼が来襲のごとく家にやって来て連れ去られ、お互いの顔を見たらどうでもよくなって仲直りした。

「それを早く言えよ……。いつでも付けこんでやったのに」

「うーん、でもそんな理由で孝士になびいたってあまり良くないと思うよ。それに、多分そうはならないだろうし」

程よい甘さのコーヒーを一口飲む。孝士は少し驚いたような顔をしていた。

「千伽、少し変わったな。なんというか図太くなった？」

図太いだなんてストレートに聞かれるのも珍しい。

「そうかもね。少し似ちゃったのかも」

その似ちゃった相手がこれを聞いたらなんと言うだろう。それを想像したらおかしくなってしまい、孝士と二人で小さく吹き出した。

東京駅のＪＲ中央乗り換え口。当初駅構内が迷宮のように思えた私を気遣って、待ち合わせ場所はいつもここ。

改札を出ると、いつも同じ柱に寄りかかっている待ち合わせ相手の姿が見える。孝士ほどではないものの背が伸びて、茶色の髪は中学の時より少し短くなった。彼は携帯をいじっていてこちらには気付かない。

少し重く感じていたサブバックが気にならなくなる。

距離が半分くらいになったところで彼がこちらに気付いた。

「楓く……」

目が合ったかと思うと、楓くんは突然怖い顔をして携帯をズボンのポケットに仕舞い、
「新幹線乗る前に佐々口と会ってたんだろ。なにもされてねぇよな!?」
私の肩をものすごい力で掴んできた。
「え、なに、会ってたけどどうしたの？」
「あの野郎、『次に千伽と音信不通になったらその間に俺が奪ってやるから、安心して結婚式にお呼ばれされろ』ってメール寄こしやがった。電話したらワンコールで切りやがるしそもそも千伽の到着時間に合わせてメール送ってくるのがいけすかねぇ。次会ったら三ヶ月病院から出れなくしてやる」
まさかそんなメールを送っていたとは。孝士はこの三年で茶目っ気が備わった気がする。
「全治三ヶ月って何年刑務所入るつもりなの。私そんなに待てないから絆創膏一つで済むくらいにしてね。あと孝士とはなにもないよ。逆に乗り換えることはないって宣言したから安心して。というわけだからこれ持ってほしいな。楓くんの分もあるから」
楓くんが少し大きい声を出したせいで、通行人の何人かがこちらに注目してしまっていた。恥ずかしい。お土産の入った袋を楓くんに押しつけながら足早にその場から離れる。
「そっちのバッグも寄こせ。なにもないんだったら、いい。腹立つけどあいつだけは一生油断できねぇからな」
サブバックとお土産袋を渡したことで空いた手が取られ、楓くんの手が繋がれる。三年間でこの動作にもすっかり慣れた。
会うのはこちらの部屋を決めて以来だから二ヶ月振り。その時は部屋決めで喧嘩別れを

したから手は繋がなかった。
久しぶりに触れる楓くんに嬉しくなって、少し手に力が入ってしまう。すると楓くんは「なんだよ」と照れ笑いを浮かべた。昔だったら照れ隠しで苦々しい顔をしていたのに。この三年で性格が柔らかくなったと思う。
「引っ越し業者くるの明日なんだよな？　今日は姉ちゃんのとこ泊まんの？」
「うん。お姉ちゃんの仕事終わったくらいの時間に行くから七時過ぎかな。楓くんも来いって。入学祝いでご飯奢ってくれるみたいだよ」
「え」
楓くんはあからさまに嫌そうな顔をした。
「お前の姉ちゃんが素直に入学祝いとかするわけねぇじゃんか。絶対なにかある」
「私もそう思うけど……。でもここで行かなかったら余計に面倒なことにならない？　あと会うの久しぶりなんだから長い時間一緒に居たいよ。これからは頻繁に会えるけどさ」
急に楓くんが立ち止った。気付かず歩いていた私は一歩先に出てしまう。
「楓くん？」
「なんで今日そんなデレッデレなんだよ……。いや久しぶりだし今後は遠距離じゃなくなるからだろうけど……」
なにやら一人でブツブツと呟いている。
「どうしたの？　なにか見たいものでもあ」
最後まで言えず、顔になにかがぶつかる。視界が楓くんの着ている黒いコートでいっぱいになった。

「やっぱ俺ん家の隣の部屋にさせるんだった」
「ちょ、離して楓くん！　ここ往来だから！　あと楓くんのマンションは家賃高すぎるから無理だって！」
　部屋決めで起こった喧嘩の原因はこれだ。
「そしたら俺が千伽の部屋の隣に引っ越す。大学も違ぇし、忙しくなったら会えないだろうが」
「契約まだ一年残ってるんだから勿体ないことしないの。それに自転車範囲内の距離なんだし充分近いでしょ？　バイトの日をうまく合わせたら時間作れるよ」
　なんとか腕の中から抜け出す。周囲の人のほとんどがこちらを好奇の目で見ていて、恥ずかしさは先ほどの比ではない。立ち止まり続ける楓くんを引っ張るようにして歩き出す。東西線のホームに上がった。電車が来るまで四分。
「千伽は俺が傍に居なくていいのかよ」
　むすっとした態度で尋ねられた。これは結構しょぼくれてる。
「今までと比べたらびっくりするくらい近いじゃない。もっと近くにって言ってくれて、嬉しかったよ。でも私、楓くんの傍に居るためだけに東京に来たわけじゃない。大学でちゃんと勉強するのと、一人暮らししてしっかりした人間になりたいからだし。あんまり近くに居たら頼り過ぎちゃいそうで、きっとお互いのためにならないと思うの。だから、そういうことは大人になるまで取っておこうよ。結婚したら同じ屋根の下じゃない」
「！　け、結婚ってお前」
　みるみる内に楓くんの顔が赤くなっていく。大衆の目の前で抱きしめて来た人と同一人

物とは思えない。
「しないの？」
「するに決まってんだろ！　お前以外の誰とすんだよ」
きっぱりと断言される。今、かなりにやけてしまっているかもしれない。
けれど楓くんと結婚するには少なからず問題がある。塚本家のことだ。
「次男だからって、分家のトップが私みたいな一般庶民と結婚なんてまずいよね」
「それは、うん。そうだろうな」
否定したい気持ちでいっぱいなのだろう。先ほどとは打って変わってはっきりしない。
「ちょっと話変わるんだけど、孝士、私達より早く結婚するのが目標なんだって」
「なんだそれ。よく分かんねぇけどいい度胸だな。あいつ今彼女もいねぇじゃんか」
「のんびりしそうって言われちゃった。いくら孝士でもさすがに黙ってられないな」
「絆創膏三枚に増量すっか」
「で、話は戻るんだけど。楓くんにはもっと無茶を言おうかなって」
新幹線に乗っている間、少し先のことを考えてみた。
東京に定住はしないでN市に戻ることはもう楓くんに言っている。お姉ちゃんは今の仕事を天職にしているし、きっと家は継がないだろう。だから私が継ぐ。口にはしてないものの、楓くんもそれを察していると思う。
その未来を掴むためにはどうすればいいのか。答えは一つしか浮かばなかった。
「楓くん、私のお婿さんになって」
言葉にしてからこれはどう考えてもプロポーズでしかないことに気付いた。証拠に楓く

んが硬直している。ここで止めるとややこしいことになりそうなので無視して続けることにした。

「大学卒業して、私は翻訳家、楓くんは弁護士として一人前になって、時が来たらN市に戻って本屋を二人で継ぐの。私は家で仕事できるし、楓くんは個人事務所作ってN市の人達を助ける。それで、たまに一緒に店番するの。中学の時の図書当番みたいに」

勝手なことを言っているという自覚はある。でも楓くんも本屋も譲ることはできなかった。

楓くんと出会って、強くなったしわがままにもなったと思う。これがいいのか悪いのかは分からないけれど、楓くんが居てくれたから生まれた気持ちだ。

アナウンスが流れ、乗りたい電車がもうすぐ来ることが知らされる。ほどなくしてホームに水色のラインの電車が入ってきた。

「ま、そうなるよな」

しばらく黙っていた楓くんは乗車ドアが開いた電車に乗り込んだ。手を繋いでいる私も続いて乗車する。ここから二駅なので空いている座席には座らず、乗車ドアの脇に寄りかかった。

「元々弁護士になろうと思ったのはうちお抱えの顧問弁護士がろくな奴じゃなかったからだし。他もあんな奴らばっかなんだったら俺がなるって思ったんだよな」

初めて聞いた。弁護士になるという話は高校に入ってすぐに教えて貰っていたけれど、そんな理由だったとは。

「東京で成功したいって野望もねぇからあっちに戻るのは構わない。寧ろあれだな、行く

行くは市長にでもなって市政牛耳るか。お前の家に入るのも全然問題ない。お前と居られるなら、なんでもいいよ」

少し不穏な発言が聞こえた気がするけれど、我がままを聞いてくれた。嬉しくて抱きつきそうになるのを我慢する。

「壮大な計画になっちゃったね」

「まずは大学卒業して一年くらいで結婚だな。佐々口の鼻を明かしてやる。だから大学行ってる間に家を黙らせるぞ」

きっと思い描いた計画通りにはいかない。困難がたくさんあるだろうし、二人で深刻な大喧嘩もするだろう。

それでも、繋いでいる手が離れるビジョンは全く浮かばない。

ずっと彼の隣にいるし、彼も私の隣で笑ってる。そんな想像はいくらでも生まれた。

Dear My Life
貴水玲
Illustration: ヒトエ

あらすじ

母の勧めでN市の優華女学院高等部に入学した花は自分とそっくりな旧家の娘・ありさと出会う。父方の親族との確執、噂や学校でのいじめ、王子様のような星流と過ごした夏休み……様々な出来ごとを通して花は新しい自分を見つけて行く。やがて対立していた従姉のありさとも少しずつ心が通い始めるが、星流から留学すると告げられ、さらに自分に近付いた本当の理由を聞いてしまうが……。

十河　星流
（そごう　すばる）

高二。政治家一族の息子で女子に人気が高い。

西野　花
（にしの　はな）

高一。何事にも一生懸命な、素直で心優しい少女。

塚本　ありさ
（つかもと　ありさ）

高一。プライドが高く利己的な旧家の娘。

＋

西野　咲
（にしの　さき）

花の母親。東京でクラブを経営している。

第六話　君がくれたもの

有川家の玄関先で倒れた花は近くの病院に運ばれた。

意識はすぐに回復したもののかなり熱があった。そのため、そのまま一晩入院し翌日アパートに帰ってきた。

「七度九分か……。うーん、まだあるわね。今日は安静にしてなきゃね」

アパートの花の部屋。デジタルの体温計の示した数字に少し眉をひそめ、咲は花の額に貼ってある冷却シートをはがした。

「昨日はごめんね、ママ。心配かけて……」

新しいシートの冷たさがひやりと額に触れる。ロフトから咲がおろしてくれた布団にくるまりながら、花は小さな声で言った。

突然花が倒れたので有川家では大パニックになったらしい。

咲は「花が死んじゃう！　救急車！」と取り乱し、それを落ち着かせながら百合子はちょうど帰って来た夫に車を出すように命じ病院に連れて行ってくれたそうだ。

医者の診断は風邪。

点滴を打ってもらって一晩入院し、薬をもらって帰って来た。たいしたことがなくてよかったけれど――皆に迷惑をかけてしまったことを知って花は申し訳なく思っていた。

「まあ、びっくりしたけどね、でももとはといえばあたしのせいだし。やっぱり先に病院に行くべきだった。ダメね、子供のことを一番に考えるべきなのに自分の都合を優先して」

「違うよ……！　塚本さんの家には私が行くって言ったんだもん。それにあの時はまだ平気だったし」

「うそ。無理してたんでしょ？　花は昔から我慢強い子なのよね。それを知ってるはずなのに、その我慢にあたし時々甘えちゃうのよね……平気だって言えるならちょっとくらい大丈夫かな？とか。――そんなわけないのよね、本当は。ごめんね、花」

「違うよ……ママのせいじゃないよ」しゅんと肩を落とした咲の姿に、花は体を起こした。

「無理なんてしてないよ。ちょっとだるかっただけで、ほんとに平気だったし。私が甘く見てたの、ママは病院いこうって何度も行ってくれたのに。――ママはいいママだよ。私のことちゃんと考えてくれてるし、こうやって大事な時には一緒にいてくれるじゃない」

咲が顔を上げた。泣きべそ顔の子供みたいに眉を下げ口をへの字に曲げている。必死に涙をこらえているのだろう。

きっとこんな顔お店の人たちやお客さんは知らないんだろうな――そう思うとおかしくて吹き出しそうになった時、突然抱きつかれた。

「花～～！　あんたなんていい子なの、本当にあたしの子！？　ごめんねごめんねごめんね！　もっとしっかりしたママになるから許して！　――て、あっ！　ダメじゃない」

と思ったら、今度はばっと体を離し、花を布団の上に押し戻した。

「ちゃんと寝てなきゃ！　よーし、今日は栄養のあるものたくさん食べなきゃね！　百合子さんが食材買っておいてくれたから腕をふるうわよ」

タオルケットで花をしっかりと包み終えると、咲は腕まくりをして立ち上がった。

「うん、ありがとう」

――なんだか……いいな。

こうやって一緒にいると、離れて暮らしているのが嘘みたいだ。

小さい頃も花が病気になると咲はいつもこうして看病してくれた。普段は仕事で忙しい咲がそばにいてくれるのがうれしくて、こっそり「治りませんように」なんて祈ったことを思い出す。そして本当は苦手な料理をこの時ばかりは頑張ってくれるのもうれしかった。

――あんまり出来ばえはよくないんだけどね。

くすりと笑って花は白い天井を見上げた。

小さな息をひとつ吐いて、まだ少しぼーっとする頭で昨日のことを振り返る。

塚本家に行ったこと。星流が会いに来たこと。そして残酷な宣告をされたこと……。

――うそじゃないんだよね……。

留学すると星流は行った。もうすぐイギリスに行ってしまうと。そして――。

考えたくない。

花は寝がえりを打った。

あの時の気持ちが戻ってくる。胸が苦しくて、どうにかなりそうだった。でもそんな時でも利口になろうとしていた自分がいた。やっぱりそうなんだと納得しようと必死になっ

ている自分がいた。
傷ついてボロボロになって、今の自分よりだめになるのが怖いから。
そう溢れ出そうな感情をなんとか食い止めようとしたけど、結局うまくいかなかった。
頭をよぎるたびに泣きそうになる。咲は察しているのか何も聞かないけれど、星流の話題が出たら平気なふりなんて出来そうもなかった。
『嘘なんか一つもないし、利用するためなんかじゃない』
あの言葉が離れない。自分を正当化するための出まかせかもしれないのに、もう一度確かめたいなんて思ってしまう。
――でも、もうそんなこと出来ない……。
そんな勇気も話せる自信もない。じゃあどうしたら――？　目を閉じて花は息をついた。
少し休もう――きっとそれがいい。
こんな弱気な気持ちのままじゃ何も浮かばない。きっと体調がよくなれば少し気分も変わるだろう。そう決めてもう一度寝返りを打った時、
「ねえ、花ぁ。おかゆってお水どのくらい入れればいいんだっけー」
キッチンから咲がまじめな顔で訊いてきた。
思わず苦笑した途端、強張っていた体の力がふっと抜けたのを花は感じた。
困っている咲に指示をして、花は眠りについた。
その後二日学校を休み、ようやく花は登校した。
たった三日休んだだけなのにすごく久しぶりな気がした。見慣れたはずの同じ制服の生

徒たちも、校舎も、廊下を歩くのも何だか新鮮で、まるですべての感覚が初期化されたみたいな感じだった。

「あっ、花だ！　おはよー、大丈夫？」

そっと深呼吸して教室の扉を開けると、すぐに絵里と亜樹が気付いてくれた。いつもと同じ朝の始まりが花の緊張を解いてくれた。

「おはよう、もう平気なの？　急に三日も休むから心配したよ」

「うん、ごめんね、急に熱が出ちゃって。風邪だって。もう大丈夫だよ」

本当はまだ少し微熱があるのだけれど。今回の風邪はどうも長引いているらしい。しかも寝ている間にどこかにぶつかったのか、青あざが出来ていたりして何かいつもと違う。

でもこのまま休んでいたら授業にも遅れてしまう。咲もずっとお店を放ったらかしにしておくわけにはいかないし、何よりずっと寝ていると余計なことばかり考えて気が滅入って仕方なかった。だから今朝も少しだるかったけれど咲には黙って来てしまった。

「でもまだ顔色よくないね。無理しない方がいいよ」

「大丈夫だよ、ありがとう」

気遣ってくれる絵里に花は笑顔を返した。

――やっぱりいいな……。

こうして絵里と亜樹といるとほっとする。以前は学校は憂鬱で仕方なかったけど、今は大好きな場所だ。こうして居場所があるのがすごくうれしい。そう幸せに浸っていると、

「そういえば塚本さんも昨日から登校してるよ。謹慎終わったんだね」

亜樹が思い出したように言った。

そうだ、ありさの謹慎は三日間だったのだ。どうしているだろうか。大丈夫だろうか。ありさの場合はきっと、環境も友達との関係も今までと同じというわけにはいかないだろう。何事もなく過ごせているだろうか。

ぽつぽつと不安要素が浮かび上がってきて心配になっていると、予鈴が鳴った。

――後で様子を見に行ってみようかな……。

そう決めて花は席についた。

結局午前中ありさには会えなかった。

休み時間にそっとクラスを覗きに行ったが姿は見えず、お昼休みになってしまった。

「今日はあたしたちもお弁当だから中庭に行こう」

絵里と亜樹に誘われて、花は二人と一緒に中庭へ向かった。

今日は咲がお弁当を作ってくれた。咲は今日の夕方東京に戻ることになっているので、最後に頑張ってくれたらしい。

大事にお弁当の包みを抱えて中庭に出ると、すでに何人かの生徒たちがベンチでお弁当を広げていた。校舎と校舎の間にある中庭は一面芝生が敷かれていて心地のいい場所だ。二人と一緒にあいているベンチを探して中心部付近へ来た時、花壇の向こう側、広場の隅にあるベンチを囲むグループに目が止まった。

あれは――ありさといつも一緒にいた取り巻きたちだ。そして彼女たちに囲まれてベンチに座っているのは、ありさだった。

「ちょっと、花どこいくの？」

絵里の呼びかけもよそに花は走り出していた。その時彼女たちの声が聞こえてきた。
「ちょっと何とか言いなさいよ。今までと同じようにはいかないんだから」
「そうそう。地主の娘だから仲良くしてやってたけど、もうこれからはないから。あたしたちも泥棒の仲間とか思われたくないし。もう偉そうにされるのもウンザリだしさ」
次々と浴びせられる罵倒にありさは黙って下を向いている。
「ていうかよく学校来れたよねー。ふつう気まずくてムリじゃない？」
「ほんとよね、帰った方がいいんじゃない？　そこどいてよ。あたしたちが座るんだから」
一人がありさの腕を掴んで無理やり立たせようとした。
「やめてください！」少女たちを押しのけて花はありさの前に立った。
「ら、乱暴はやめてください……！」
「なに？　西野花じゃん。なんでかばってるわけ？　あんただって被害者でしょ」
少女の一人が詰め寄ってくる。他の少女たちも睨みつけてくる。ひるむな——そう言い聞かせ芝生を踏みしめる足に花はぐっと力をこめた。
「えー、ちょっとあれ、いじめ？」
その時背後から上がった大きな声に少女たちがびくりと肩を震わせた。
「しかも複数犯。怖っ。先生に報告しといた方がいいかなあー」
絵里だった。わざとらしく大きな声で亜樹と話している。その大音量に中庭にいた生徒たちが気付き出したため、少女たちは「い、行こう」とそそくさと逃げて行った。
——た、助かった。
ほっとした直後足から力が抜けて、そのまま花はありさの座るベンチに座り込んだ。

「……何やってんの、あんた」
隣からありさが呆れたような目つきをよこした。そこへ亜樹と絵里が駆け寄ってきた。
「大丈夫？　花ちゃん」
「う、うん、ありがとう。二人のおかげで助かったよ」
よかったねーと言った後、絵里と亜樹はありさのことに気付き笑顔を消した。どうしたらいいかわからない様子で互いに顔を見合わせた二人に花は言った。
「ごめん、私今日塚本さんと食べてもいいかな」
自分とよく似たありさの顔に驚きの色が浮かんだ。絵里と亜樹にとっても意外な行動だったようだったが何も聞かずに「いいよ」と言ってくれた。
「いいかな？　一緒して」
「……勝手にすれば」
ありさはため息をつきながらパックのお茶を飲み始めた。
花は膝の上で包みをほどきお弁当箱のふたを開けた。お弁当の中身は想像通りほとんど冷凍食品だった。隅に入っているこげた卵焼きだけはお手製らしい。卵と格闘する咲を思い浮かべながらいただきます、と花は手を合わせた。
「……なんで助けるようなことしたのよ。頼んだ覚えはないわ。それとも今までの仕返しにわざと助けたの？　あたしをみじめな気分にさせたくて」
きつい口調でありさが言った。でも不思議と怖くはなかった。むしろ今までと同じ調子であったことに花はほっとして、卵焼きを一つ口に入れた。
「そんなんじゃ……ないよ。ただ気付いたら走ってただけ。でも結局私も助けてもらっ

ちゃったから、あんまり役に立たなかったね」
情けないけど睨まれた時ちょっとひるんでしまった自分を思い出し、花は苦笑いした。
「……そう」意外にもありさはそう返してきただけだった。
今までなら即座に反論してきたのに。そのかわりに聞こえたのは小さな呟きだった。
「……別に心配なんてしなくていいのに」
自然と口元が緩むのを花は止められなかった。
ありさとの距離が少しずつ近づいている。初めの頃は絶対に無理だと思った関係が変わり始めている。
不思議だった。N市に来てから花の世界は大きく変化し続けている。大変なこと続きだったけれど、今まで諦めてきたたくさんのことが今はそばで花を支えてくれている。
「そういえばあんた、星流先輩と話したの？」
おかずに箸を進めようとした時、ありさが見計らったように聞いた。
「……うん……この間会ったよ。留学するんだってね」
出来るだけ意識しないように言った。でも急に食欲がなくなってしまった。
「あたしたちに近付いたわけも聞いた？」
「……うん」
「そう。深追いせずに済んでよかったじゃない」
きっぱりしたその声に、花はありさの横顔をそっと伺った。
「塚本さんは……平気なの？」
「何が？」

「だって……その、星流先輩のこと好きだったんでしょ？」
「まあ、そうね。でもくよくよ悩んでもしょうがないから、やめたの」
「え？」
　飲み終わったパックを膝の上のコンビニの袋に入れ、ありさがこちらを向いた。
「告白したの。でもダメだった。けど本当のことも聞いたし、言いたいことも全部言ったしきりがついたの。だからもう落ち込まない。――あんたは？　星流先輩に言ったの？」
「ま、まさか！」ぶんぶんと花は首を横に振った。
「そんなの無理だよ。それに私のことも、きっと利用しようとしてただけだから……」
「……ふーん」袋を持ってありさがベンチから立ち上がった。
「じゃあそのままウジウジ悩んでくの？　そんなちっとも納得してないような顔で。ほんとにあんた星流先輩とちゃんと話したの？」
「それはーー……」
　口ごもって花は下を向いた。話したつもりだった、でも全然すっきりしない。あの時、帰る星流を引き止めるべきだったのかもしれない。そんな思いが胸の片隅に残っている。
「あんた、あたしに言ったじゃない。今のままじゃ何も変わらないって。人に頑張れって言っておいて自分は逃げるの？　もう先輩とは会えなくなるのよ」
はっとして顔を上げたが、ありさはすでに校舎の方に歩いて行ってしまっていた。
　箸を持った手を動かせないまま、花は遠くで鳴る予鈴のチャイムの音を聞いていた。
「いーい？　何かあったらすぐに連絡するのよ？　ぜったい無理しちゃだめよ」

夕方、東京へ帰る咲を見送るため花は駅へやって来ていた。
顔を両手で押さえこまれ、何度もしつこく確認される。いいかげんうんざりして「わかった、わかったってば」と花は咲の手を引きはがした。
今はちょうど大勢の学生やサラリーマンが行きかう時間で駅は人通りが多くなってきている。ちらちらと見られているのは気のせいではないだろう。
「ほんとに平気？　まだいようか」
「大丈夫、百合子おばさんだっているもん。それにこれ以上休んだらお店つぶれちゃうよ」
ここのところ毎晩遅くお店から電話が来ていることを花は知っている。咲の経営するクラブのお客の多くは、ホステス時代の咲の常連客だ。皆言い訳に困っているに違いない。
「そう……？　そうよね、わかったわ。じゃあ、行くわね」
ようやく納得すると、咲は瞬時にモードを切り替えた。甘い母親から夜会巻きとスーツの似合うクラブの経営者に。きりっと背筋を伸ばすだけで、もとから人目をひく容姿が際立ちたちまち周囲の視線を一人占めにする。
手を振りながら咲はキャリーバックを引いて改札へ向かった。花も大きく手を振った。
またいつもの生活に戻る時がきた。ちょっと寂しいけれど。改札を通ったのを見届けて花は引き返そうとした。でも踵を返した途端、
――あれ？
足がふわっと浮くような感じがして花はその場に尻もちをついてしまった。
「花！？」
呆然と座り込んでいると、人をかき分けて咲が走り戻ってきた。

「どうしたの？　平気！？」
「う、うん……ちょっと目まいがして」
なんだろう。体が重い。うまく力が入らない。
「花……これどうしたの？」
座り込んだ花の足の二つの痣を見て、咲の顔色が変わった。みるみるうちに青ざめていく。そして今までにないくらい強張った声で言った。
「花……病院に行こう。今すぐ」

タクシーに乗り連れていかれたのは総合病院だった。
受付を済ませ待つこと数十分、名前が呼ばれて花は咲と一緒に診察室に入った。
「あの、血液検査をお願いします」
痣や貧血症状のことを手短かに話した後、咲は担当医にそう言った。突然の要求に医者も驚いたようだったが、花は切迫した様子で「お願いします」と頭まで下げた。
――ただの貧血なのに何で血をとるの？
大げさではないか――そう思ったが口出しを出来る気配ではなかった。医者の方も「そうですね、ちょっと調べてみましょうか」と頷いたので、花は採血をすることになった。
「……ねえママ、どうしたの？」
検査の結果を待つ間、咲は一言もしゃべらずただ体を固くして座っていた。いつもと様子が全然違う。もう診察時間外のため他の患者はいない。静かな院内の空気も手伝って不安が増し、花は咲の肩を揺すった。「ねえママったら」

咲はこちらを見ようともしなかった。瞬きすら忘れたように床の一点を見つめている。怖くなってもっと揺さぶろうと思った時、診察室のドアが開いた。

中ではさっきの医師がパソコンの画面を見ていた。花と咲が丸椅子に座ると、少し渋い表情で向き直った。

「全体的に数値が正常値より低めですね。特に好中球と血小板の減少が問題です。早急に検査を行った方がいいでしょう」

「検査……それって入院ということですか？」

花は驚いて咲の方を見た。入院？　何を言ってるの？　だが咲は血の気のひいた顔のまま医師をじっと見つめている。

今夜から入院をと医師は言った。疑うべきいくつかの病気を調べるために、明日〝骨髄穿刺〟を行うと。骨髄穿刺とは骨髄より血液を採取して異常細胞の有無などを調べる検査らしい。今花の体内では何らかの原因で正常な血液を作る機能が低下している、痣や貧血症状はそのせいだ、だから何が起きているか調べなきゃいけないと医師は説明してくれた。

「ママ……私病気なの？」

入院手続きを終えて看護師が病室に案内された後、花はたまらず聞いた。

ただの風邪だと思っていた。そのせいだと思っていたのに――検査入院なんて。白血病がどうとか言っていた気がする。押し寄せてくる不安に花は咲のスーツの袖を掴んだ。

「まだわからないわ、検査してみないと。でも大丈夫よ、そんなに時間もかからないって言ってたでしょ」

花の頭をぽんぽんと撫でて咲がにこと笑った。でもなんだか――表情がかたい。無理をしているような感じだ。

「ママ、どうして血液検査してって言ったの？　風邪じゃないってわかってたの？」

痣を見てそう気付いたとしても何だか変だ。咲は病気なんて詳しくないはずなのに。

「念のためと思っただけよ。花、いつもの風邪の時とちょっと様子が違ったし、心配になったの。あ、あたし、これからアパートに戻って着替えとってきちゃうわね」

すぐ戻るから、と言って咲は病室を出て行った。釈然としない気持ちのまま、花は白いベッドの端に腰を下ろした。

翌日九時から血液内科に案内され、花は骨髄穿刺を受けた。

「ちょっと痛みますが頑張ってくださいね」担当医師にそう言われひどく緊張したが、麻酔のおかげもあって気が遠くなるほどの痛みではなかった。

病室に戻ってベッドに横たわると、待っていた咲が「大丈夫？」とそばにやってきた。

昨夜はアパートに戻ったが、今朝早くから咲は病院へ来てくれた。事情を話し、しばらく休むとお店には伝えたらしい。心配すると常連さんには後で連絡するわと言っていた。

学校へは検査入院の旨を伝え休むことになった。皆にどう思われるだろう。後で絵里と亜樹にはメールで知らせておかなきゃ――そう思いながら違和感の残る背中を花は布団の中でさすった。

そして数日後、医師からの病状の説明があった。

突発性の再生不良性貧血。日本でも患者数の少ない特定疾患の一つで難病だという。

簡単に言うと、骨髄内の血液がうまく作られずに血中の白血球・赤血球・血小板が減る病気だ。そのために貧血や内出血、発熱などが起きるが、自覚症状がないこともあり、気付いた時には重症に陥るケースも多いという。花は重症度2、中等症と診断された。

「ああ、そんな……」病名を聞いて咲が両手で顔を覆った。

さらに治療について医師は話し始めた。

これから免疫抑制剤を投与する免疫抑制療法を始めること――多くの患者がこの治療で普通に生活が出来るまでに回復しているという。だが結果次第では数ヶ月の入院を要するということ。さらに辛い副作用があることや簡単な治療ではないこと……未知の情報を次々と投げ込まれて、花はパニックになりそうだった。

「……それで、効果がなかった場合は骨髄移植ですか」

その時医師の説明を遮るように、咲がぽつりと呟いた。

「感染症の怖れや他の病気を併発することもある。ええ、知っています。……夫がこの病で亡くなっていますから」

――え？

花は咲の方を振り向いた。残酷な真実が――大きな暗闇となって押し寄せてきた。

治療を受けるにあたり、花はさまざまな手続きを行わねばならなくなった。

まずは特定疾患申請。再生不良性貧血ははっきりとした治療法が確立しておらず費用も高額になるため、医療費補助の対象となっている。公費で治療費を負担してもらえるのだ。

それから学校への一時休学届け。経過が良好ならば通いでの治療に切り替えられるそう

だが、とりあえず最短でも一ヶ月の入院が必要だということだった。
せっかく楽しくなってきた学校生活を中断せざるを得ないことは花にとって大きなショックだった。そしてどうなるかわからない自分の体や治療のことが不安で仕方なかった。
免疫療法がどんなものか話は聞いたが、難しくてすべてを理解出来なかった。ただ発熱や発疹などの激しい副作用があるかもしれないということだけはわかった。
――この間まで普通に生活していたのが嘘のようだ。毎日薬品などの独特の匂いのする空気の中にいると、今までのことが夢だったような気がしてくる。そうしてあれこれと検査や説明を受けているうち、治療開始の前日となった。
「花、これからちょっと出かけよう」
午前中、病室に顔を見せるなり咲が突然言った。
咲はお店のこともあってここ二日ほど東京に戻っていた。ついさっき到着したらしい。
事前に外出申請はしてあり、昨日今日と検査の結果も悪くないので許可が降りたという。
着替えだと渡されたのは、なぜか優華の制服だった。不審に思いつつもそれを着て花は咲とタクシーに乗った。
車で走ること数十分。辿り着いたのは大きなお寺の墓地だった。
夏の気配の残る眩しい陽射しの下、水桶を持って咲は整然と並ぶお墓の間の通路を歩いて行く。途中で買った仏花を持って花もその後に続いた。
やがて一際立派な墓の前で咲は足を止めた。黒い御影石には『塚本家』と刻まれていた。

「花はお父さんのお墓に来るのは初めてよね」
　階段を上がり、咲は水桶を置いて墓石の前で膝を折った。
「あたしも久しぶり。絶対に来るなって言われて何もかも取り上げられちゃってね圭祐はあたしの婿養子って形で西野姓を名乗ってたから、本当は東京で埋葬しようと思ってたんだけど、あの人たちに許してもらえなかったの。。――圭祐、来たわよ。ごめんね、長い間顔を見せなくて。今日はね、花も一緒なのよ」
　おいで、と呼ばれて花も咲の横に座った。
「ほら、こんなに大きくなったのよ。あなたにそっくりでしょ？　頭もいいのよ。今優華に通ってるの。制服よく似あうでしょ」
　花の肩を抱き、姿の見えない父に向かって咲が微笑む。制服を持ってきたのは父に見せるためだったのか――花は納得した。
「……あなたが病気になった時、まさかいなくなるなんて思ってなかった」
　咲はそのまま父に語り始めた。
「入院した時もそう。けろっとしてるから、大丈夫だと思ってた。でも検査をしたらもう骨髄移植しか道がない状態だった。なのに感染症を起こして……。もう少し早く病院に行ってたら間に合ったかもしれない。でもあたしは子育てで手一杯で、あなたは生活のために働き続けた。体調が悪いのに大丈夫大丈夫って。もっと気遣うべきだったのに本当にバカだった。だからあなたの家族に責められても何も言えなかった。自分のせいだってずっと後悔してきた。あたしと出会っていなければもっと生きられたかもしれないのに、って」
　肩を抱く咲の手にかすかに力がこもった。声に涙の気配が混じる。それでも咲は続けた。

「だから花だけは何としても守らなきゃって思ってきた。あなたの大事な形見だもの。でもどうしてかなあ。何で花もあなたと同じ病気なの？　遺伝性は証明されていないって医者は言ってたのに。なんでなの？」

膝に顔を埋めた咲の肩がふるえている。かすかにすすり泣きが漏れ聞こえてきた。

ずっと咲の様子がおかしかった理由を花はようやく悟った。

だから痣を見てあんなに真っ青になったのだ。もしかしたら父と同じ病気かもしれないと不安になって。そして同じ病名だと診断された。

すべての疑問の糸が一つにつながって、花の中にあった咲への不信感は消えた。けれどすべてを知って、今までなんとかせき止めていた感情が溢れだしてきた。

「ママ」丸まった細い咲の背中に抱きつくように花は手を回した。

「ねえママ、私……死ぬの？　パパみたいに」

「そんなわけないでしょう」上半身を起こし咲は花の両肩を掴んだ。

「パパは一番ひどいケースだったの。でも花は違う。ちゃんと治療すれば治るの。だから、怖いかもしれないけど頑張ろう？　あたしも側にいるから。そうすればまた学校にも行けるようになるし、好きなことも何だってできるんだから」

絶対に大丈夫だから。しっかりと花を抱きしめ、咲が耳元で囁く。ぎゅっと目を閉じ花は咲の背中にしがみついた。

「ありさ、ちょっと待ちなさい！」

その時、突然聞こえてきた騒がしい声に花は目を開けた。

複数の足音が近づいてくる。咲と顔を見合わせ背後を振り返ると——やってきたのはあ

りさだった。
「まったく、待ちなさいって言っているでしょう！」
　続いて現れたのはありさの母のなつみと、日傘をさした花夜だった。花は立ち上がった。
「塚本さん……なんで」
「病院に行ったら、ここにいるって聞いたから」ありさは苦しそうに肩で息をしている。顔にはうっすらと汗がにじんでいた。
「ねえ、あんた病気なの？　入院するの？」
　ぶしつけな聞き方だったが花は正直に「うん」と答えた。ありさに悪気がないことは彼女と接してきてわかっていたからだ。
「治療するんでしょう。骨髄移植もしなきゃならないんでしょう？」
　骨髄移植――その言葉が飛び出してくるとは思わなくて花は面食らった。
　確かに医師から、病状が進行すれば骨髄移植の検討もしなければならないと言われている。でもどうしてありさがそんなことを知っているのだろう。
「学校の先生に無理やり病気のこと聞いて……ネットで調べたの。骨髄移植がしないとだめなんだって。移植って適合ドナーが必要で、血縁者ならその確率が高いんでしょう？　だったらあたし――調べてもいいわよ」
――え？
　予想もしない言葉に花が言葉を失っていると、なつみが眉をつりあげた。
「ありさ！　あなた何を言ってるの！？　バカなこと言うんじゃないの！」
「何がバカなことなの。だってあたしたち顔似てるし、父親は双子だもの。可能性は――」

「だからってどうしてあなたがこの子のために検査なんてするの、必要ないわ！　いい加減にしなさい、こんなところまで勝手に来て――さあ、帰るわよ！」

なつみがありさを引っ張っていこうとする。だがありさはそれを思い切り振り払った。

「いい加減にするのはママたちの方よ！」

高い青空にありさの声が響いた。

「いったいいつまでいがみ合ってるわけ？　何でこんなこと続けてるわけ？　花には……何にも関係ないじゃない！　それなのに皆で責めて卑怯よ！　圭祐おじさんが出て行ったのは圭祐おじさんの意志なんでしょ？　ほんとは皆わかってて、でもどうしていいかわからないから花たちのせいにしてるんでしょ？　あたし今ならわかる、何でおじさんが出て行ったか――評判ばっかり気にして本当のことを見ない皆に愛想を尽かしたのよ！」

「ありさ、何てこというの！」

「だっていつもそうじゃない！　あたしが謹慎になった時もご近所のことばっかり気にしてた。でもそんなのバカみたい！　なんで助けたいって思っちゃいけないの？　あたしたちなら確率があるのに――おじさんが死んで辛い思いしたなら、今度は行動するべきよ！」

ありさの剣幕になつみは言葉を失ったようだった。

鳥肌がたつように体が熱くなるのを花は感じた。その時咲が静かに口を開いた。

「……ありささん、ありがとう、そんな風に花を心配してくれて。でもね、今はまだ移植は大丈夫なの。治療だけでよくなる可能性があるのよ」

「……ほんとに？　そうなの？」

ありさが心から素直な反応をした。

「ありがとう。――ほんとうに」
咲が頭を下げた。何か言わなきゃと花も思ったが、うまく見付からなかった。
「……佳祐と、同じなのね」
それまで口を閉ざしていた花夜が日傘の下から顔を見せた。その目はまっすぐ咲に向けられていた。
「……はい。でも援助を頼もうなんて思っていませんから。ある程度貯蓄もありますし、ご迷惑はかけないと思います。ご心配は」
「もし、どうしても必要なら」
最後まで聞かず、花夜が遮った。
「連絡をしなさい。佳祐の将来にととっておいた蓄えが少しありますから。無駄にするよりいいでしょう。検査のことも……考慮しましょう」
日傘を持ちかえてきびすを返し、花夜はしずしずと去っていく。
――今のって、もしかして――
受け入れてくれたのだろうか。咲の思いが届いた？　だったら、だったら――。
「おばあちゃん……！ありがとう」
階段を降りて勇気を出して呼び掛けた。
一瞬だけ足をとめたあと花夜はまた歩きだした。「はやくきなさい！」とありさを促してなつみも後を追いかけていく。
「あ、あの、塚本さん」
すれ違い様呼び止めると、ありさはいつもの不機嫌な顔をした。

「いいわよ、何も言わなくて。あんたには借りもあるんだし」
「さっきうれしかった……すごく」
かばってくれてうれしかった。花と呼んでくれてうれしかった。そして何より、駆けつけてくれたことがうれしかった。
「……ありさでいいわよ、もう」
「え？」
「呼び方！ていうか、あんた頑張んなさいよね！」
突然大きな声になったので花はびくっとした。
「はやく元気になって……学校戻ってきなさいよね。……待ってるから！」
長い黒髪を翻しありさは走って行った。
『頑張りなさいよ』
あの時は花がありさに言った言葉。折れそうになっていた心にそっと灯がともる。
「花……」咲の手が肩に触れた。
――うん、頑張る。
ぎゅっと唇を結び、花はつよく心に誓った。
見上げた空に白い飛行機雲が長くのびていった。

翌日から治療が始まり、数日間に渡って免疫抑制剤の投与が行われた。
初めのうちは調子は良好だったが、発熱や発疹など副作用が現れ始めた。ほどなく症状は落ち着いてきたが、血小板の減少により輸血も必要となった。よくなったと思えば数値

が下がる、気まぐれな繰り返し。昨日は体調もよく、絵里や亜樹、クラスの子がお見舞いに来てくれてはしゃいでいたら、翌日はまた熱が出てしまった。

――ほんとに大丈夫なのかな……。

輸血のチューブにつながれると不安になる。治療の効果が出てくるのは二、三カ月後らしいが、結果が良好ならもっと早く退院出来るという。でも前よりどんどん悪くなっていっているような気がしてならない。焦っても仕方のないことはわかっているけれど。

「ねえ、花。ちょっといい？」熱のだるさに目を閉じてそっとため息をついた時、咲が枕元で話しかけてきた。

「あのね、提案なんだけど……東京に戻らない？」

「……え？」

瞼を開き花は咲のいる方へ顔を向けた。

「あのね、お店のお客様に偉いお医者様がいるの。その方がね、良い先生がいるから紹介しようって連絡を下さったの。手続きも全部するからって。もちろん信頼できる人よ」

言いずらそうに咲は切り出したが、その気持ちを花は悟った。

咲はずっとこのまま花のそばにいるわけにはいかない。

もし結果が良好で退院できても定期的に病院通いは必要になるし、再発する可能性もある。効果がなかった場合は入院が長引く。それならば、すぐに駆けつけられる場所に転院した方が咲も安心だ。でも――

「でもそれって……学校をやめるってことだよね？」

「そうね……どうなるかわからないから」

――そんなの嫌だ――。

皆と別れるなんて。せっかく仲良くなれたのに。学校が好きになったのに。だるさで下がった気分がさらに落ちる。

「ちょっと、考えてみて」

ノックの音がしたので、咲はそう言ってベッドを離れた。

だが本当はすぐにでも答えがほしいのだろうと、花はわかっていた。でも急なことで返事すらできなかった。

「あら、あなた……。花、お友達が来てくれたわよ」

病室の入り口から咲が明るい顔で振り返った。また絵里たちが来てくれたのだろうかとベッドから視線を向けると、咲が開けたドアから来訪者の姿が見えた。

――星流くん……！

瞬時に全身に緊張が走った。とっさに花は布団で顔を隠した。

「ごめんなさいね、今日はちょっと熱があってあまりお話出来ないんだけど……」

「いえ、こちらこそ急に来てすみません。あの、これ」

「あら、かわいいお花。ありがとう。花、お見舞い持ってきてくれたわよ。せっかくだから生けてくるわね」

――ふ、二人にしないでママ！

毛布をかぶったまま心の中で叫んだがもちろん届かず、咲が病室を出て行く音がした。布越しでもわかる重い沈黙が病室内に漂い始める。どうすることも出来ず花は息を詰めた。

「……ごめんね、突然来て。入院してるって塚本さんから連絡があって」
やがて星流が口を開いた。
「迷惑かなって思ったんだけど、心配になって。体調、悪いの？」
顔が上げられない。体を固くしたまま、花は布団の縁をぎゅっと握りしめた。
「この間は……ごめん。あの時も調子がよくなかったのかなって、申し訳なくて……。でも最後にどうしても、会っておきたかったんだ。……来週出発なんだ」
出発――イギリスへ発つのだ。治療が始まって体調の変化に振り回されているうちにもうそんなに時間がたってしまったのか。布団の下で花は愕然とした。だが、星流と顔を合わせる覚悟が出来ない。
反応を待ってか星流の声が途絶えた。
でも身動きが出来ない。指先を動かすだけで覆いはすぐにはがれるのに――ほんの少しの勇気が出ない。
「――話したくないよね。……わかった、これで帰るよ。じゃあ、お大事に。早く元気になれるように祈ってる」
ドアが開く音がした。
行ってしまう――これが、最後。あの日で時が止まったまま、もう二度と会えない。
花は布団をはねのけた。だがドアは閉まり、もうそこに星流の姿はない。急に後悔が押し寄せてきた時、再びドアが開いた。
「あら？　もう帰っちゃったの？」
入って来たのは咲だった。ピンクの花をさした花瓶を手に不思議そうに首を傾げる。

点滴をしていない右腕を、花は両目に押し当てた。
目が痛い。胸がむかむかする。泣きたいのか、怒りたいのか、もうぐちゃぐちゃで、気持ちが悪い。
もう嫌だ。楽になりたい。何もかも忘れて何もなかった時に戻りたい。
前を向こうとしていた気持ちが挫け、言葉が自然と口から滑り出した。
「ママ、私……一緒に東京へ行く」

それから一週間後、血液検査の結果も少し安定してきたので花は東京の病院へ移ることになった。
出発の前日、外出許可をもらい花はクラスメイトたちには自分で最後の挨拶に行った。
突然のことに皆驚いて、そして別れを寂しがってくれた。絵里と亜樹とは一緒に抱き合って泣いた。でもこれでさよならじゃない――たくさんメールや電話しようと約束して、最後は笑顔で別れた。
校門まで続く並木道を歩く途中、無意識に校舎を振り返った。
優華にいたこの半年、本当にたくさんのことがあった。辛いことも、悲しいことも、うれしいことも、一生分体験したように思える。
そのかけがえのない時間の中で、花は色々な自分に出会った。弱さも強さも知った。
――ありがとう。
口の中でそう呟いて、花は校門を抜けた。

「しっかりね、花ちゃん。よくなったらまた遊びにきてね」
アナウンスが響き渡り、東京行きの新幹線がホームに滑り込んできた。
扉が開き、人々が次々に乗り込んでいく。咲に促され、花は見送りに来てくれた百合子に頭を下げた。
「はい、色々とありがとうございました」
「いいのよ、娘が出来たみたいでうれしかったわ。二人とも元気でね」
「はい。あの、おじさんと……十夢くんにもよろしく伝えて下さい」
二人にも挨拶はしたけれど。十夢は相変わらずで、最後も「今度会う時はもやしじゃなくなるといいな」なんて嫌味をよこした。たぶん彼なりの励ましだったのだと思うけれど。
惜しむように手を振りながら、新幹線に乗り込む。キャリーバッグを足元に運び込んで、窓際の席に花は座った。
「お休みの日だったら、お友達が見送りに来てくれたかもしれないわね」
隣に座った咲に、花は小さく笑い返した。
出発が平日で花はよかったと思っていた。絵里や亜樹は見送りに来たがっていたけど、きっと顔を見てしまったら決心が鈍るから。だから、これでいいのだ。
「具合、大丈夫？　だるくない？」
「うん、大丈夫だよ。一昨日からけっこう安定してるし」
「そう。あ、まだ少し時間があるから、飲み物でも買ってくるわね」
腕時計を確認して、咲は座席から離れた。ふう、と息をついて花は窓辺に寄りかかった。
――これで、よかったんだよね……。

ここを離れるのは寂しいけれど、きっと大丈夫。退院したら新しい高校に通うことになるけれど、今の自分ならきっと前よりうまくやっていける。

――それにもう……考えなくてすむ。

このまま、忘れてしまえばいい。時間はかかるかもしれないけれど、環境が変わって落ち着けば、これでよかったと思える日がくる――そう思っていると、ポシェットの中で携帯が震えた。

メールだった。開いてみると――ありさからだった。

『逃げるの？』

そう一言、ディスプレイに浮かび上がった文字。ドクン、と鼓動が鳴った。

「花、お茶がいい？　それともミルクティー？」

戻ってきた咲が二つのペットボトルを目の前に差し出してくる。スピーカーから、発車を告げるアナウンスが流れた。膝の上で花は携帯を握りしめた。

「……ママ、ごめん」俯いて、震える声を花は押し出した。

「私、やっぱりこのままじゃ……行けない」

咲がわずかに目を見張った。だが何も言わず、少し困ったように微笑した。

「……あの男の子のこと？」

下を向いたまま、花はこくりと頷いた。

これでいいなんて――うそだ。もう顔が見たくないなんて、そんなことあるわけない。

どんなに頑張って無理しようとしてもやっぱり出来ない。星流のことだけは出来ない。

「花はあの子のことが好きなのね」

そう訊かれて――もう一度頷いた。

どうして星流のことを考えるとこんなに胸が苦しいのか、理由なんてわからない。でもそんな風になるのは星流だけだ。きっとこれから先も――

「行けば」

丸まった背中をぽんと叩かれて花は顔を上げた。そこには花の好きな咲の笑顔があった。

「行きなさい、伝えたいことがあるなら。人生は一度きり、過ぎたらもう戻れないのよ。前に言ったでしょ、下を向いてちゃだめ、幸せは前を向いて掴まなきゃ。なにクヨクヨ悩んでんの、もとナンバー1のあたしの子でしょ！　ほら立って！」

促され花は立ち上がった。発車のベルが鳴る。

「王子様だと思える人にはたくさん出会っても、本当の王子様は一人だけよ。じゃあね、先に東京で待ってるから。頑張ってらっしゃい」

大きく頷いて、花は自動ドアを抜け新幹線の外へ飛び出した。

そのまま何も考えず階段を駆け降りる。あまり激しい運動はしないようにと言われているが、そんなのどうでもよかった。

――もう一度、星流に会いたい。

迷惑なだけかもしれないけれど、でもやっぱり逃げたくない。

階段を降り切った時、めまいがして花は膝に手をついた。あと少し、あと少しでいい。星流に会って伝えるまで――息を整え顔を上げた時だった。

「花！」

改札の方から優華の制服を着た少女が走って来るのが見えた。自分とよく似たその面差しが近付いてくる。まるで鏡を見ているような感覚で花はありさと向き合った。

「このまま……逃げるなんて許さないから」

そう言うと、ありさは悪戯っぽく笑って花の目の前を通り過ぎた。

長い黒髪がふわりと広がる。わけがわからず立ち尽くしていると、その向こうに一人の少年が立っていた。

茶色のブレザーに同色のチェックのズボン。人目をひく整った顔立ち。

会えた。

いてもたってもいられず花は星流のもとへ駆け寄った。

「星流くん……！　あの、あのね——」

今度はまっすぐに星流の顔を見上げる。その途端、涙があふれ出してきた。

「ごめんね、あの時ちゃんと話を聞かなくて、避けてばっかりで。どうすればいいかわからなくて……っ。でもやっぱりこのままお別れしたくないの……！」

きっと今ひどい顔をしているだろう。でもそれでもかまわない。花は必死で続けた。

「私……星流くんが好きなの。ただの利用対象だったのかもしれないけど、迷惑かもしれないけど、もっと一緒にいたい。また夕陽を見たり笑ったり色んな話がしたい」

星流と出会ってから、色とりどりの毎日が始まった。大切なものがたくさん増えた。失くしたくない、終わりにしたくない。全部、全部。

「……泣かないでよ」

星流の腕が花の方へ伸びた。濡れた手を押しのけるようにして、ブレザーの袖で花の目

頭をぬぐう。
「オレは花ちゃんの笑った顔が好きなんだから。見てるとほっとして安心するんだ。――迷惑なんかじゃない。オレだって同じこと、言いたくてここへ来たんだから」
いつの間にか、花の手は星流と繋がれていた。じんわりと伝わる熱が今この瞬間が本物だと教えてくれる。
「これで終わりになんかならないよ。オレたちはまた会えるんだから。今は遠く離れることになるけど、時間なんてあっという間に過ぎるから。そしたらまた、たくさん話してたくさん笑って、二人であの場所に夕陽を見に行こう」
重なり合う指に自然と力がこもる。離れないと伝えるように。
「だから、頑張ろう。その時のために。――負けるな。オレも負けないから」
『負けるな』その言葉が、灰色だった花の世界を変えた。そして今度もまた、その一言が力強く背中を押してくれる。
「――うん、負けない」
中学生最後の夏休み、暑い夏の日、鏡に映った始まりの予感。
それは君がくれた、かけがえのない日々。
あの時の臆病で小さな自分に心の中でそっとを手を振り、花は笑った。
大好きな人と、しっかりと手をつないだまま。

NONSTOP

From・N
番棚葵
Illustration: 伊藤由希

あらすじ

幼なじみの来夢から、N市の名物作成を持ちかけられる隆也。N市が嫌いなため気乗りしない隆也だったが、協力するうちに来夢への自分の気持ちに気づいてしまう。そして、自分のN市に対する気持ちも疑うのだった。

谷川来夢

地元をこよなく愛する少女。隆也の幼なじみ。元気はいいが、思慮は浅い。

新井隆也

地元に嫌気がさしている少年。進学校に通っている。意外と流されやすい。

第六話　From・N

アメリカへと旅立つその数日前。

新井隆也は、自室で難しい顔をこしらえていた。ベッドに腰掛けて腕を組み、黙考する。

「このままっていうのも、何だかすっきりしないな」

つぶやいてから、ふと窓の方に目線を向けた。その向こう側には、愛すべき隣人がいるはずである。時間は夜だが、電灯が灯っているところを見ると、起きているらしい。

勉強でもしているのだろうか。いや、それはないな。漫画でも読んで、気楽に笑っている可能性の方が高い。脳天気な少女の笑顔を浮かべ、隆也はさらに釈然としない気持ちになった。

「俺だけ悩むってのも不公平だし。やっぱり、言っておくか」

幸い、明日は日曜日だ。玉砕したとしても、家でフテ寝できる。彼は深呼吸を一つすると、「よし」と自分に気合いを入れた。

「えええええっ？」

翌日。部屋に呼び出した隣家の少女が、予想以上に驚いた声を上げたので、隆也は内心ガッツポーズを決めていた。

その少女、谷川来夢はこちらを見てくると、目を瞬かせながら声を上擦らせる。

「あ、ああの、あの、隆くん？」

「なんだね、来夢くん」

「い、今その、えっと……何て言ったの？」

「聞こえなかったのか？『お前が好きだ。つき合って欲しい』って言ったんだよ」

答えながら、隆也は自分の肝が据わっていることに驚く。

昨日はこのことを告白すると想像しただけで、煩悶として眠ることすらできなかったのに。いざ言ってしまうと、すっきりするものだ。

これだけでもう満足と言える。いや、満足してはいけないのだが。

むしろ、肝要なのはここからだ。彼は小さく深呼吸すると、

「いいか、来夢。あらかじめ断っておくとだな……俺はお前のことを、単なる友達だとか幼なじみだとか、そういう尺度で好きだって言ってるんじゃない。一人の女の子として好きなんだ。だから、彼女になって欲しい。これはわかるか？」

「え、えっと。うん。たぶん」

「じゃ、返事は？」

「え……えーっと」

来夢は明らかに戸惑っていた。どうも、隆也の言葉を急には受け入れられないらしい。かといって、断る術を探しているのとも違う。純粋に面食らっているようだ。

隆也は息を吐くと、肩をすくめた。その表情は苦笑に彩られている。実を言うと、この展開は予想の範疇に入っていた。

「ま、年中頭がお花畑みたいで、しかもN市のことしか考えてないお前に、こんなこと言っても仕方ないだろうってわかってたけどな」

「……隆くん？」

「悪かったな、混乱させてしまって。でも、俺も結構真剣に言ったんだから、返事はちゃんと欲しいんだ……今すぐにとは言わない。ゆっくり考えてくれればいい。どうせ俺はあと数日もすれば、一年間はこの町に帰って来ないんだし」

「あ……」

そうだ、隆也は一年間の留学のために海外へ行くのだった。そのことを思い出した来夢は、思わず彼の顔を見つめる。

隆也はそんな来夢を優しく見つめると、彼女の肩に手を置いた。

「帰ってきたら、ちゃんと返事をくれよ」

「う、うん」

来夢はおどおどとうなずくと、ふと気づいたように首を傾げてこうつぶやいた。

「あ、でも隆くん」

「うん？」

「今の言葉……漫画のキャラクターが死亡する前によく言いそうだね」

ゴンッ。

「……お前な。あまり調子に乗ってると、いい加減叩くぞ」

「叩いてから言わないでよぉ」
拳を震わせる隆也の前で、涙目になりながら来夢はうめいた。

○

休日。小さな商店街を、来夢は一人歩いていた。目的は特になく、強いて言うなら散策である。
彼女は今、新しく卸した春物のワンピースと、お気に入りのデニムジーンズをまとっている。初春の日差しは穏やかで、本来ならうきうきするようなシチュエーションだ。が、その表情はどんよりとしていて、服とも、気候とも合っていない。憂鬱だ。
「行っちゃったなぁ」
ぽそり、とつぶやいた。主語は言うまでもなく、隆也が、である。
彼がアメリカへと旅立ったのは、もう二週間ほど前のことだ。出発前に、あんなことを来夢に言ったのに、実にあっさりと行ってしまった。
来夢は彼自身と、彼の言葉に取り残された感があったのである。
そして、それ以上に彼女は悩んでいた。それは言うまでもなく、隆也の告白についてである。
好きと言われたのは嬉しい。自分だって隆也が好きなのだ。それは、彼女が彼をある企画に巻き込んでから気づいた、一つの感情である。
だが、それ以上に来夢は自信を持てないでいた。

「……隆くんの好きと、わたしの好きって一緒なのかなぁ」
彼女がつぶやいた、瞬間。
遠くから呼び声が聞こえた。
「おおい、来夢ちゃん。ちょうど良かった！」
「え？」
声の方向に振り向くと、そこには初老の男性が立っていた。頭が若干はげ上がり、切ないことになっているが、その表情にはまだ活気があふれている。
顔に見覚えがあった。何度か父親の買い物につき合った時、見知ったものである。
「あ、酒屋の田村おじさん」
「ははは。今は『元酒屋』の田村おじさんだよ」
そう言って笑うと、田村氏は自分の背後にある建物を親指で示した。
見れば、確かにそこは来夢の記憶とは食い違い、どこか清潔感漂う垢抜けた店になっている。硝子張りの壁の向こうには、雑誌、食料、衣類など、様々なものが棚に並べられ、こじんまりと置かれていた。田村の格好も、明るいカラーのシャツになっている。
「え、コンビニ？」
「そ。数ヶ月前に、店替えたの。今時、古風な酒屋一本じゃやっていけなくてねぇ」
「ふぅん」
実は来夢的には、あの暗くて少しじめっとした、静かな酒屋の雰囲気が好きだったのだが、これも世の風潮というものなのだろう。自分が知っている店が変わってしまったことに一抹の寂しさを感じつつ、ふと彼女は本題を思い出して首を傾げた。

「で、田村さん。わたしに何か用なの？　ちょうど良かった、って言ってたけど」
その言葉に、田村は「そうだった」と手を打ち合わせると、
「新井さんとこの隆也くんは？　今日は一緒にいないの？」
「え？　あ、えっと、隆くんは……」
「実は君たちが、『N市の名物作り』をやってるって聞いてさぁ」
「……あ」
来夢はばつが悪そうに、言葉を濁した。
彼女たちが住むこの町、N市を町興しするために、名物を作ろうと彼女と隆也は今まで色々な活動を行ってきた。来夢が隆也に対する好意を認識したのは、この企画だったのである。実は隆也もまったく同じ経緯で来夢への想いに気づいていたりするのだが、それはさておき。
活動と言っても、これまで『名物作り』の大半を隆也がプロデュースしている。彼はN市が嫌いだと公言してはばからず、来夢がその企画を持ってくるたびに遠慮なくイヤな顔をするのだが、最終的には何だかんだで協力してくれるのだ。
隆也の優しさは、来夢が彼を好きである所以の一つでもあるのだが、それ故に自分がほとんど何もしていないことに来夢は今さらながら気づいた。
（わたし、隆くんに頼ってばかりいたかなぁ）
今さらながら、そう痛感する。
と、難しい顔をする来夢に慮ってか、田村は気遣わせに眉を寄せた。
「どうしたの、来夢ちゃん。ひょっとして、隆也くんと喧嘩でもした？」

「え？　ううん、そんなことないけど。でも、隆くんは今……」
「それは良かった！　いや、君たちに助けられた店がいくつかあるって聞いてさ。うちも一つ、それにあやかろうと思って」
この人は気は遣っても、あまり他人の話を聞かない性質らしい。一方的に口を開くと、
「酒屋辞めて、コンビニ始めたのはいいんだけど、他のチェーン系のコンビニの方がよく感じるのか、うちにはあまり人が来ないんだよ。どうかな、何とかならない？」
「えーっと。そう言われても」
「お願い。どうせならうちを、N市の名物になるようなコンビニエンスストアにしたいんだ。何とか頼むよ」
来夢はN市を、生まれ故郷をこよなく愛す少女だった。
そんな彼女が「N市の名物になるようなコンビニエンスストア」という言葉に、食いつかないはずがない。
「任せてください！」
気がつけば胸を叩いて、そんなことを叫んでいた。
田村は相好を崩すと、
「それじゃ、よろしく頼むよ」
そう言って店内に消えていく。
その後ろ姿を見送りながら、若干脳天気な性格の来夢は、「うーん、どうしよう」と、深すぎず浅すぎず、彼女なりの深度で苦悩するのであった。

○

とりあえず、隆也はこの町にはいない。それでも、田村のコンビニは名物にしたい。
それなら、隆也のやり方を復習して、それを基に考えてみよう。
来夢がたどり着いたのは、このような結論だった。理屈はなく、ほとんど直感に近い。論理を組み立てられるほど、彼女の頭は良くはなかった。
昼近くになったので、腹ごしらえをしようと考えたせいもある。彼女と隆也は、中華料理屋で名物を作ったこともあるのだ。その時仲良くなった少女に、相談してみるのもいいかもしれない。
ガラッ。
「いらっしゃ……なんだ、あんたか」
「こんにちは、奈美ちゃん」
「気安く名前で呼ばないでよ」
仲良くなったはずの少女、中華料理店「ラ・ソルティ」でウェイトレスをしている浅野奈美は、ぶっきらぼうにオーダーを取った。
来夢は酢豚定食を頼んでから、ふと店内が空いていることを確認し……若干昼時より早めに来たためだ……奈美に声をかけた。
「あのね、ちょっと相談があるんだけど」
「何よ？」
クラスメートたる彼女は、そのよしみもあってか、それとも根は親切なのか、うざった

そうにしながらも相手してくれる。
　来夢はコンビニについて話した。
「それでさ、どうやったら隆くんのようにできるかなぁって思って」
「そう言われてもねぇ」
　奈美はつぶやいてから、気づいたように来夢とその隣の空間を見つめた。
「そういえば、今回はいないわね。あんたの彼氏。喧嘩別れでもした？」
　わくわくと期待をこめて言ってくる失礼な娘に、来夢は苦笑を返すと、
「喧嘩なんてしてないよ。それに、隆くんは彼氏じゃないし」
「なによ、あんたらまだつき合ってないの？　意外ね」
「う、うーん」
　呆れたような言葉に、歯切れの悪い返答をよこす。
　実際のところは、彼氏彼女の関係になるのは簡単だ。来年、自分が隆也にイエスと言えばいい。だが、土壇場になって来夢はそのことに不安を感じていた。
「あの、あのね」
「ん？」
「つき合うって何かな。どういうことで、彼氏とか彼女とかになったら、どうなるのがいいんだろう」
「……あんた、今まで彼氏いなくて、今もこの店の手伝いのせいでそんな機会にも恵まれていない私をディスろうってわけ？」
　目を三角にする奈美。相談する相手が悪かったようだ。来夢は慌てて、両手を振ると、

「そうじゃなくて、その」
正直に話した。隆也に告白されたことも含めて。
奈美はその結果、ますます不機嫌そうな顔をしたが、やがて肩をすくめると、
「バカみたい。そんなことで悩んでるの？　つき合えばいいじゃない、チャンスがあるのにもったいない」
「うーん、そういうものかなぁ？」
「そういうもんよ。いい、こういう機会は逃せば後五年は来ないと思いなさい」
「なるほど、経験談だね」と言おうとして、さすがに空気を読めていないことに気づき、来夢は口をつぐんだ。
代わりに一つうなずくと以後は黙り、運ばれてきた酢豚定食を平らげてから勘定を払うまで奈美と会話することはなかった。
店を出る時に、ふと呼び止められる。
「ちょっと、谷川」
「なに？」
「あんたが何考えてるかわかんないけど……あんまり複雑に考えない方がいいわよ。そもそもあんた、そういうキャラじゃないでしょ」
ぶっきらぼうだが、その声に温かいものを感じて、来夢は嬉しそうに微笑した。
次に来夢が来たのは、喫茶店だった。別に、昼食後にゆっくりコーヒーでも、と優雅なプランを立てたわけではない。

結局、奈美からはコンビニを盛り上げるためのヒントを得られなかったので、他に自分たちが携わった店に行こうと思ったのである。

彼女が向かった店には、「ハイランド」と書かれた木製の看板がかかってあった。小さなガラス窓を横二枚、縦四段の計八枚埋めた、瀟洒な扉をそっと押す。

カウベルが鳴り、ボックス席で注文を取っていたウェイトレス姿の少女が顔を上げた。

「いらっしゃい……あら」

嬉しそうな声を上げる。奈美と同じく、来夢の同級生である山岸ひかりであった。この喫茶店ハイランドの店主の娘でもある。

店内は混んでいたが、それでもいつもよりは手が空いているようだった。彼女は来夢をカウンター席に案内すると、笑顔で応対する。

「いらっしゃい、来夢。何にする？」

「うーん、と。カフェオレ、アイスで」

喉が渇いていたので、来夢は注文した。幸い、昼食代は仕事に出かけている親に渡されていて、まだ残りに余裕がある。なので、小遣いには響かないはずだ。

ひかりはうなずくと、カウンターに回り込んだ。オートミルでコーヒー豆を挽き始める。最近では彼女も調理補助をしているのだと、クラスで聞いたことがあった。

彼女の代わりに、小さな男の子が一人、店の奥から嬉しそうに駆け寄ってきた。

「来夢、いぇーい」

「いぇーい」

嬉しそうに突き出す拳に、来夢も笑いながら拳を合わせる。ひかりの弟の勇司だ。この

店を来夢と隆也が立て直す時、小学生ながら誰よりも熱心に動いていた少年である。今ではすっかり、来夢と隆也とも仲良しだ。

彼は、来夢の隣のスツールに腰掛けると、少し意味ありげに姉の姿を見てから来夢の肘をつついた。

「なぁ、今日の姉ちゃんちょっと嬉しそうだろ」

「え、うん。そういえば楽しそうかな」

「実はさ……彼氏とデートなんだよ」

くしし、と忍び笑いをしてみせる。その声を聞きつけたか、ひかりが真っ赤になりながら叫んできた。

「こら、勇司！　なに勝手なこと言ってるのよ！　そんなんじゃないって言ってるでしょうっ！」

「えー。だって、もろ浮かれてたじゃん。朝から鼻歌まで歌ってたし」

「ち、違うわよ！　それにデートじゃなくて、ちょっと一緒に出かけるだけだし！」

「相手が男なら、それをデートって言うんだって」

「へぇ、男の人なんだ」

来夢が興味津々とばかりに横から口を挟んだ。自分のことは、この際棚に上げる。

頬を紅潮させたまま何も言わないひかりの代わりに、勇司がカウンターにおいてあるものを指さした。複数の環を組み合わせた、金属製の小さなオブジェである。

「これを作った奴と出かけるんだ。姉ちゃん、隅に置けないだろ？　親しくなったからって、普通手作りのプレゼントなんてもらえないって。それをわざわざ店に飾っちゃって、

これは働いている時もそいつを忘れたくないってこと……」
「あまりませたこと言ってると、あんたもミルにかけるわよっ！」
ひかりが叫ぶ一方で、来夢は眉を寄せてオブジェを見つめていた。どこかで見たような気がしたのである。
「はて？」と記憶をほじくり返していると、答がドアを開いてやってきた。
「こんにちは」
「あ、来た来た……」
さわやかな印象を与える青年の声に、勇司が楽しげにつぶやいたその時。来夢が素っ頓狂な声を上げた。
「あっ、三上くん！」
「あれ、谷川さん？」
そこに立っていたのは、やはり以前に来夢と隆也が……というよりほとんど隆也が……手を貸した、三上工房という工房の跡取りたる三上青年だった。
ひかりがその二人の顔を交互に見つめてから、納得したように手を合わせた。
「ああ、そうか。あんたたち、知り合いだっけ」
「そうだよ。そうでないと、僕と君も知り合いになってない」
面白そうに三上が笑う。彼はひかりと違い、来夢と同学年ではあるが同じクラスではなかった。そんな彼と純然たるクラスメートのひかりが知り合いであり、しかも要因が自分らしいと聞いて、来夢は気になった。
「二人とも、どういう経緯で仲良くなったの？」

「君と新井君のおかげだよ。懇意にしているお客さんから、君たちがこのハイランドに力を貸したって噂を聞いてね。僕も好奇心から、ここを覗いてみたのさ」

そして三上は、ちらっ、とひかりの方を見ると、少し照れたように言葉を続ける。

「そうしたら、一生懸命に働いているひかりちゃんがいてさ。何となく気になったから、個人的に声をかけてみたんだ。で、色々話してみたらこの歳で実家を手伝いしている感心な娘さんってわかったから、もっと仲良くなろうと思ったわけ」

「は、恥ずかしいこと言わないでよ。大体、家の手伝いなんて当たり前のことじゃない」

ひかりは再度赤くなったが、怒ってはいないようだった。どうやら二人の関係は、これで説明がつくらしい。

と、勇司が小馬鹿にしたような口調でまぜっかえす。

「なにが、当たり前のことだよ。来夢のねーちゃんと隆也のにーちゃんが関わってなかったら、ここまで本気で店手伝おうとしてなかったくせに」

「勇司！」

叫ぶひかりだったが、弟の言うことが真実なために今一強く言い返せないらしい。彼女はこの「ハイランド」が古くさびれた喫茶店だったころ、実家を支えることに強く関心を示さず、ウェイトレス業もなぁなぁでこなしていた。

最終的には来夢と隆也、それに勇司の熱意に押され、父親共々この喫茶店の新装に乗り出したのだが。客が来るようになってからは、髪をくくって化粧も極力控えめにし、きっちりと接客業をするようになった。

「まぁ」と前置きをつけて咳払いをすると、ひかりは微笑して来夢の方を見る。

「あんたらに感謝しているのは確かだけどね。この店が前みたいに活気を取り戻したのは、間違いなく来夢たちのおかげだから」
「僕も感謝しているよ」
三上が横から口を挟む。
「あれから、色々な人から注文が来るようになったんだ。コスプレ専門の人ばかりじゃなくてね。そうそう、ひかりちゃんのお父さんの知り合いである雑誌記者の人に、僕の作品を紹介してもらえるかもしれないんだ」
「ああ、改装を記事にしてくれた人」
来夢もその人物なら覚えがある。ハイランド立て直しの時に、一役買ってもらったのだ。彼がまさか三上の作品を紹介してくれるとは。自分たちの企画が知らないところで独自の発展を迎えているのを知り、そのポジティブな展開に来夢は少し嬉しくなった。
と、ひかりが店内に備え付けてある時計……趣味のいい柱時計だ……を見て、表情を変える。三上の肘をつついた。
「ちょっと、そろそろ行きましょうよ。今日は隣の県に行くんだから、急がないと」
「あ、うん。そうだね」
三上がうなずくのを見届けてから、ひかりはエプロンを解いてカウンターを出ると、横手の扉を開いて「お父さん、出かけるから」と声をかけた。それから奥の階段を上り、自室へと向かう。
すぐに戻ってきた彼女は、リップクリームを塗り、髪を整えていた。活動的なチュニックとスパッツに身を包み、肩からは小柄なトートバッグを提げている。

そしてひかりと三上は、楽しそうに店の外へと出た。勇司が冷やかしの声を上げたが、それすらも届いていなかったようだ。彼が「つまんねーの」とつぶやいていると、彼らと入れ替わりになるようにして、店の店主が奥から顔を出す。

「あ、父ちゃん」

「ひかりは行ったか。遅くならないといいがな」

その声は、娘がデートに出かけることに対する、父親特有の複雑な心境が見え隠れしているようだった。

と、彼はここでやっと来夢の存在に気づいた。微笑を浮かべると、

「やぁ、来夢ちゃん。いらっしゃい」

「こんにちは」

来夢は、ぺこり、と頭を下げる。

ここで初めて思い出した。自分が用事でここに来ていることに。ひかりは出かけてしまったので、来夢は彼女の父親に相談することにした。「実は」とコンビニエンスストアについて語る。

「そういうわけで、何かいい方法ないかなと」

「うーむ」

店主は顎をなでるようにして、うなり声を上げた。考えてくれているらしい。と、隣から勇司が口を挟む。

「そういえば、隆也の兄ちゃんは？」

「隆くんなら、アメリカに留学に行ってるんだよ」

「留学って？」
「勉強しに、しばらく旅行に行くの。一年間」
その言葉に、勇司は口をあんぐりと開けた。子供にとって一年間というのは、とても長く感じるものらしい。おろおろと、来夢を気遣うように見る。
「それって寂しくないのか？　来夢の姉ちゃん。一年も彼氏がいないなんてさ」
余計な言葉も加えて。来夢は再び苦笑するしかなかった。
「や。隆くんは彼氏じゃないよ……まだ」
「おや？　まだってことは、そうなる予定があるのかい？」
今度は店主まで食いついてくる。来夢は困ったように手を振ると、
「その、どうなるか、わからないんですけど。そうなるかもしれないし、そうならないかもしれない……」
「えー、つきあえばいいじゃん。二人ともお似合いだと思うぜー」
こましゃくれた発言をする勇司をたしなめるように、店主は彼の頭を小突くと、ふと優しげな目で来夢を見た。
「ひょっとして、彼に告白されたとか？」
「え……何でわかるんですか」
思わず口を滑らせる来夢に、店主は苦笑を浮かべる。
「これでも、長く生きてるからね。懐かしいな、私たちも告白したのは私が先だった」
遠い目をした。彼の妻、つまりひかりと勇司の母親は他界している。そんな彼女との在りし日の思い出に浸ったのだろう。

「もしも告白への返事で悩んでいるのなら、これだけは覚えておきなさい。よほど特殊なケースでない限り、八割はその答は自分の中で決まっているということだ。残り二割にどう折り合いをつけるかで、君は苦しむことになるだろう。だが、人生には折り合いがつかないことも多々あるんだよ……まぁ、妻が返事の時に、私にそう言ってきたんだがね」

最後は茶化すような笑みを浮かべる店主に、神妙に来夢はうなずく。

そんな彼女を見つめながら、彼は満足そうに首肯すると、

「それで、コンビニの件なんだが」

「あ、はい！」

何かいい案でもあるのだろうか。希望に輝く来夢に、しかし彼は笑ってこう言った。

「ちょっと、思いつかないなぁ。いや、力になれなくてすまない」

○

日は暮れつつあった。来夢は疲れた足で、とぼとぼ、と帰路についていた。

若干気落ちしているのは、コンビニに関するいいアイデアが出ないから、ということもある。が、それ以上に彼女は、隆也について悩んでいるのだった。

「わたしは、隆くんのこと……好きだよね？」

ふと、自分に自分で問いかける。そのことに関する答も簡単に出た。イエスだ。だが、それでも彼女は隆也に対する返答を悩んでいた。

隆也は言ったのだ。「つき合ってくれ」と。そして……来夢はそこでため息を吐いた。

どうにも実感がわかない。自分は本当に、これに答えることができるのだろうか。
ハイランドの店主が、ヒントをくれたような気もするのだが、今一ピンと来ない。
「……と。それより、コンビニのことを何とかしなくちゃ」
とりあえずはもう遅いので一度家に帰ろうと、彼女は道路も歩道もないような道を歩いていた。田舎特有のアスファルトと電柱しか見えないような道であり、脇には畑が並んでいる。畑で採れた野菜は、時々住宅街の路傍で直売りしていた。新鮮で味もよく、来夢はその野菜を買うのを楽しみにしている。
そんな道を歩いていると、ふと対向に人影を見た。知り合いなのか、こっちに手を振っている。近づいてきた。
小さな点として映っていたそれはやがて大きくなり、シャツに書かれた「ＩラブＧＨＯＳＴ」の文字が読める頃には、その趣味の悪い服の持ち主が誰なのか来夢にはわかった。
「みうらちゃん！」
「やっほー、来夢ちゃん」
嬉しそうに声を上げる来夢に、少女はフランクな挨拶を返した。彼女のクラスメートで、一度名物ミステリースポットを作ろうとした時に世話になった、日向みうらである。
栗色のおさげに度のきつそうな眼鏡が乗った顔を、来夢に向けると、彼女はいきなりこんなことを聞いてきた。
「ところで来夢ちゃん。近くに面白そうな神社とか仏閣とかないかな」
「え？」
「また地元でミステリースポットっぽいところを探そうと思うんだけど、どうにもいいと

ころがなくてねぇ。駅周辺の神社とかは大体見たし。他に神社なかったかなと」
「それなら……」
来夢は何か言いかけて、ふと思いついたように口ごもった。両手を打ち鳴らし、みうらに向かって微笑む。
「神社に行く用事があるから、一緒に行こうか」
「え？　神社に用があるの？　来夢ちゃんが？」
「ううん、神社の巫女さんに用があるの」
そしてみうらの手を引っ張ると、歩き出した。

彼女たちがついたのは、戸川神社という神社だった。
小さなこの神社を、以前来夢たちは名物にしようとしたことがある。結局、巫女をしている設楽華乃の要望にもより、その計画は頓挫したが。
来夢たちが神社につくと、境内を掃いている巫女装束の女性が、鳥居をくぐった彼女らに気づき、面を上げた。細くはかなげな顔立ちに微笑を浮かべながら、声をかけてくる。
「あ、こんにちは来夢ちゃん」
「こんにちは、華乃ちゃん」
巫女、設楽華乃に挨拶をすると、来夢はみうらを紹介した。
「そういうわけで、この神社を見せてあげてもいいかな」
「ええ、いいわよ」
華乃が許可を出すと、みうらは「やっほう」と快哉を上げて早速神社のあちこちを見て

回る。怪しげな風景があれば、手に持つカメラで写すつもりだ。
そんな彼女に苦笑を浮かべてから、ふと来夢は華乃の方を見る。
「あのさ、華乃ちゃん。ちょっと相談があるんだけど」
「なに？」
「実は、コンビニエンスストアがね」
来夢はすべてを話し終えてから、「隆也のように再建計画を立てるにはどうすればいいか」と相談を持ちかけた。
が、華乃はその言葉に少し眉を寄せると、
「それは、無理なんじゃないかしら」
「え？」
「その、来夢ちゃんには、新井くんみたいなことはできないと思うの。だって、タイプがまったく違うから」
「え、えー。そうかなぁ」
涙目になる来夢。
華乃は、申し訳ないように少し微苦笑を交えると、こう続ける。
「あのね、前に私がここを宣伝するのがイヤだって言い出せなかった時、新井くんはすごく自信ありげに『来夢なら話せばわかってくれる』って言ってくれたの。その時、思った。新井くんって、来夢ちゃんのこと……ううん、色々なことをよく見てるんだって」
「うん、隆くんはそうだよ。色々とものごとを見て、すごく色々考えて、それから判断してるの。だから今までだって、色々な人の役に立つような企画を作ってこれたんだよ」

「それと同じことを、来夢ちゃんはできる？」
「う」
来夢は言葉につまり、情けなさそうに「無理だなぁ」とつぶやいた。
その落胆した表情に、ふと首を傾げて、華乃が尋ねる。
「来夢ちゃん、妙にこだわってない？」
「え、何が」
「新井くんのやり方通りに、しないといけないって」
「うーん、そうかな？」
そういえば、そうかもしれない。来夢は思った。自分が隆也の考えを踏襲しようと思ったのはほぼ直感だが、その直感自体が、少しいつもの自分らしからぬ気もした。
そして、その理由にも心当たりがある。
自分は隆也にこだわりたいのだ。彼の気持ちを、正確に知りたいから。
「華乃ちゃん、実はね」
少し躊躇してから、来夢はそのことも親友に相談してしまうことにした。
「わたし、隆くんに告白されたの」
「あ、そうなんだ」
「……え、そんなあっさり？」
拍子抜けしてしまう来夢だが、これは仕方がない。華乃はとっくに隆也の気持ちに気づいていて、彼に恋愛のお守りを渡したくらいなのだ。
彼女はくすくすと笑うと、「それで？」と言葉を続ける。相談があると見抜いているのだ。

来夢はうなずくと、

「……隆くんは言ったの。『つき合ってくれ』『彼女になってくれ』って。わたし、隆くんのことは好きだけど、つき合うとか彼女とか、よくわからない。経験ないから」

そして彼女はため息を吐いて、微苦笑を浮かべた。

「それに考えてみたら、わたしは今まで隆くんに色々と好き勝手頼んできたと思うけど、隆くんの気持ちあまり考えてこなかったと思うの。だって、隆くんがわたしを好きだなんて、思っても気づいてもいなかったもの。そう思ったら、隆くんが望んでる通りにできるか、自信なくなって。どう返事したらいいかわからなくなっちゃった」

だから、隆也の気持ちが知りたくなった。「つき合って欲しい」とはどういうことなのか。隆也は自分が「彼女」となることに、どういうことを求めているのか。

自分と隆也の間にある認識の溝を、来夢はできるだけ埋めたかった。だから、無意識に隆也の名物作りのやり方をトレースしようとしていたのかもしれない。まぁ、自分ではアイデアをひねり出せそうにもない、と自覚したこともちろん理由にはあるのだが。

「とにかくね、わたしはもっと隆くんの望む通りに……って、あれ？」

と、ここで。来夢は何かに引っかかり、不思議そうに首をひねった。

その隣で、華乃が体を折って震わせている。

「どうしたの、華乃ちゃん？」

驚く来夢。よく見れば、彼女は必死に笑いをこらえていた。

「ら、来夢ちゃん……悩む気持ちはわかるけど、そこまで決まっているなら、まず先に新井くんに返事をあげないと。気を持たせてたら、新井くん可哀想よ？」

「え、あ、ああ！」

来夢がうめき声をあげたとたん、ハイランドの店主の言葉が脳内で蘇った。

――八割はその答は自分の中で決まっているということだ。

そう。どう悩もうが、答そのものはもう決まっている。彼女は今さらながら、そのことに気づいた。そしてその答を口にするのは、他ならぬ自分だということにも。

「そっか……決めるのは全部、わたしなんだ」

告白の返事も。コンビニの再建案も。

自分は隆也じゃないから、隆也のぶんまで考えることはできない。ましてや、答にそれをふくめることなど不可能だ。

それなら……自分の思うように、やればいい。

そのきわめてイージーな結論を導き出した瞬間、来夢の中に何かがひらめいた。彼女は親友を見つめると、深々と頭を下げる。

「ありがとう、華乃ちゃん。おかげでわかったよ、自分がどうすればいいのか」

「そう、よかった。ならあとは簡単よね」

「うん」

来夢はうなずくと、境内を駆け回っているみうらをぼんやり見つめながら、しかし声にはしっかりとした意思をこめてつぶやいた。

「あとは、実行に移すだけ」

翌日。来夢は、田村の店を訪ねた。

新しくも客の入りが乏しいコンビニの店主は、目を輝かせて彼女に問う。
「来夢ちゃん、それで何か思いついた？」
「うん、まぁ」
来夢はうなずくと、店の前、ダストボックス置き場と小さな駐車場を兼ねたスペースで、その周囲をぐるりと腕を回すことで示した。
「えっと、この辺にですね……」
思いついたアイデアを話す。
田村は驚いたように目を丸くした。
「……え、そんなことで客が来るようになるの？」
「はい」
「あの、失礼だけど。根拠は？」
田村のおずおずとした問いかけに、来夢は胸を張ると、
「ありません」
と、きっぱり答えた。

○

アメリカへの留学は、ホームステイの形式で行われていた。向こうの文化をより肌で感じ取れるように、とのことらしい。
そのホームステイ先の民家、ロサンゼルス近郊の住宅にて。学校から帰ってきた隆也は、

金髪碧眼ながら恰幅のよい女性に……この家の婦人だ……「手紙が来てるわよ」と言われた。

受け取り、差出人を確かめて、少し笑う。

その表情に見え隠れするものがあったのか、女性はニヤニヤ笑いながら尋ねた。

「なに？　タカヤのステディ？」

「あー、そうだったらいいかな」

まだ慣れていない言葉でぎこちなく言うと、隆也は階段を上って二階へと上がった。そこには女性の子供がかつて使っていた部屋があり、今は外で暮らしているということで、隆也にあてがわれているのだ。

彼は手紙の封を破ると、中の折りたたまれた便せんを取り出した。

そこに連なった丸い文字は、言うまでもなく来夢のものだった。

『親愛なる隆くんへ』

彼女にしては、持って回った言い回しで始まっている。隆也は何も言わず、とりあえず目だけを文面に走らせていった。

そこには、彼女の近況が記されていた。学校のこと、テストのこと、友人のこと、最近買った本から、ＣＤ、近くでオープンした店のことなど。考えながら書いたのか、若干内容にとりとめがない。そこが来夢らしいといえば、来夢らしいのだが。

そしてそれら雑談は前置きだったのか、段落は一つ区切られる。「そういえば」を頭に

して、ややまとまった内容の報告が現れた。

『コンビニエンスストアを、名物にすることができました』

結論が先走った一文に、「はん？」と隆也は眉を寄せた。幸い、すぐにどういう意味であるかが書かれてある。田村氏からコンビニエンスストアの立て直しを依頼されたことが書かれてあった。

読み進めていくと、最終的に彼女はこう提案したらしい。

『コンビニの前に、N市で取れた野菜直売のコーナーを作るのを、提案したの。ほら、時々家の近所で売ってたでしょう？　あれをコンビニに置くことで、特色を出したらいいんじゃないかと思って』

田村のコンビニの周囲には、他のコンビニはあっても、スーパーや八百屋のような新鮮な野菜を置いてある店はなかった。気軽にそれらが買えるということと、その野菜が近くで作られているという能書きから、直売コーナーはコンビニの目玉として成立したのである。また、店主が野菜を管理してくれるということで、手間が省けるので、農家の方としても協力的に野菜を卸してくれた。

ただし、鮮度が売りではあるので、販売時間の制限はあるのだが。それでも、今までに比べればコンビニに足を運ぶ人は増えたのだという。

「ふぅん。あいつもなかなかやるじゃないか」

隆也は微笑を浮かべると、手紙を読み進めた。

すぐに眉を寄せる。何やら、文章の雰囲気が変わり始めたのだ。そこには、来夢の切実な想いがあふれているかのようであった。

『それでね、隆くん。わたし、今回のことでわかったんだけど。わたしは隆くんとは違うから、隆くんみたいに賢くものごとを考えることはできなかった。今度のアイデアも、ほとんど直感だったし。それがどういう結果を生んだのかは、田村さんに教えてもらってやっとわかったの』

これを書きながら、彼女が苦笑を浮かべている光景が、隆也には容易に想像できた。

『でもね、わたしなりの方法でも、コンビニを名物にすることはできたんだよ。わたしは隆くんとは違うけど、わたしなりの答を出すことができる。そう思ったらね、この前返せなかった返事も、今なら返せるって思ったの』

「来夢……」

『本当にごめんね隆くん。わたし、自分のことしか考えてなかった。どうやったら、自分は隆くんの気持ちに応えられるか、そもそも応えることができるのかって、不安に思ってた。でも、隆くんはもっと不安だったよね。告白して返事が気にならないはずないのに。わたし、そのことに気づけなかった』

手紙を持つ手が震える。隆也は、一度目を止めた。この文章の続きを早く見たいような、見るのがためらわれるような、そんな葛藤に襲われる。

しかし。彼は勇気を持って、次の文へと進んだ。

そこには、こう書かれてあった。

『わたしね……隆くんのことが好き。ずっと一緒にいたい。隆くんの望み通りに全部はできないかもしれないけど、努力していきたいです。それが、わたしなりの答だから』

「……」

『だから隆くん、早く帰ってきてね。わがままかもしれないけど、隆くんいないと寂しいから。留学は一年はかかるみたいだけど、それは何とかしてください。大丈夫、隆くんなら何とかできるよ』

「……無茶言うな、おい」

『それじゃ、隆くんが帰ってくるのを心から待っています。帰ってきたら、約束通り絶対に返事するから。楽しみにしていてね。それじゃぁ』

そして、隆也は一度目を上げた。ふっ、と小さく息を吐く。淡泊な反応？　いや、幸せすぎたのだ。幸せすぎて、何を言えばいいかわからない。

とりあえず、悪態が出た。

「『帰ってきたら返事する』って……もう言っちゃってるじゃないか、バカ」

彼が心から願っていた返事を。

来夢がここにいれば、隆也は間違いなく言っていただろう。

俺の望みとかは、どうでもいい。ただ、来夢がそばにいてくれればいいんだ。

だから、彼がこの言葉を言うのは一年後ということになる。そのことに、無性に歯がゆさを感じてきた。

「そうだな。あのどうにも田舎くさい町は、好きにはなれないけど」

華やかな町並みでもなく、交通には不便が残り、これといった名物も「まだ」ない、彼の生まれ故郷。

それを思いながら、隆也はつぶやいた。

「……初めてだな。早くあそこに帰りたいって思ったのは」

そして微笑を浮かべると、便せんを折りたたんで、窓際にある勉強用のデスクに置いた。続きは、明日にでも読めばいい。今はただ、この胸の中に浮かぶ暖かな感触を、大事にしておきたかった。

そんな時、階下から婦人が呼ぶ声がする。

「ちょっと、タカヤ。棚から物を降ろすの手伝ってくれない？」

隆也は「Yes」と叫び返すと、そのまま扉を開き、階段を下りていった。

無人となった部屋に、窓からそよ風が入り込む。それは、畳んだ便せんの隙間に入って押し広げ、文章の一部分をさらした。

手紙の最後の方。来夢の名前が署名された後に、彼女の文字で。

『Ｆｒｏｍ・Ｎ　～Ｎ市より愛をこめて～』

隆也がいずれ帰る場所。

来夢がそれを待ち続ける場所。

その町の名前がいつまでも、誰もいない部屋の中で、ただ静かにたたずんでいた。

響け、
私たちの歌声
Illustration: うらら
広野未沙

あらすじ

不幸な事故で滑り止めだった優華女学院高等部に通うことになってしまった有香は、クラスメイトのひかりに誘われて、弱小合唱部に入部する。いよいよヴォーカルアンサンブルコンテストが近づいてくる。しかし初めての大会に有香は気負ってしまいうまく歌えなくなってしまう。追い詰められる有香だがひかりの言葉になんとか立ち直る。そして大会。優華女学院高等部合唱部は見事三位に輝く。

土田菜々子（つちだななこ）

優華女学院合唱部部長。高三。成績優秀で教師の信頼も厚い。さばさばしている。

酒井有香（さかいゆか）

高一。受験日当日の事故により優華女学院に通うことに。平凡な家庭で育った平凡な女子高生。

友枝ひかり（ともえだひかり）

有香のクラスメイト。純粋培養のお嬢様。誰もが認める美少女。合唱部。

第六話　未来へ続く

「有香ちゃん。有香ちゃん」

教室のドアを派手に開け、ぱたぱたと友枝ひかりが走ってくる。携帯電話をいじっていた酒井有香は、思わず顔を上げる。

昼休み。日直であるひかりは、用事があって職員室に行っていたはずだ。

三学期に入って、三年生が自由登校になった。若干の外部受験組が勉強にやってくるものの、基本的に登校してくる生徒は少ない。一、二年生の教室は普段通り賑やかだけれど、三年生の教室や廊下は基本的に静まりかえっていて、少し寂しい。

教室中の注目がひかりに集まるが、ひかりは特に気にしたそぶりもない。そのまま、一番後ろの有香の席まで突進してくる。

ひかりの言いたいことはなんとなく予想がついた。

ひかりは、有香の机に両手をつくと、満面の笑みで言う。

「菜々子さん、合格したんだって！」

右手に握るのは、ひかりのピンク色の携帯電話。

「うん。知ってる」
ひかりにつられて思わず笑顔になりながら、有香はうなずく。
ひかりは、ほんの少しがっかりした顔をみせた。たぶん、有香を驚かせたかったんだろう。
今日は、有香の所属する優華女学院高等部合唱部の部長、土田菜々子の大学の合格発表日。東京にある有名私大。菜々子は「いつも通りやれば大丈夫よ」と言っていたし、合格する実力は十分すぎるほどあるはずだけれど、やはり心配だった。
「そうなの？」
「さっき、土田先輩からメール来たよ」
くすくすと笑いながら、有香も自分の白い携帯電話を出す。
土田先輩。そう登録されたアドレスからきたメールは、簡潔に「第一志望合格しました」だけ。それがかえって菜々子らしいとも言えた。ＣＣで有香やひかり、部活のみんなのアドレスも指定してあったのだけれど、ひかりには本文しか見えていなかったのだろう。
「あ。そうだよね。なあんだ」
「でも、すごいよね。土田先輩。本当に合格しちゃうなんて」
はあ、と有香はため息をもらす。内部進学が多いこの優華女学院で地元の国立大学進学を目指している有香にとって、自分の進路をしっかりと見据えている菜々子は憧れの存在だった。
「うん。やっぱりさすがだよね。菜々子さん。燦然と輝いてるよ」
ひかりもうんとうなずく。

（いいなあ）

有香は携帯電話を閉じながら、ふうとため息をつく。

有香も二年後、菜々子のように笑えるだろうか。少しずつ模試を受け始めたりしているけれど、もっと気合いを入れてがんばらなくちゃ、と思う。

「あ。あと、もう一つ連絡」

「何？」

有香はかすかに首をかしげた。ひかりの「連絡」が想像もつかない。

「お兄ちゃんも、大学合格しました。菜々子さんと同じところ。さっき、連絡がきたんだ」

「おめでとう」

ひかりの兄、義昭は進学校で有名な昇星学院に通う高校三年生だ。菜々子も数回会ったことがある。涼やかな青年で、優華女学院でひそかに人気があるのもうなずけた。

「もっと他に言葉ないのー？　有香ちゃん」

「へ？　大学合格おめでとうございます？」

ひかりは深々と息を吐き出した。

「道のり長いなあ」

「？」

有香にはひかりのため息の意味がさっぱりわからない。

（友枝さんも合格したんだ）

知っている人が進路を決めていくのはとても嬉しい。合唱部の副部長である月岡若菜は、一足さきに内部進学とはいえ、短大の第一志望の学科に合格している。

三月も近い。卒業式が終わればきっとあっという間に四月がやってくるのだろう。
そして、有香は二年生になる。
「そろそろ二年生だね。早いね」
「そうだね」
ひかりの呟きに有香はうなずく。
「クラス替えかあ。一緒にクラスになれるといいね」
あっという間の一年だった。
ふと、合唱部に入るときに菜々子とした約束を思い出す。
――一年間頑張って続けてみて、駄目だと思ったらやめる。どう？
もちろん答えは――。

放課後。有香とひかりは一緒に音楽室の扉を開ける。合唱部の活動のためだ。
十一月のヴォーカルアンサンブルコンテストを最後に、三年生二人が引退して、合唱部は四人になった。
今は、二週間に一曲ペースで新しい曲を仕上げている。特に発表する機会があるわけではなく、単に自分たちの練習のためだ。童謡や女声三部合唱はもちろん、Ｊポップを合唱に編曲したものなども歌う。有香は、いろいろな曲に触れられることが楽しかった。
「おっ。一年来た！」
声を上げるのは、新部長の木浦めぐみだ。ピアノのところで、同じく二年の金澤亜美と何かを話していたらしい。ぶんぶんと大きく手を振る。

「どうかしたんですか？」
ひかりが声を上げ、ピアノへ駆け寄る。有香もそれに続いた。
「三年生の合格祝いできないかなって思って」
にっこりと隣にいた金澤が笑う。木浦がうんうんとうなずいた。
「今、亜美とも話してたんだけど、今日、土田先輩も見事第一志望に合格したでしょう？
卒業式後とかに時間取って、ぱーっとお祝いしようかなって。月岡先輩は内部進学だからこっちだけど、土田先輩は上京しちゃうわけだし」
「それ、いいですね」
最初にのったのは、ひかりだった。有香も追随するようにうなずく。
「でしょ？　それで、打ち合わせ、ですよ」
木浦はかなり楽しそうだ。もともとこういうお祭りごとが好きなのだろう。
有香の胸もわくわくしてくる。
「まあ、三年生に連絡取って、都合いい日は聞いてみるよ。二人は都合悪い日ある？　私と亜美はいつでもいいんだけど」
「特に……ないと思います」
「あたしもひかりちゃんと同じです」
「じゃ、都合は三年生優先で。あとは、何しようか？」
今日の部活は作戦会議から始まる。
「そりゃ、歌でしょ」
金澤の言葉に木浦が反応する。

「合唱部なんだし。三年生が引退してからの成長を見せて、安心して卒業できるようにしてあげないと」
「あ。そうね。引退してから練習した歌のなかから、二つくらいピックアップして」
金澤がうんうんとうなずいた。ひかりも、いいですねーなどと同意している。
（――え？）
青くなるのは有香だ。
菜々子が引退して、アルトは有香一人。日々の練習ではなんとかなっていると思っていた。けれど、それは特に発表するあてもなく、気楽に歌っていたからだ。
（三年生の前で歌う？）
どうしよう。
「特に有香は、土田先輩に成長したところ、見せてあげなきゃ」
木浦がにっこりと笑って、軽くプレッシャーをかけてくる。
「……あはは」
乾いた笑いしか出てこない。
木浦の言いたいことは理解できる。
なんてったって、アルトは一人なのだ。
初心者として合唱部に入部した有香。勝手がわからなくて、苦労した。とにかく音を追うのが精一杯で、周りの声とか、表現とか、そういうものに頭が回らなかった。
それを支えてくれたのは、同じアルトの菜々子だった。
菜々子がいるときは、菜々子に頼り切りだった。音程が不安定になれば、耳を澄ませば

菜々子の声が聞こえてきた。菜々子の声に寄り添うように歌えば、音も安定した。
けれど。その菜々子はいない。
「まあ、大丈夫だって。有香、最近かなりいいと思うし」
「本当ですか？　金澤先輩」
「本当だって」
にっこりと金澤が微笑む。
「だから、これだけできるっていうのを、土田先輩に見せてあげなさい」
「やっぱりプレッシャーじゃないですか！」
有香は悲鳴に近い声を上げる。
――もっとも、有香が一人抵抗したところで、歌うという決定が覆るわけでもなく、有香は懸命に練習することを決意するのだった。

「それにしても、菜々子さんすごいよねえ」
駅へ続く道をひかりと二人で並んで歩く。午後六時少し前。通りは制服をきた高校生や会社帰りのサラリーマンで賑わっている。車の量も多い。
「うちの学校から有名私大合格なんて快挙っていっていいよね」
ひかりは自分のことのように嬉しそうだ。昼休みにメールが来たときから、ずっとそう。見ているこっちがほほえましくなってしまう。二年生二人も同じような気持ちだったらしい。今日の打ち合わせの最中、ずっとひかりにつられてにこにこしていた。
木浦が三年生二人に日付を伺うメールをした。菜々子の引っ越しの予定もあるし、卒業

式の前後あたりが候補じゃないか、と木浦は思っているらしい。
もっとも、有香の頭の中は、みんなで披露する曲のことで一杯だった。歌う曲はすでに決まっている。うち一曲はおぼろ月夜——有香が合唱部で初めて歌った曲だった。
（きちんとできるといいなあ）
一人でもしっかり歌えるようになってきたはずだ。
「有香ちゃん。やっぱり送別会のこと気にしてる？」
「ちょっとね。一人で歌うのって、緊張するし」
「大丈夫だよ。金澤先輩も行ってたじゃない。最近かなりいいって。菜々子さんだって、そう思うはずだよ」
「ありがとう」
ひかりが懸命に有香を励まそうとしているのが伝わってくる。その気持ちが嬉しい。
「うん。私もがんばるから。——あ」
隣を歩いていたひかりが足を止める。ショッピングモールの前だった。
「ねえ。有香ちゃん。本屋さん寄っていい？　ちょっと見たい本があるんだ」
「いいよ」
早く家に帰らなくてはいけない、というわけではない。ひかりだって迎えがあるわけだから、そんなに遅くなるわけではないだろう。有香は軽く了承する。
駅前のショッピングモールには、本屋も入っている。そこそこ大きな本屋で、有香も愛用していた。
「何見るの？」

「欲しい本が発売しているかなって。文庫なんだけど。あと、参考書」
「参考書、かあ。そろそろ二年生だもんね。でも、ひかりちゃんの場合、お兄さんからもらえばいいんじゃない？」
「そう思ったんだけどね」
ひかりが小さく肩をすくめる。
「お兄ちゃんのじゃ、わけわからないんだよ。お兄ちゃん理系だし。私、間違っても理系には進まないから。文系の本はもらうつもりだけどね」
（あ）
そういえば、ひかりは数学は大の苦手だった。
「有香ちゃんもお兄ちゃんのもらったりした？」
「そういえば、あたしもないなあ」
兄は、今度大学二年になる。そこそこのレベルの私立大学で、学部は経済学部だったはずだ。もっとも、兄から聞こえてくる大学生活は、勉学よりもサークルとバイトのようだが。
「あたしの兄の場合、あんまり勉学は期待できないからなあ」
ショッピングモールに入る。寄り道する高校生の他にも、夕飯の買い物の時間と重なっているのだろうか。人は多い。ひかりと何度も一緒に来たショッピングモール。
本屋は、いつきても賑わっている。雑誌コーナーと漫画コーナーが特に人がいるように思える。
ひかりは、文庫コーナーにさらっと目を通したが、お目当ての本はまだ発売していなかっ

たらしい。二人で参考書コーナーに向かうことにする。
「数学の参考書が欲しいんだ。有香ちゃんはおすすめある？」
「うーん。あたしもわかんないなあ。やっぱり直接見てみるのが一番じゃない？」
「有香じゃない」
聞き覚えのある声が、有香の名前を呼ぶ。
有香は足を止めた。ひかりも立ち止まる。
振り返る。——この声に、あまりいい思い出はない。
「久しぶり」
にっこりと笑いかけてくるのは、有香の中学時代の同級生——下田留奈だった。一方的にライバル視されていた記憶がある。友だち曰く、有香が留奈が思いを寄せていた男の子と親しげだったのが気にくわなかったそうだ。小学校の同級生だったその男子生徒とは、確かによく話してはいたけれど、親しいというほどではなかったはずなのに。
（そういえば、彼女も中央高校だったっけ）
得意げに微笑む留奈は、中央高校の制服に身を包んでいる。肩よりやや長い髪の毛は、うっすらと茶色に染められている。薄化粧もしているようだ。それが学校からなのか、それとも放課後だからなのかは知らない。
そして、隣には見知らぬ男子生徒が立っていた。彼も中央高校の制服を着ている。留奈の彼氏なのだろう。「思いを寄せていた」男の子とは別人だ。べたべたと留奈が腕を絡めている。
「久しぶり。下田さん」

正直あまり相手をしたくない。有香はそっけなく言う。ひかりが不思議そうな顔をしている。わざわざ声をかけてきた知り合いに、親しげな態度を示さないからだろう。

あからさまに突き放したつもりだったのに、留奈は食いついてくる。

「優華女学院の生活はどう？」

「楽しくやってるけど」

「受験は残念だったね。私、てっきり、有香が私の後輩になるのかと思って楽しみにしてたのに」

「……」

有香はなるべく平常心を心がけた。ここで反応したら、相手の思うつぼだ。

ピンクのルージュが塗られた留奈の唇が、嘲笑するようにゆがむ。

彼氏の方が留奈に話しかけている。有香のことについて尋ねているんだろう。中学の同級生。それ以上でも以下でもないはずだ。

「滑り止めで嫌々優華女学院に行ったのよ。いくら成績よくても、受験できなくちゃ仕方ないもんね」

くすくすと留奈が笑う。

「大学進学目指してたから、てっきり一浪して中央高校に入学すると思ってたのに」

「ああ。優華は確か、みんな内部進学するんだっけ」

「そうそう。大学進学は絶望的よね。かわいそう」

ちらちらと小馬鹿にしたように有香をみる留奈。

むかむかとおなかのそこから何かがわき上がってくる。

わざわざ声をかけたのは、有香に中央高校の生徒、という優越感を見せつけるためだろう。思えば、留奈は有香に何か勝った試しがなかった。成績だって有香の方がよかった。運動神経だって。少なくとも明確に勝ち負けがわかるものについては、有香が勝っていた。だからこそ、有香は留奈の存在を黙殺できていたのだ。

すうと有香は息を吸い込んだ。落ち着こう。

確かに、四月の自分だったら。中央高校の制服を見る度に胸が締め付けられていたときの自分だったら。留奈の思惑にまんまとはまっていただろう。

けれど。今は違う。

無視しよう。大人になって聞き流そう。

中央高校に合格したりかだけれど、有香は受験ができずスタートラインにすら立てなかった。受験に落ちたわけじゃない。中央高校に予定通り受験できていたら、有香だって合格していたはずだ。それは、留奈だってわかっているのだろう。

勝ったけれど、不戦勝。同じ土俵で勝負をしたわけじゃない。

「行こう。ひ……」

ひかりをうながして、その場を去ろうとしたときだった。

「別に、優華に通っても、きちんとすごい大学に合格するひとだっているんだから」

有香は目を丸くした。ひかりは、ぎゅっと両手を握って、留奈を見据えている。

まさか、ひかりが口を出してくるなんて思わなかった。

怪訝そうに眉をひそめる留奈に、さらにひかりは続ける。わずかにこぶしが震えていた。

「大学進学目指すなら、高校なんて過程じゃない。優華にだって、昇星に通う人と同じ大

学に合格する人だっているんだからね」
菜々子と、ひかりの兄の義昭のことを言っているのだろう。
――でも、たしかにそうだ。
（ありがとう。ひかりちゃん）
ひかりの気持ちが嬉しかった。ひかりが、初対面の留奈に対して、言い返してくれたことが、ありがたかった。いい友だちを持った、と思った。
「いいよ。ひかりちゃん。行こう」
有香は、ぽんとひかりの肩に手を置いた。
「え？　有香ちゃん。いいの？」
「うん」
有香は、ひかりに精一杯の微笑みを見せる。
それから、冷ややかな視線を留奈に向けた。
彼女が見たいのは、有香が悔しがっているところだろう。
けれど、絶対、留奈のほしがるものなんてあげない。――絶対に。
「あと、下田さん。あたし、優華女学院で満足してるから。中央高校通ったからって、必ずしも大学に進学できるって保証はないわけだし。せいぜい頑張ってね」
最後には余裕の笑顔も付け加える。もっと別の反応を期待していたのだろう。留奈は一瞬目を丸くした後、悔しそうに強く唇を噛んだ。その様子を見ただけで、溜飲が下がる。
（そうだよ。中央高校に通ったからって、必ずしも志望の大学に合格できるわけじゃない）
確かに中央高校の方が受験のサポートは篤いだろう。けれど、自分が努力しなければ、

いくら体制が整っていたって、無駄だ。
けれど、逆に言えば自分が努力さえ怠らなければ、可能性は開けている。菜々子がそれを示してくれたから。
有香はひかりを促して、歩き始める。ひかりは驚いたようだが、すぐに有香の後を追ってきてくれた。留奈たちが追ってくる気配はない。
本屋を出て、大きな通路に出る。
「有香ちゃん。いいの？　言われっぱなしで。すっごくむかつくじゃない」
「いいよ。別に。どうでもいいし。今更、中央高校に行きたいなんて思ってないから」
――そうだ。
いつからだろう。中央高校の制服を見ても、うらやましいと思わなくなったのは。
詳しくは思い出せない。でも、理由ならわかる。
たぶん、ひかりがいたからだ。
ひかりが合唱部に誘ってくれたからだ。
合唱部に入って、菜々子と出会って、努力さえすれば、道はひらけることを知ったからだ。
「ありがとう。ひかりちゃん」
ひかりはまだ憤然としている。
「言い返したこと？　だって、私が我慢できなかったんだもん。優華のこと馬鹿にしているみたいだしさ。優華だって、中央高校と著しくレベルが離れてるってわけじゃないのに、あのひと、優華のこともものすごく下に見てたじゃない」

「それもあるけど」
優華女学院に通ってよかった、と思う。ひかりに出会ってよかった。本人に面と向かってはきっと恥ずかしくて言えないけれど。
「いろいろまとめて」
「？」
ひかりが首をかしげる。有香は曖昧に微笑んでごまかした。ぽん、とひかりの背中を叩く。
いつまでもひっぱりたい話題ではない。
「ま、嫌なことは忘れようよ。彼女と同じ高校に行かなくてほんとよかったと思うし。あ。参考書、まともに見れなかったね。ごめんね」
「いいよ。別に。いつでも見られるから。でも、有香ちゃんが思ったより気にしてないみたいでよかった」
「あたしは最初から気にしてないよ。むしろ、気にしてたのは向こうだし」
たぶん、向こうから声をかけてこなかったら、すれ違ったところで、見覚えのある顔だなあ程度の認識だっただろう。強がりではなく有香はそう思う。
「本屋さん。確か駅前にもう一軒あったよね。そっち寄ろうか。ひかりちゃん」
ショッピングモールの本屋ほど大きくはないけれど、そこそこの大きさの本屋があったはずだ。
「うん」
ひかりが大きくうなずいた。

卒業式を来週に控えた土曜日。

優華女学院高等部の第二音楽室では、三年生を送る会の準備が行われていた。

「買い出し行ってきました！」

有香は大きく声をあげる。二リットルペットボトルを二本とお菓子を少々。チョコレートにポテトチップス、おせんべい。ひかりと一緒にわけて持ってきたけれど、ペットボトルはなかなか重い。

「ありがとう」

窓に紙で作った花を飾り付けていた部長の木浦が手を休める。

「テーブルの上に置いておいて」

「了解です」

音楽室の本来の机はすべて横に片付けて、借りてきた長机を二つ並べてある。椅子は顧問の相澤先生の分も含めて七個。

ペットボトルを机の上に置いて、ようやく重さから解放された。

「お茶とジュースでいいですよね？」

「うん。いい、いい。お菓子もなかなかいいセレクト」

花を飾り終えた木浦が、買い物袋をのぞいて、満足そうにうなずいている。

「どれどれ？」

同じく二年の金澤も木浦に習う。黒板に描かれている「卒業おめでとう」の文字とイラストは金澤の力作だ。

「たしかに」
がらりと音楽室の扉が開いた。
「あら。綺麗に飾り付けたわね」
顧問の相澤先生だった。音楽室は、紙で作った花や折り紙の輪で飾り付けられている。部活終了後に少しずつ作ったものたちだ。薄い紙で花をつくるなんて、小学校以来の経験かもしれない。
「先生。それは？」
木浦がめざとく相澤先生が持っている箱に目をやる。白いお菓子屋さんの箱。
「個人的な差し入れよ。きっと中身は木浦さんの想像通り」
「本当ですか！」
ぱあっと木浦の笑顔が華やいだ。
木浦だけではない。金澤だってひかりだって、そして有香だって同じだろう。
「そろそろだよね。一時半」
ひかりが時計を見る。丸時計にも一つピンクの花が咲いていた。
一時半から会は始まる予定だ。菜々子と若菜は二人一緒に来ることになっている。
「なんだか、緊張するなあ」
一生懸命練習した。録音したものを聞いたりもした。自分の声が悪目立ちしている、なんてことはないはずだ。
「大丈夫だよ。有香、がんばってたから」
木浦が励ましてくれる。

「はい」
有香はうなずいた。
「来たみたい」
入り口で偵察していた金澤がぱたぱたと走ってくる。確かに入り口の方をのぞけば、人影が見える。有香たち四人は入り口付近に並んで立った。
人影が立ち止まる。
扉が開こうとした瞬間、せーの、と木浦が声をかける。
「卒業おめでとうございます」
土田菜々子と月岡若菜。二人の卒業生が顔を出した。
ぱちぱちぱちと拍手で出迎える。
三年生に会うのは、久しぶりだ。特に、菜々子には。若菜の方はたまに顔を出してくれていたけれど、受験があった菜々子はさすがに顔を出す暇はないらしく、姿をずっと見かけていなかった。
「ありがとう」
菜々子が微笑んだ。その隣に立つ若菜は、木浦ににやりと笑いかける。
「今日は期待してるからね」
「プレッシャーかけないでくださいよ。月岡先輩」
「でも、木浦のことだから、いろいろ考えてるんでしょ？」
「だから、プレッシャーかけないでくださいってば」
木浦が大げさに頭を抱えた。

「二人とも、椅子に座ってください」
金澤が三年生二人に声をかける。テーブルの中央、花で飾られている席が、三年生のために用意したものだ。
二人が座ったのを確認して、有香たちも自分たちの椅子に座る。有香は菜々子の隣。菜々子を挟んで木浦。有香の向かい側にひかり。ひかりの隣には若菜、金澤が続く。相澤先生はお誕生日席だ。
全員が席に着いたのを見計らって、ひかりが立ち上がる。
「えっと、これから三年生を送る会を始めたいと思います！」

三年生を送る会といっても、顧問の相澤先生のお話と歌以外はほとんどご歓談みたいなものだ。相澤先生に軽く話をしてもらい、あとは自由にぺちゃくちゃとしゃべる。
話題はやっぱり三年生の進路。そして、部活の様子だった。
「土田先輩すごいですよね。本当に合格しちゃうんだもん」
「うちの学校からって、快挙じゃないですか？」
「ま、菜々子はずっと努力してたからね」
「どうして若菜が答えるのよ」
有香はひたすら聞き役だ。聞くだけでも十分に面白い。
「たしかに、優華の長い歴史の中で初めてかもしれないわね」
「やっぱり？　そうですよね。先生」
ひかりは、自分のことのように嬉しそうだ。菜々子とひかりの兄は、同じ大学に合格し

た。兄の合格よりも菜々子の合格を喜んでいるようにすら見える。
「それで、部活の方はどうなのかなあ？」
「みんながんばってますよー」
「本当に？　私、安心して卒業できる？　特に木浦」
若菜の言葉に、有香の心臓がどきりとする。軽い口調から、冗談だということはわかっているけれど。
若菜はメゾソプラノだった。同じメゾの木浦のことが心配なのだろう。
メゾは木浦一人。しかし、部長なだけあって、木浦の声はいつもしっかりしている。
「してください。してください。頑張ってますから」
「そう？　木浦の言うこと信じるよ？」
有香はちらちらと時計を盗み見る。二時から、歌の発表になる。
（大丈夫、だよね）
今日だって、早く集まって練習をした。できは上々。
大丈夫。有香は自分に言い聞かせる。
丸時計の針が、二時を指す。金澤が立ち上がった。
「ちょっといいですか？」
みんなの注目が金澤に集まる。
「これから、さっき話にも出ましたが、先輩方が引退してからの、私たちのがんばりの成果を発表したいと思います」
――いよいよだ。

有香は菜々子に視線を向ける。菜々子と目が合った。がんばって。そう言うように菜々子はにこりと笑った。

音楽室の黒板の前に四人は立つ。ピアノの付近は一段高くなっていて、ちょっとしたステージのようだ。

観客は三年生二人と相澤先生。今日は指揮をおかず、合図だけで歌う。

こんなに緊張するのは、アンサンブルコンテストのとき以来だ。観客は三人しかいないというのに。

「それでは、始めます」

木浦の声を合図に頭を下げると、三人が拍手をしてくれる。

ひかりがぽーんとピアノを鳴らした。木浦が一歩前に踏み出し、右手をあげる。

一曲目は、有名なアニメ映画の主題歌だ。数小節指揮をして、木浦は元の位置に戻る。指揮がないので、みんなの声をよく聞きながら歌わなくてはならない。

この曲は、アルトが目立つ部分は特にない。下でしっかり音を支えるのがアルトの役目だ。

ハーモニーが綺麗に響く。ソプラノ、メゾ。それぞれのパートに有香は気を配りながら、自分のパートを歌う。テンポが速くならないように。

二曲目は、少し前にヒットしたJポップの女性合唱編曲版。これはプレッシャーだった。アルトが旋律を歌う部分がある。アルトは一人。つまり、有香しかいない。

（大丈夫）

一番最初のメロディはソプラノが歌う。次にメゾがメロディを引き継ぐ。
木浦の伸びやかな声が響く。一人だけれど、他のパートの音に負けていない。
そして、さびに入る直前。
いよいよアルトがメロディを歌う。
アルトのソロ部分だ。わずか二小節ほどのメロディだけれど、アルトの聞かせどころになる。ソプラノとメゾのハミングに乗せながら、有香は声を出す。
（なんとか、なった、かな）
またメロディはソプラノへと引き継がれる。
ちらりと菜々子に視線を向ける。菜々子は穏やかな表情を後輩たちに向けている。
（大丈夫、だった？）
直接評価を聞くまでは安心できないけれど、そんなに悪いできではなかったらしい。
有香はほっとする。
そして、最後は、部活で有香が一番最初に歌った曲――おぼろ月夜。
あのときは、菜々子がいて、菜々子の声に合わせて歌っていればよかった。
三つのパートが重なって綺麗なハーモニーになるのがただただ楽しかった。
あれからそろそろ一年が経とうとしている。
音楽祭。夏合宿。そしてアンサンブルコンテスト。
いろいろな経験をしてきた。
少しずつでも成長している。そう思っていいだろうか。

歌が終わった。三年生と相澤先生が、拍手をしてくれる。
歌いきった。そんな感じがした。

「どうでしたか？」
席に戻るなり若菜に問いかけるのは木浦だ。
部長も務めている木浦だけれど、やはり気になるらしい。
「よかったよー。安心して卒業できる」
若菜がおどけながら言う。木浦が嬉しそうに顔をほころばせた。
「金澤も酒井も友枝も、よかったよ。ね、菜々子」
「よかったよね。菜々子」
若菜に話を振られて、菜々子がこくりとうなずいた。
「よくまとまっていたと思うわ」
前部長のお言葉に、みんなの顔がぱっと輝く。
「ありがとうございます」
木浦が代表して礼を述べ、みんなで頭を下げる。
菜々子に詳しい感想を聞きたい。
「あの……」
「酒井さん」
有香が声をかけようとした瞬間、菜々子の方から話しかけてくる。
「――がんばったわね。すごくよかったわよ」

「あ、ありがとうございます」
思いがけない言葉に、声がうわずった。
「。これで、私も安心して卒業できるわ」
「そんなに心配でした？」
無理もない、と思う。人の声に合わせることを知らなくて、声が浮いてしまったり。大会を意識しすぎて、力が入ってしまったり。菜々子にはすごく迷惑をかけた。
まだまだ有香は未熟だ。それはわかっている。
「そうね。ちょっと――っていうのは冗談よ」
菜々子にしては珍しく声を上げて笑う。
有香はほうっと息を吐き出した。冗談だとわかっていても、心臓に悪い。
「この一年で、かなり成長したと思うわ。一人でも安心して聞けた」
「そうですか？」
「ええ。アルトソロの部分あったでしょ？　気持ちよく声が伸びていたわよ」
菜々子にほめられて、有香は有頂天になる。
微笑んでいた菜々子だけれど、ふと真面目な顔になった。
「それで、どう？　来年も部活、続ける？」
――一年間頑張って続けてみて、駄目だと思ったらやめる。どう？
有香が入部するときに、菜々子とした約束。
（土田先輩も覚えていてくれたんだ）
元はと言えば、自分の居場所を見つけるために入った部活だった。

けれど。有香は思う。いつの間にか、合唱が、歌うことが、大好きになっていた。
答えはすでに決まっている。迷いなんてかけらもない。
じっと有香は菜々子の瞳を見つめる。
「はい」
有香は菜々子に力強くうなずいてみせた。
「そう。居場所は見つかった？」
菜々子の言葉に、有香はほんの少し考えてから、話し出す。
「はい。この前、中学時代の同級生に会ったんです。あたしの第一志望の中央高校に合格した子で。でも、あたし、全然何とも思わなかったんですよね。四月のあたしだったら、悔しくて悔しくて仕方なかったはずなのに」
菜々子はしっかりと有香を見て、有香の話をきいてくれる。
有香は数日前の出来事を思い出す。
憧れだったはずの中央高校の制服を着ていた留奈の姿を見ても、平静でいられた自分。挑発的なことを言われても、特に心は動かなかった。
「それで？」
「たぶん、それは、もう、優華女学院が、あたしの居場所になっているからだと思うんです」
もう、中央高校への憧れはない。
優華女学院高等部からだって、努力次第で自分の好きな道に進めると、菜々子が身をもって示してくれたから。
そして——。

有香は音楽室を見渡す。
笑っている若菜と木浦。金澤はジュースを飲みながら相澤先生と歓談している。金澤と話していたひかりだが、有香と菜々子が気になるらしい。
「何話してるの？」
ひかりが首を突っ込んでくる。
留奈に会ったとき。留奈に対してひかりが言い返してくれたこと。とても嬉しかった。
いつの間にか、部活は、有香の学校へ行く理由になった。有香の居場所になった。
優華女学院に居場所を得たからこそ、クラスにもなじめたし、勉強もがんばろうと思えるようになった。
有香に居場所をくれたのは、合唱部のみんなだ。
なかでも、ひかりと菜々子には感謝してもしたりない。
ひかりが誘ってくれなかったら、きっと有香は合唱部に入っていなかっただろう。
菜々子が、有香に道を示してくれなかったら、有香はいつまでも中央高校を引きずっていただろう。
「ちょっと、ね。いろいろ積もる話があるんだよ。ひかりちゃん」
「何それ。積もる話ってなんですか。菜々子さん」
「アルトの内緒の話よ」
菜々子にしては珍しく悪戯っぽく微笑んだ。
「えー？　私も混ぜてくださいよう」
ひかりが唇をとがらせる。菜々子が苦笑した。

「仕方ないわね。で？　混ぜるからにはひかりから話題を振って」
「えっと、菜々子さんはいつ引っ越すんですか？」
「来週の日曜日予定よ。一応住むところは決めたの。あなたのところは？」
　ひかりの兄、義昭のことを言っているのだろう。義昭と菜々子は面識がある。
「うちですか？　うちも来週の日曜日予定です。私は付き合いませんけど。お兄ちゃんったら、全然準備してないように見えるし。直前になってばたばたするのが目に見えます」
　はあとため息をつくひかり。有香は、去年の自分の兄の様子を思い出した。兄も直前になって慌てて引っ越し準備をしていたっけ。
「どうしたの？　有香ちゃん」
「どこも同じだなあって思って。去年のお兄ちゃん思い出した」
「菜々子さんは、やっぱり準備ばっちり？」
「私もあまり友枝くんのこと言えないかもね」
「えええ。それはない。それはないですよ。お兄ちゃんと同じ菜々子さんはイヤ」
「菜々子、新居どんな感じに決まったの？」
　いつの間にか、若菜や木浦、金澤も混じり、憧れの一人暮らしの話になる。特に、自宅から短大に通う若菜は、一人暮らしがうらやましいらしい。
　楽しいな、と有香は思う。
　このメンバーでずっと一緒に活動したかった。
　それは無理な話だとわかっているけれど。これが最後だと思うと、少ししんみりしてしまう。

話が少し途切れたところで、相澤先生が立ち上がった。
「ちょっといい？」
相澤先生の言葉に、みんなはおしゃべりをやめて注目する。
「ちょっとしたお知らせがあるの」
「お知らせ、ですか？」
木浦が代表して尋ねる。
「そう。この前連絡が来たんだけど」
相澤先生は珍しくもったいぶって、たっぷりとためている。
いったい、連絡とは何だろうか。有香には想像もつかない。
「今まで、県大会しかなかったアンサンブルコンテストだけれど、来年は合唱協会の六十周年記念で全国大会が開かれることになりました」
「本当ですか」
ひかりが大きな声を上げる。驚いたのはひかりだけじゃない。みんな、同じだ。
「本当よ。全国大会は十二月、東京で開かれるわ」
部員の顔を見回しながら、相澤先生が言った。
「東京ってことは、私は見に行けるわね」
菜々子が意味ありげに笑う。
「あ。じゃあ、私も菜々子のところに泊めてもらう！」
若菜が手を上げる。
「いいよね？」

「いいわよ。狭いかもしれないけど」
「もしもし。先輩方。それって……」
木浦がおそるおそる三年生に尋ねる。
二人は東京の全国大会に遊びに行く、と言っているのだ。全国大会は、もちろん県大会でいい成績を収めないと出ることができない。
それは、つまり。
うん、と三年生二人は大きくうなずく。若菜が代表で答えた。
「全国大会目指してがんばって」

＊　＊　＊

四月。有香が二年生になって、一週間が経とうとしている。
クラス替えでひかりとはクラスが別れてしまった。それでも、一緒に部活に行く習慣は変わっていない。
第二音楽室。合唱部の練習中。歌声が教室内に響く。
今日から、新入生が見学にやってくるのだ。
部活説明会で発表した合唱は、新入生になかなか好評だったと聞く。
ひかりなんかは、入学式からずっとまだ見ぬ後輩にそわそわしていた。
まあ、それも有香も同じなのだけれど。
いったい、どんな子が入部してくれるのだろう。

「来たみたいだよ。有香ちゃん」
ちらちらと扉を見ていたひかりが、有香の肩をつつく。ちらりとドアを見ると、確かに人影が見える。有香だけじゃない、木浦も金澤もドアに注目していた。
音楽室にわずかな緊張が走る。
扉が開いて、見学希望の新入生が二人顔をだした。去年の自分も、こんなに初々しかったのだろうか。
「あの……見学希望なんですけど」
有香は新入生に駆け寄り、にっこりと微笑んだ。
「ようこそ、合唱部へ」

――願わくは、ここが、あなたの居場所の一つになってくれますように。

平行線
シンドローム
水島朱音
Illustration: 正午あきら

あらすじ

澤村葉月は中学校の卒業式の日に、片思いの相手・塚本日向に告白する。しかし彼は「一年以内に僕を見つけることができたら返事を教える」という謎の言葉を残して、その日を境に姿を消してしまったのだった。

塚本日向

飄々として掴みどころがない少年。
地元の分家出身。

澤村葉月

ポジティブでさっぱりとした性格。
日向のことが好き。

第六話　そして交差する

遠くの空が、染まり始めている。夜明けが近い。
葉月は眠ることもできず、ぼんやりとベッドに座って窓の外を眺めていた。春のはじめのまだ冷たい空気が、しくしくと肌に染みていく。

今日、日向がこの街からいなくなる。

＊＊＊

『正月明け。日向に会いに行きましょう』
その言葉通り、依織は正月明けのバイト休みの日に葉月を連れ出した。
待ち合わせ場所は『華潮』。その場所を依織が指定したのは、二人が通い慣れている場所だから、という理由だけではなかった。
もう一人、同行者がいたからだ。

華潮から一番近いバス停まで歩いた葉月たちは、そこでバスが来るのを待っていた。駅の方面に向かうものならともかく、市の西の方に向かうバスは、そこまで本数が多くない。時刻表を指でなぞり、次のバスが来るまでもう少し時間がかかることを確認する。

「しかし、葉月ちゃんが日向くんの友達だったなんて、驚いたよ」

時刻表を見つめる葉月の背後から、そう声をかけたのは、もう一人の同行者。優だった。

葉月は振り返って、にっこりと笑顔を浮かべる。

「ほんと、世間って狭いですよね」

軽い調子で言ってみせたが、その表情とは裏腹に、葉月の心臓は緊張で張り裂けそうだった。

本当に、会えるのだ。日向に。

何を話そう。どんな顔をして会えばいい？　あの日のことを、まだ覚えてくれているだろうか。

依織からは、現在の日向の様子については、何も聞かされていない。どこの高校に通っているのか、どんな生活をしているのか。何も知らない。

ただ、以前耳にした「引っ越した」という話については、教えてくれた。どうやら日向は、葉月に言った通り市内から出てはいないらしい。

中学卒業から少しののち、両親のもとを離れて一人で暮らし始めたそうなのだ。しかし秋ごろになって、両親も日向の住む家のすぐ近くに引っ越したらしい。文化祭の時に葉月が聞いたのは、日向の両親の話だったのだ。

日向が葉月に嘘をついていなかったことにほっとしたものの、わからないのは彼の行動である。

なぜ、わざわざ一人暮らしをする必要があったのだろう？　遠方の高校へ進学するならまだしも、引っ越し先は同じ市内だ。

しかしその謎も、彼に会えばすぐに解ける。

（……聞かないと）

わからないこと、知りたかったこと。

すべてをはっきりさせなければ。

依織に誘導されるままに下りたのは、古ぼけた公民館の前だった。随分と市の外れまで来たようで、公民館のすぐ裏手からは山になっているようだった。

駅やショッピングモールなどの施設が集結しているわけでもなく、観光客が訪れるような海があるわけでもない。ひどく静かな、それでいて穏やかな時間が流れている場所だった。

「……ここから少し歩くけど、大丈夫？」

そう問いかけた依織に葉月は頷いたが、彼女が足を進めたのは、意外な方向だった。

公民館から歩いて少し経った頃、アスファルトの舗装が途切れ山道が姿を現した。依織はその道を、どんどん進んでいくのだった。

（……こんなところに、日向が？）

人家すらない山道を、ひたすら歩いて行く。周りには木と草と、むき出しの地面。それからどこかから聞こえてくる鳥の鳴き声と、三人の足音。それだけだった。

「ほんとに、ここに住んでるの？」

なんだか不安になって、前を歩く依織に尋ねる。隣を歩く優も、声には出さないまでも同じことを思っていたようで、怪訝そうに周りに目を遣っていた。

「ええ」

依織から返ってきたのは、たった一言の肯定。

まさか彼女が二人を騙しているとも思えず、それ以降はただ、葉月も無言で足を進めるのだった。

やがて、『それ』は姿を現した。

木々に囲われ、まるで世界から隔離されたように、ひっそりと佇む小さな家。小屋、といった方が良いかもしれない。

（……ここに……）

それを目にして最初に感じたのは、寂しさだった。

こんな人気のないところに、隠れるようにして。春以来、本当にずっとここで暮らしていたのだとしたら、なんて寂しいことだろう。

依織はその家の前に立つと、慣れた様子で扉を軽くノックする。そして返事を待たないままに、扉を開けた。

「……どうぞ」

促され、葉月は足を進める。そのすぐ後から、優の足音も続いてきた。

家の中は、想像していたよりも明るい。依織が先に玄関で靴を脱ぎ、靴を揃えてから、廊下を進んでいく。

葉月もその後に続こうとして、自分の足が震えているのを感じた。

（……落ち着け）

せわしない心臓に言い聞かせ、靴を脱いで家の中に上がり込む。

短い廊下の先で、依織は立ち止まって葉月と優を待っていた。彼女の前には、一枚の引き戸。その顔を見つめると、依織は何も言わずに頷いた。

この向こうに、日向がいる。

依織の華奢な手が、引き戸の取っ手にかかる。スウッと、静かな音とともに、その戸は開かれた。

「……久しぶり」

開いた戸の向こう。畳の敷かれた小さな部屋。

その中心には布団が敷かれており、彼はその上で上半身を起こした姿勢のまま、こちらを向いてそう告げた。

まるで、これまでの長い空白期間など、なかったかのように。いつも見せていたのと同じ、柔らかな微笑を浮かべながら。

けれど葉月は、どのような表情を返したらいいのか、わからなかった。それは、会えなかった間の気持ちが一気に葉月の中を駆け巡ったのも、ひとつの原因だ。しかし何より、日向が寝間着のまま、布団の上で座っているというその光景に、少なくない衝撃を与えられたからだった。

その姿を見て、会えない期間に彼がどんな状態にあったのか、葉月にある程度の予測が生まれてしまったのだ。

立ち尽くした葉月の肩を、後ろに立った優が促すように優しく叩いた。それでようやく葉月は、その部屋の中に足を踏み入れることができた。部屋の隅にはストーブが置かれており、冷えた体が室内の温度でじんわりと温められていく。

先に中に入った依織が、部屋の隅に重ねられていた座布団を三枚持ってくると、それを日向の布団の傍らに並べる。

「どうぞ」

そう言って依織が座布団を示したため、葉月はそろそろと腰を下ろした。

枕に一番近い位置に座ったため、日向の視線を真正面から受けることになる。目が合うと、彼が目元をふんわりと綻ばせたので、なんだか落ち着かない気分になって俯いた。

隣に優が座り、そのさらに隣に依織が腰掛ける。

「久しぶりだね、日向くん」

優が口を開くと、日向はにっこりと笑って彼の方を向いた。

「久しぶり、優兄。帰ってきてたのは依織から聞いてたけど、会いに来てくれるとは思わなかった」

「お邪魔しない方が良かったかな？」
からかうように笑った優に、日向はぶんぶんと首を横に振る。
「お邪魔じゃないよ、すごく嬉しい」
懐いている様子が、葉月にも伝わってきた。気さくな様子で優と話す日向は、普段より更に幼く見える。
笑顔を浮かべながら優と話す日向の顔を、ぼんやりと見つめる。
日向は、驚くほどに変わっていなかった。髪も以前と同じくらいの長さだし、座っているためにはっきりとはわからないが、背もあまり伸びているようには見えない。顔つきも未だに可愛らしさを残しており、大人っぽくなっただとか、そういった印象を受けることはなかった。
ただ、少し痩せたように見える。そしてその細い腕からは、点滴の管が続いていた。
「なるほど。それでうっかり葉月が、社員証見ちゃったってわけだね」
いきなり出てきた自分の名前に、はっと我に返る。
「そう。私と優さんが従兄妹だってことはもともと知られてたから……」
依織が横から説明を加えると、日向は「ふむ」と頷く。
「そういうルートで、居場所がバレちゃったってわけだね」
「ええ」
こくこく、と何度か頷いた後、日向は不意に葉月の方を向いた。そして、ふっと静かな表情になった。
どこか寂しげな、穏やかな顔。

「……葉月」
「……うん？」
思わず、背筋が伸びた。
「……ごめんね」
その言葉は、何に対してだろう。卒業式の日に言った、謎の「賭け」に対してだろうか。
ようやく、答えを教えてくれるのだろうか。
「……日向」
葉月は膝に置いた手で、スカートを強く握りしめた。呼びかけに、「なに？」と小さく首を傾げる日向。
「あの日……なんであんなこと言ったの？」
もしもきっぱり振られていたら、きっとこんなに思い悩むこともなかった。
「どうして、姿を消したの？」
日向は、何をしたかったのか。
その時、ふと隣に座っていた優が腰を上げた。そして依織に何かを合図すると、部屋の外へと出ていく。その意図を読み取って、依織もすぐに後に続いた。
気を利かせてくれたのだろう。少し申し訳なくも思ったが、確かに二人きりになった方が話しやすい。彼らの気遣いはありがたかった。
依織が出ていき、引き戸が閉められた直後だった。
「いなくなろうと思ったんだ」
小さな声で、日向はそう呟いた。

「……いなく……？」
「うん、あのね」
僅かに俯き、彼は自分の胸元に手を置いた。
心臓の位置だった。
「僕の心臓は、他の人と同じようには動かないらしいんだ。……体に血液を送るポンプ機能が、うまく働かないんだって」
何か得体の知れないものに背筋を撫でられたような、ざわりとした感覚が全身を駆け巡る。
それは、この部屋に入って彼の姿を見た時に感じた不安を、煽ってくるようだった。
「発覚したのは中三の時だった。その時に、余命二年だってこともわかってね」
「……二年……」
信じられなかった。
日向が病気だということにも全く気づかなかったし、それに。
（余命を告げられたのが去年ってことは……）
彼の時間は、一体あとどのくらい残されているというのだろうか。
「中学卒業を機に、治療に専念することになったんだ。……でもそうしたところで、気休め程度の延命にしかならないこと、わかってたよ」
そう言って、日向は窓の外へと視線を投じた。その顔には微笑が浮かんでいたけれど、そこには全てを諦めたような、粛然とした印象すら与えるような、そんな色が滲んでいる。
「だからね。いなくなろうと思ったんだ」

最初の言葉を、日向は繰り返す。

「僕は、自分が死ぬことで誰かに悲しんでほしくなかったんだ。誰かを悲しませるくらいなら、いっそ忘れられてしまった方が良かった」

「……だから、身を隠した？」

こくり、と日向は頷いた。

ようやく明かされた、彼が姿を消した理由。

「誰とも関わることなく、ひっそりと死ぬことができたら……そしたら、僕の死を悲しむ人はいなくなる。だから家も離れたんだけどね……夏ぐらいからかな、ちょっと具合が悪くなっちゃって。それで父さんや母さんもこっちに引っ越してきちゃった」

小さく笑う日向とは反対に、葉月は心の中に悲しみと、そして怒りが湧いてくるのを感じていた。それを抑えこむように、俯く。

「……そりゃ、無理でしょ。お父さんやお母さんにまで、日向のことを忘れろなんて……」

あまりにも自分勝手すぎる。周りの人が、日向のことをどう思っているのか、考えもしないで。

悲しませたくない、なんて。

そんなのはエゴだ。

「うん、依織からも怒られたよ。あの子は僕の両親から事情を聞いたみたいだけど、それからは何かと世話してくれて。出来れば依織にも、何も知らないままでいてほしかったんだけどなぁ」

そう言って、小さく笑い声を上げる日向。

けれど葉月は、とても笑えそうになかった。
「……あたしにも？」
声が震える。
「あたしにも、忘れてもらおうと思ってた？」
日向は、すぐには返事をしなかった。ストーブの上でやかんが蒸気を吐き出す、その音だけがしんとした空間に響く。
「……最初はね、そのつもりだったんだ」
やがて日向はそう言った。葉月が顔を上げると、そこには何の表情も浮かべていない日向がいた。
僅かに伏せられた瞳は、どこか遠くを見つめている。
「だけど、葉月が僕のことを好きって言うから」
「あ……」
卒業式の日のことを思い出し、少し照れくさいような気持ちが胸をくすぐる。しかし日向は、そんな葉月に気付くことなく言葉を続けた。
「だから、未練が生まれたんだ」
「……未練？」
「そう」
日向の視線が、葉月に向けられる。
ここではないどこか遠くを見つめていた瞳は、今はしっかりと葉月を捉えている。
「先に答えから言うね」

答え、の意味を葉月は咄嗟に理解できなかった。
「僕は、葉月のことが好きだよ。ずっとね」
ぽかんと、口を開けたまま固まった後、言われたことを反芻して、葉月は顔を真っ赤に染めた。
彼の言った答えというのは、「一年以内に見つけることができたら気持ちを教える」という、あの約束のことだろう。
葉月は言われた通り、一年以内に日向を見つけた。
だから約束通り、日向は自分の気持ちを教えてくれたのだ。
（てことは、えっと、両想いだったってことで……いいんだよね……？）
密かに混乱しつつ、喜んでいいところなのだろうかと、葉月は迷う。しかし続けられた日向の言葉が、彼女に冷静さを取り戻させた。
「だから、葉月に告白された時に、未練が生まれた。君に忘れてほしくないって、思ってしまったんだ。……でも、葉月を悲しませるのも嫌だったから、僕はあえて一年という期限を設けた。……意味、わかる？」
問いかけに、首を横に振る。
日向は自嘲するような苦い微笑みを、顔に乗せた。初めて見る表情だった。
「自信、あったんだろうなぁ。僕の居場所はバレないだろうって。……つまりね、せめて死ぬまでの間だけでも、葉月には僕のことを覚えておいて欲しかったんだ。僕を探している間は、葉月は僕を忘れることはない。……まあ、一年以内に葉月が僕に愛想つかして、探すのを諦めてしまっても、それはそれで良かったんだけどね」

「……じゃあ、私に日向を探させたのは……見つけさせることが目的じゃなくて」
「そう。覚えていてもらうのが目的だった」
人々の記憶から、いなくなろうとしたのだという日向。
けれど葉月には。探させることで覚えていてもらおうとしたのは、葉月のことが好きだったからなのだ。
「少なくとも一年を過ぎれば、葉月は僕を探さなくなる。そして、僕が死んだことを知って悲しい思いをすることもなく、段々と忘れていってくれる。……そうなるのが、僕の願いだった」
「……何よそれ……」
彼の話を聞き終わる頃には、葉月の頬に熱い雫が伝っていた。
その涙が、どんな感情から湧き出たものなのかはわからない。ただ、今の葉月は日向に対して、ひどく腹を立てていた。
「こっちの気持ちなんて全部無視ってわけ？　勝手に探させて、勝手に諦めさせて……！
そんなのあんまりでしょ！」
「うん。だから、僕のことを嫌ってもいいよ」
なんでもないことのように、そうやってまた、日向は自分勝手なことを言う。
思わず身を乗り出し、彼の肩に掴みかかった。けれど殴るようなこともできず、体の力を抜き、そのまま日向の肩に額を乗せる。
「……それも、作戦？」
「バレた？」

「わかるわよ。……これまでの話、聞いてたら」
万が一見つかった後に、葉月がこうして怒ることも、想定済みだったのだろう。
自分勝手な思いで相手を振り回しているという自覚がありながら、彼はそれを実行した。全てを知った葉月が怒り、日向を嫌いになることを、計算に入れた上で。
本当に、いなくなろうとしているのだ。
（……馬鹿だ）
真実を知ったからといって、葉月が日向を嫌いになるなどと、本気で思っているのだろうか。嫌いな相手が死ねば、葉月はせいせいすると？
もしも本当にそんな風に思っているのだとしたら、日向はこの上なく馬鹿だ。
日向の寝間着の肩部分が、涙で濡れていく。けれど彼は葉月に肩を貸したまま、身動ぎ一つしなかった。
心臓の音が伝わってくる。
今、彼の心臓は、こうして確かに動いているのに。
（……いなくなる）
ようやくその言葉が実感を持ち始め、葉月は日向の肩に置いた手に力を込めた。
「……いかないでよ」
声にすると、涙が更にあふれた。
ふっと、日向が小さく息を吐き、微笑んだのがわかる。
「……無理だよ」
葉月の頭に、日向が頬を寄せた。

「……僕はね、平行線のままでいたかったんだ」
「……平行線？」
　至近距離で、吐息のような微かな声で、言葉を交わす。
「そう。あの卒業式の日をスタートラインにしてね。そのまま交わることなく、思い出だけを抱いて、残りの時間を生きていたかった。葉月にもだよ。……葉月も、あの頃の思い出だけを覚えたまま、この先ずっと、生きていって欲しかった。僕がどこかで生きているのだと、そう思っていてもらえれば、それで良かったんだ」
　たとえ、葉月の知らない間に、日向の線が途切れてしまっていたのだとしても。二人の思い出は、あの卒業式の日から変わることなく留まったまま。
「……でも、あたしはこうして日向を見つけ出したよ」
「うん。だから、嫌いになってよ」
「ばか。できるわけないでしょ」
　そう言い切ると、日向が僅かに体を離した。それに合わせて、葉月も顔を上げる。
　ぐしゃぐしゃに濡れた顔を拭うと、目の前には不思議そうに首を傾げる日向の姿があった。
「どうして？　僕は葉月にこんなに酷いことしたのに」
「確かに酷いことしたわよ。ほんともう……どれだけ悩んだと思ってるの」
「ごめんね」
「……でも、ここで気持ち切り替えて、それまで好きだった相手に「嫌いになります」って言えるほど、あたしは器用な人間じゃないの」

そう言葉にしたところで、葉月は実感する。
（ああ……あたし、まだ日向のことが好きなんだ）
ただの未練かもしれないと、そう考えたこともあった。
でも、こうして実際に会ってみると、あっけないほどに自分の気持ちがはっきりと見える。
日向が好きだ。
自分の気持ちは変わっていなかった。
「そっか……じゃあ、どうしたらいいかな？」
そう言って日向が浮かべた、困ったような表情も、最初に言葉を交わしたあの日から全く変わっていない。
何より、どこか緊張感に欠けるその物言いに、「やっぱり日向だなぁ」と思っていたところで、
「ちょっといいかな？」
と声がして、部屋の戸がノックされた。優の声だ。
「あ、はい！　どうぞ！」
もう一度顔を拭いながら返事すると、引き戸が開けられ、優と依織が中に入ってきた。
「話の途中にごめんね」
「いえ……っ、というより、こちらこそすみません」
今になって、気を遣ってもらったことが、なんだか恥ずかしく思えてきた。
二人は先程と同じ位置に腰を下ろす。

「で、早速なんだけど。葉月ちゃん、僕が少し前に言ったこと、覚えてる？」
「え？」
「今回の帰省は、他に用事があってのことだって」
　言われて思い出した。確か大晦日前に、そんなことを言っていた。
「はい、覚えてますけど……」
「その用事っていうのがね、実は日向くんに関することなんだ」
「えっ！」
　思わず、日向の方に顔を向けた。しかし彼自身も何のことだかわからないようで、きょとんと首を傾げている。
　依織に驚いた様子がないのは、先ほど席を外してもらっている間にでも話をしたのだろう。
「……あのね。僕はずっと、日向くんが助かる方法を探していたんだ。君が助かる方法は、心臓移植しかない。でも、日本国内ではドナーを探すのは難しい。……日向くんはもともと小柄だし、同じ大きさの心臓を見つけるのはほぼ不可能なんだ」
　心得ているというように、日向は頷いた。
「だから僕は、海外で日向くんの手術を受け入れてくれる先を探したよ。……こう見えても、実は医療関係の企業で働いててね」
　後半の言葉は、葉月に向けられたものだった。他の二人は、恐らくすでに知っているのだろう。
「そしたら、アメリカの大学病院から受け入れの内諾を得ることができたんだ」

「……でも、海外での手術って、ものすごくお金がかかるんでしょう？　あんまり、その辺りの知識はないんですけど……」

よく街頭での募金活動や、ネット上での募金のお願いなどを見かける。ただ、そこに記されている目標金額が、とても一般人には手が届かないことぐらい、葉月だって知っていた。

確かに日向は塚本家の分家の子だけれど、だからと言ってポンと出せるような金額ではないだろう。

葉月の疑問を、優は肯定した。

「そう。……だから、密かに資金集めもしてたんだ。募金活動だって……君の両親に協力してもらって、こっそりやってたんだよ」

「……そんなの、知らなかった」

呆然とつぶやく日向に、優は小さく笑う。

「だって君、嫌がるだろうと思って。他人に迷惑かけたくない、とか言ってさ」

優がそう言うと、図星だったのか日向は不満そうな、拗ねたような表情を浮かべた。その様子に目を細めながら、優は続けた。

「それで、ようやくその資金が、目標額に達したんだよ」

優のその言葉に、思わず葉月は腰を浮かしかける。

「それって……」

「うん。準備さえ整えば、手術を受けに行くことができる。……僕が今回帰省したのは、そのことを伝えるためだったんだ。日向くんの両親には、もう話してあるよ」

話を聞いた日向は、実感が湧かないのか、目を丸くして固まっていた。けれどやがて、僅かに震える声で、

「……ほんとに？」

と問い返した。

優がはっきりと頷くと、ようやく日向は表情をゆるめ、それから泣き出しそうな顔になる。

「でも……でも僕は、一度諦めた。病気と闘おうとするんじゃなくて、ただ自分の死を受け入れようと……。それなのに、今になって手術を受けようなんて……そんなの、都合が良すぎるよ」

そう言って小さく首を振る日向に、優は穏やかでありながら、厳しさをにじませた声で話しかける。

「でも、ここで日向くんが手術を拒めば、君の両親や僕が今までしてきたことは、全て無駄になる」

「……」

「それに、君は『死にたい』と思っていたのかい？」

その問いかけに、日向ははっきりと首を横に振った。それを見て、優は表情を綻ばせる。

「だったら、それでいいんだよ。変に負い目を感じることはない」

日向は口を開き、何かを言いかけて、一度言葉に詰まる。

そして、するりと涙を零した。

「ありがとう……」

そう言った後、唇を噛み締めてうつむいた日向の頭を、優がそっと優しく撫でた。
「がんばろうね」
「うん……」
その光景を見ていた葉月も、胸が熱くなり、じんわりと涙がこみ上げてきた。
「……日向」
呼びかけて、こちらを向いた彼の両手を握る。
「あたし、待ってるから。日向が戻ってくるの、ずっとずっと待ってるから」
葉月は信じていた。日向が元気になって、またこの街に帰ってくることを。
けれど日向は、その葉月の言葉に眉尻を下げると、そっと両手を離した。
「……いつ戻れるかわからない」
「そんなのっ」
「ダメだよ。だって、僕は葉月の一年を奪ったんだ。あんなこと言わなければ、葉月はきっと僕のことで、一年間頭を悩ませることもなかった。……これ以上、葉月の時間を奪えない」
葉月は愕然とした。
やっと捜し出して、助かる方法も見つかって、それなのにどうして。
「葉月は、これ以上僕にとらわれるべきじゃない」

＊＊＊

それが、二ヶ月前のことだった。
あれ以来、日向には会っていない。会わない方がいいのだろうと思った。
（……とらわれるべきじゃない、か……）
日向はそう言った。けれど葉月は、もしかすると逆ではないかと思うのだ。
日向をとらえているのは、自分の方かもしれない。彼のこれからの人生に、自分という存在はいるべきではないのかもしれない。
待っている、というその言葉が、重荷に思われているのかも。
そう考え始めてしまうと、どうしてもあの日以降、彼に会いに行くことができなかった。ただ、状況は依織から連絡を受けていた。
本当はもう少し早く渡米する予定だったらしい。しかし日向が体調を崩してしまい、大事をとって延期することにしたそうだ。
そしてその出発の日が、今日だった。
（……大丈夫かな……）
今はすっかり安定しているとのことだったが、それでもやはり心配だった。
『明日、九時過ぎの電車でここを発つの』
昨日の夜、電話越しに聞いた依織の声が、脳内で何度も再生される。
『……会わなくて、いいの？』
会いたい。本当は会って、「待つ」と言ったその気持ちは変わらないことを、伝えたい。
けれど、日向はどうなのだろうか。葉月が会いに行くことを、迷惑に思ったりしないだろうか。

もう一度、突き放されるのが怖かった。それが葉月のためなのだとわかっていても。
朝焼けに染まる空は、目まぐるしくその色を変えていく。時間は止まってくれない。それでも、どうしたらいいのか、葉月はまだ決めかねていた。
「……日向……」
彼の名を呼んで、立てた膝に顔を埋めた。
太陽が、目覚める街を染めていく。

校門の手前、登校する生徒たちで賑わうその中に、見覚えのある小さな背を見つけた葉月は、背後から声をかけた。
「……おはよう」
「あ、おはよ。葉づ……どうしたのその顔。ブッサイク」
盛大に顔をしかめてなんとも失礼な言葉を吐く親友に、葉月はムスッとする。
「……顔合わせて一番にソレってひどくない？」
「だってほんとに酷い顔。何かあった？」
うりうりと眉間を押してくる萌々の指を、掴んで止める。
「……寝てない」
「え、一睡も？」
頷くと、そこでようやく萌々の表情が、本気で心配しているものに変わった。

「なんで？　今日、別にテストとかなかったよね？」
「うん……」
萌々には、日向が見つかったことは一応伝えてある。
けれど、自分の気持ちの整理がまだついていないせいで、断片的にしか伝えられていない。日向が病気を抱えていたこと、自分の余命を知って世間から遠ざかったこと、手術のために渡米すること。
そして、想いは同じだったこと。
それらは萌々と、それから宗輔にも聞いてもらった。二人には、葉月と日向の件で何かと心配をかけたから。
だが、一番肝心なところ。
葉月が決めかねている部分については、まだ何も言えないままでいる。
「じゃあ何？」
食い下がる萌々に、葉月は重い口を開いた。
「……日向、出発するんだって」
「出発って……アメリカへ？」
「うん。九時過ぎの電車だって」
葉月がそう告げると、萌々は慌てて自分の腕時計を見た。
「って、あと二十分しかないじゃん！」
「うん……」
「うん、って！」

掴みかかるような勢いで、萌々は葉月に顔を近づけた。
「こんなとこで何やってんの！　見送り行かなくていいのっ？」
「だって……」
萌々の視線から逃れるように、顔を背ける。けれど彼女は目を逸らすことを許さず、その視線の先に回りこんできた。
「……日向、言ったんだ。『これ以上、葉月の時間を奪えない』って。……会いに行っても、日向はきっと、またあたしを突き放そうとするよ。あたしのために」
「……それが怖いって？」
少し迷った後、素直にこくりと頷く。
「葉月は？　葉月自身はどうなの？　塚本くんが帰ってくるまで、待つ覚悟はあるの？」
「ある」
即答だった。
それは悩むまでもなく、とっくに覚悟できていたことだった。日向が手術のために渡米すると聞いた、その瞬間から。
葉月の答えを聞いた萌々は、それまで浮かべていた真摯な表情を一瞬で消し去り、
「なんだ。だったら何も問題ないじゃん」
あっけらかんと言い放った。
「葉月自身の気持ちは決まってるんでしょ？　だったら、それを伝えてくればいい」
「でも……」
「あのね、ちょっとは考えてみなさいよ」

そう言って、萌々は細い人差し指を葉月の眼前に突きつける。
「この一年間、あんたは塚本くんの仕掛けたかくれんぼに振り回され続けたじゃない。だったら、今度は葉月がちょっとぐらい彼を振り回したって、バチは当たらないと思いますけど？」
「振り回す、って……」
「たまには自分の気持ちだけに従って、行動してもいいんじゃない？」
萌々は、ニッと悪戯っ子のような笑みを浮かべた。彼女のその言葉に、不思議と肩の力が抜ける。
そして、自然に笑顔が浮かんできた。
「なんか、萌々が言うと説得力あるなぁ」
「何よそれ、私がいつも考えなしに行動してるって言いたいの？」
お互いに冗談だということがわかった上で、軽口を叩き合う。葉月は少し身をかがめて、萌々の小さな体をぎゅっと抱きしめた。
「……ありがと」
「惚れんなよ？」
「ばーか」
くすくすと笑いながら、体を離す。
「行っておいで」
「うん」
頷いた葉月に、萌々も満足そうな表情を浮かべる。

と、その時。

「……朝っぱらから何イチャついてんだお前ら」

ブレーキ音とともに呆れたような声がかかり、振り返るとまたしても見覚えのある男子生徒の姿があった。

「あ、宗輔！　ちょうど良かった」

自転車にまたがったままの宗輔に向けて、萌々がトンと葉月の背を押す。

「この子、チャリで駅まで送っていってよ。大至急」

「はぁ？」

「ちょっ、萌々？」

突飛な提案に、葉月も驚く。しかし萌々はけろりとした様子だった。

「急いでるんでしょ？　少なくとも、走るよりは早いと思うんだけど」

「そりゃそうだけどさ……」

戸惑う葉月をよそに、萌々は視線だけで宗輔に何かを伝える。そこから意図を読み取ったのか、目を丸くしていた宗輔も、やがて頷いた。

「……訳ありみたいだな。しゃあねえ、乗ってけよ」

顎で荷台を示す宗輔。それでも葉月が躊躇っていると、「ぐずぐずしない！」と再び萌々に背を押された。

「……ごめんね宗輔」

「何があったかは、道すがら聞かせてもらうからな」

頷いて、荷台にまたがる。「捕まってろよ」という宗輔の言葉とともに、自転車はUター

ンして走りはじめた。
後方から聞こえてきた萌々の「先生にはうまく言っとくー！」という声には、片手を上げることで答えた。

そう時間をかけずに、駅に到着する。ちょうど通勤ラッシュも終わる時間帯らしく、思っていたより人の姿は少ない。
「ほら」
改札に続く南口のすぐ手前で、宗輔は自転車を停め、葉月に降りるように促した。礼を言い、荷台から降りる。
「塚本によろしくな」
「うん……」
今更ながら、宗輔には酷いことを頼んだかもしれない、と思う（実際に頼んだのは萌々だけれど）。
かつて自分に告白してくれた彼に、想い人である日向のもとへと送ってもらうような真似。日向が葉月を振り回したというなら、葉月もまた宗輔を振り回していたのかもしれない。
そんな罪悪感を見抜いたのか、宗輔は小さく苦笑してから、葉月の頭を撫でた。
「情けない顔すんなって。俺はもうお前のこと吹っ切れてるよ」

気にしてない、というその声音に、嘘は感じられなかった。
なんとなく、許されたような気がして、葉月は小さく息を吐く。
「早く行けよ。間に合わなくなる」
「うん」
身を翻し、改札に向けて走りだす。
その背を見守ってくれる、宗輔の視線を感じながら。

焦る気持ちを抑えながら、適当に切符を買い、改札を抜ける。都心に出る方の電車で間違いないだろう、と予測をつけて、そちらのホームへと向かった。
エスカレーターがまどろっこしくて、階段を駆け上がる。
息を切らしながらホームに出た葉月は、すぐに辺りを見回した。
（……居た！）
上がってきた階段をぐるりと回った、その向こう側。小さな集団がいた。その中に、依織と優の姿がある。見覚えのない中年の男女は、恐らく日向の両親だろう。
そして、日向はこちらに背を向けて立っていた。
すぅ、と大きく息を吸い込む。
「ひーなーたー！」
ホーム中に響き渡る大きな声は、名前を呼ばれた本人はもちろん、電車を待っていた赤

の他人たちをも振り向かせることとなった。
目を丸くして振り返った日向。その傍に駆け寄った。
「はづ……っ」
名前を呼ぼうとした彼の眼前で足を止め、膝に手をついて息を整える。
「葉月ちゃん、来てくれたんだ」
おっとりと声をかけてきたのは優だった。
「あはは……来ちゃいました」
顔を上げて彼に応え、視線を滑らせると依織と目が合う。
彼女は、まるで葉月が来ることを確信していたかのように、ふっと笑みを浮かべた。それに微笑み返してから、葉月は日向の両親に向けて頭を下げる。
「はじめまして、日向くんの元同級生の澤村葉月です」
名乗ると、彼らは納得がいったように顔を綻ばせた。
「見送りに来てくれたの？　ありがとう」
「あ、はい……。で、えっと、ちょっと日向くん、お借りしてもいいですか？」
葉月がそう断りを入れると、日向の母親は目を瞬かせ、自分の腕時計を確認した。
「でも、もうすぐ電車が……」
「あ、大丈夫です！　ちょっと話がしたいだけですから」
そう言って葉月は、未だに困惑の表情を崩さない日向の手をとった。その手を引いて四人から離れ、会話が聞こえないぐらいの距離をとる。
「……さすがに、ご両親に聞かれるのは恥ずかしいからね」

「葉月……」
日向は、「どうして」と言いたげだった。
久々の再会を果たした日から、二ヶ月。何の連絡も取り合わなかったのだ。もうこれきりだと、日向の方は思っていたのかもしれない。
けれど。
「あのね」
繋いだままの手に、力を込める。
そして、彼の目をまっすぐに見つめた。
「一年探したのよ？　どこに行ったかもわからない日向を」
責められていると思ったのだろう。日向は急に、全てを受け入れるような静かな表情になり、黙って頷いた。
「それに比べたら、アメリカから戻ってくるのを待つぐらい、なんてことないわ。あたしの執念深さをなめないでよね」
葉月がそう言うと、再び目を丸くして硬直する。
してやったり、という気分になって、葉月の口元に笑みが浮かぶ。
「……でも、葉月」
「答えて、日向。あたしに帰りを待たれるのは、迷惑なの？」
日向の言葉を遮って投げかけた質問に、日向はすぐに首を横に振った。
それで充分だった。
「わかった。じゃあ、待ってるから」

「……本当に、いいの？」
まだ躊躇う様子を見せる日向に、思わず苦笑がこぼれる。
「ただ、今度はたまに連絡くれると嬉しいかな」
「うん……ごめんね？」
「謝るのはもういいって」
くすくすと笑うと、日向もようやく微笑んでくれた。
その細い腕が背中に回り、抱き寄せられる。
「向こうでもずっと、葉月のこと考えるよ」
「恥ずかしいなぁ。……でも、あたしもきっと、ずっと日向のこと考えてると思う」
どのくらい先になるかはわからない。けれど日向は、必ず葉月のもとへ戻ってくる。
信じることは、もう怖くなかった。
「いってらっしゃい」

NONSTOP

ターニング・ポイント
諸星崇
Illustration: 橘ぽん

あらすじ

ヒロキはこれといってやりたいこともない、平凡な高校生。高校入学を機に始めたアルバイト先で、ダンサーを目指すヤヨイと出会う。

曲者ぞろいのバイトの先輩たちにも囲まれて、なんでもないヒロキの毎日が、少しずつ転換点に向かっていく。

ヤヨイ

私立優華女学院高等部の三年生。ダンサー志望で、アルバイトの合間に練習にはげむ。無口で、感情表現が小さい。

ヒロキ

市立中央高校の一年生。高校入学を機に駅前のショッピングモールでアルバイトを始める。ごくごく平凡な少年。

第六話　一年のグラディエイション

1　告白

春は出会いの季節という。四月。新学期。新しい年度の始まりとして、社会はいっせいに動き出す。

同時に春はわかれの季節ともいう。その前の三月。ここは卒業シーズンだ。

そして、春休みが来る。高校一年のヒロキにとって春休みは短く、夏や冬に比べるとなんだか損をした気分になるという印象しかない。

が、社会ではちょっとちがうらしい。特にアルバイトは、この時期に一気に人の入れ替わりが発生する。新しい道に進む者はやめ、また次の新人がやってくるのだ。

大学生の春休みは、高校までとはちがって二月からもう始まるらしい。そこでヒマになった学生が多くやってくる。募集する側もそれがわかっているから、この時期に力を入れて広告するそうだ。

ヒロキのいる場所も例外ではない。
「エンドウさーん。これ、ボルトちがいますよ」
離れた場所で蛍光灯を交換している同僚に、ヒロキは大声で呼びかけた。
「まぎわらしいんですよね、これ。オレもまちがえた口です」
息を切らして駆け寄ってきたエンドウに、二本のボルトを見せる。太さは同じだが、長さが五ミリほどちがった。これだと接続部が短くて、外れてしまうことがある。
というのは、少し前にヒロキが実体験で教えてもらったことだ。
エンドウが頭を下げる。
「すみません。ヒロキさん」
「いや、あの。『さん』づけは勘弁してくださいよ、ホント」
「いえいえ。仕事では先輩ですから」
あわてるヒロキに、エンドウはあくまでも低姿勢で接してくれる。それはありがたいのだが、彼我の年齢差などを考えると簡単には流しにくい。
なにしろエンドウは三十五歳。ヒロキの年齢を倍にしても届かない。しかも小さな子どもまでいるというのだから、ヒロキにとっては未知の領域の住人なのだ。
ヒロキの周りの環境は、この春をむかえてがらりと変わった。ヒロキにメカニックの仕事を教えてくれた先輩たちは、もういない。みんな、それぞれの道を進んでこの店を離れることになった。
イケタニ、ヒトツモリ、カワナ、クスダ、ムロフシ。ひとくせもふたくせもあって、いろいろと振り回されたが、頼りになる先輩たちだった。

正社員のイケタニとヒトツモリの代わりには、別の店から転属になった社員がすぐに来てくれた。アルバイトも急募され、エンドウをはじめとした新しいメンバーが集まって、今のメカニックを回している。

新しく入ったアルバイトは、全員ヒロキより年上だった。高校一年より下がそうそうやってくることはない。

それでも五年十年離れた相手と普通に話すことができるのは、そういう経験を積ませてもらったからだろう。

「みんな、元気かな」

思えば、前の先輩たちもみんなヒロキより年上だった。そのおかげで、年配の人が相手でも気兼ねなく話せるようになっていたのだと思う。

つくづく、あの五人がヒロキに教えてくれたことは多かった。

「ヒロキくん」

ちょっと感傷的な気分になりかけたところに声をかけられる。スポーツバッグを抱えたヤヨイが立っていた。先に仕事を上がったのだろう。出勤したときのかっこうに戻っている。

「あ、ヤヨイさん。おつかれさまです」

ヒロキにならって、エンドウもあいさつをした。ヤヨイは相変わらず、駐車場の一角で練習をするときにメカに顔を出す。なので、エンドウとも顔見知りだ。

とはいえ、彼女の人見知りぐせは治っていない。ヤヨイがエンドウに頭を下げる姿は、どこかぎこちなかった。

「それじゃ、僕、あっちの点検をしてますね」
エンドウはさらりと言うと、ヒロキとヤヨイを残してその場を立ち去った。年齢や家庭を持っていることの余裕なのか、こういうところはスムーズでかっこいい。
なにかと冷やかしにかかったイケタニたちとは大ちがいだ。
「それで、どうかしました？」
ヒロキのほうはまだ勤務中だ。エンドウもいることだし、あまり立ち話をしているわけにはいかない。
「えっと、その……仕事上がったら、来て」
それだけ言うと、ヤヨイはさっさと走って行ってしまった。拍子抜けしたヒロキは、思わず何度か目をしばたたく。ヤヨイが無口なのは前からそうだが、それにしてもあっさりしたものだった。
いつかに比べれば、ヒロキとヤヨイの間の壁はずいぶんと低くなった。というより、もう何も感じない。ヒロキは学校の女友達とほとんど変わらない感覚でヤヨイと話せるし、冗談も言える。
ヤヨイのほうがどうかはわからないが、出会った当初のように緊張しているということはないだろう。向こうから話しかけてくれるし、エンドウに対するときとはヤヨイの表情はやわらかくなる。
それが当たり前になってきただけに、以前のようなよそよそしい態度を取られると、ちょっと気になった。
なにしろ、どこに来い、という肝心なことを言ってくれない。知らない人を前にしてテ

ンパってしまったときのヤヨイの特徴だ。
「まあ、いつものとこだと思うけど」
ヤヨイとヒロキが共通で知っている場所というと、いくつかに限られる。仕事上がりにさっと行けるような所なら一つしかない。
とりあえず、今日は定時に上がろう。ヒロキがほおをかいていると、エンドウが戻ってきた。
「いい子ですね、ヤヨイさん。ヒロキさん、泣かせちゃいけませんよ」
ずしんと腹にひびく一言だった。
妻子持ちの人にそんなことを言われると重たい。ある意味、イケタニたちの冷やかしよりたちが悪かった。
「仕事しますよ、エンドウさん」
「あ、はい」
照れかくしに、ぶっきらぼうな言い方をしてしまう。こういうところは、いくら先輩たちが経験させてくれても慣れるものではなかった。

冬の間、駐車場は冷蔵庫の中のような冷たさだった。
それも春になれば、だいぶやわらぐ。ヤヨイも練習しやすくなっただろう。コートを着込まなくても歩けるようになった駐車場の一角にヒロキは足を運んだ。
「ヤヨイさーん。来ましたよ」

いつもの場所に、ヤヨイは立っていた。ヒロキの声に、びくりと肩をはね上げる。
「お、おつかれさま」
「おつかれッス。今日は練習、いいんですか？」
「う、うん。今日はいいの」
ヤヨイは視線を下げ、落ち着きなく左右を見る。ヒロキは小首をかしげた。
どうしたのだろうと思っていると、ヤヨイは何度か大きく深呼吸をして、勢いよく顔を上げる。
「あのね、ヒロキくん。わたし、卒業したら東京に行くって言ったよね」
「はい。専門学校に入るんですよね」
夏、メカニックの先輩たちといった旅行先で聞いた話だ。ヤヨイは本気でダンスの勉強をするため、卒業とともに東京へ行く。
ダンサーになろうとしたら、やはり東京でなければ不可能だそうだ。
正直に言えば、さびしい気持ちもある。先輩たちがメカニックを去っていったことにようやく慣れたところだ。ヤヨイもいなくなってしまうのかと、思わないこともない。
とはいえ、これはヤヨイの選択だ。きっとヒロキと出会う前から決めていたことだろう。
ヒロキは笑って送り出すつもりだった。
「あのね」
一呼吸おいて、ヤヨイが口を開く。
「卒業したらでいいんだけど……ヒロキくんも、来てくれない？　一緒に東京でがんばりたいの。その、わたし……ヒ、ヒロキくんのこと、好きだから」

そのとき、ヒロキは我ながら間抜けな顔をしていたと思う。

ぽかん、という擬音がぴったりだ。目も口も開いたまま、微動だにできなかった。耳から入った言葉が頭の中で十回は回っただろう。

「だ、ダメ、かな」

はっと我に返る。ほとんど反射的に首を横に振った。

ダメなわけがない。ヒロキだって健全な高校生の一人だ。彼女だってほしいし、それがヤヨイなら最高だ。

はりつきそうなのどを必死にふるわせる。ヤヨイは祈るような目でヒロキを見ていた。返事をしなければと焦るほど、言葉が出てこない。

それでもどうにか息を飲み込み、顔の筋肉の自由を取り戻して、ヒロキは口を開いた。

そのときだった。頭の片隅で、水滴が落ちるような音がしたのは。

（……あれ？）

ヤヨイは今、何と言っただろう。「東京に来てくれ」と言ったのではないか。それは、今のヒロキがうなずけることだろうか。

高校に入って一年弱。ヒロキはまだ、その先のことなどわからない。東京に行くかどうか、考えたこともない。

ヤヨイは卒業し、新しいステージに向かって歩み出す。けれど、ヒロキはまだ二年残っている。

ヤヨイとの差。二年という決定的な差。今まで意識しなかったものが、このとき初めて、ヒロキの脳裏をよぎった。

「……すいません。ちょっと、考えさせてもらえませんか？」
それはある意味、ヒロキにとっても予想外の言葉だった。
ヤヨイの目が大きく揺れる。ヒロキは内心、しまったと思った。ヤヨイの気持ちはうれしいし、断るつもりもない。ただ、うまく返事ができなくてこういう言い方をしてしまっただけだ。
けれど、ヤヨイはそんなことを言う間をあたえてくれなかった。
「そ、そうだよね。いきなりこんなこと言われても困るよね。うん、わかった。返事、いつでもいいから」
笑顔を浮かべたヤヨイがそれだけ言って、走り去っていく。ヒロキには呼び止めることができなかった。
一瞬見えたヤヨイの瞳。端が光っていたのは、ヒロキの見まちがいではないと思う。

2　結婚

「それでは、お二人の前途を祝して！」
『カンパーイ！』
華やいだ声とグラスのぶつかる音が重なる。一拍遅れて、盛大な拍手が起こった。
壇上の二人が手を振ってこたえる。タキシード姿のヒトツモリと、白いドレスを着たユ

キが満面の笑顔を浮かべていた。見ているだけで幸せが伝わってくる、そんな表情だ。
今日はヒトツモリとユキの結婚式の二次会である。ヒロキとヤヨイも呼んでもらった。イケタニたちの姿もあって、ヒロキは久しぶりにみんなと再会した。
イケタニはこの春、主任への昇格が決まったらしい。ヒトツモリもだ。カワナも正社員として登録される。
クスダはまだアシスタントだが、映像事務所の一員としてテレビ局にも出入りしているという。ムロフシは夏ごろ、新刊が出版されるそうだ。
ヒロキは結婚式の二次会に出席したことなどない。そこそこ緊張していたのだが、見知った先輩たちがいたおかげですんなりなじむことができた。ヤヨイもだ。
もっとも、ヒロキとヤヨイは、一応は一緒に来たものの、会場ではほとんど話していない。
「モリちゃん、おめっとー」
「人生の墓場、一番乗りっスね」
「いやー、酒がうまいわー。カワイコちゃんもいっぱいやし、たまらんね！」
「ゴチになってます、ヒトツモリさん。新刊はご夫婦で一冊ずつ買ってくださいね」
イケタニたちに引っ張られて、ヒロキはヒトツモリのところにお祝いを言いに行った。イケタニたちはてんでに好き勝手なことを言っている。ヒトツモリはそれにいちいちツッコミを入れながら、大きな声で笑っていた。
ヒロキも遅ればせながら、お祝いを言う。
「おめでとうございます、ヒトツモリさん」

「おー、ありがとう」
だいぶ酒が入っているのか、ヒトツモリの顔は赤く、上機嫌だ。まあ、さすがに今日ばかりはテンションが上がるだろう。
ユキのほうにも声をかける。にっこりと笑って答えた彼女は、びっくりするほどきれいだった。
ユキにはヤヨイが近づいて話しかけていた。ヤヨイが心を開いている数少ない一人で、ときどきメールもしていると聞いている。積もる話もあるだろう。
久しぶりにうれしそうにしているヤヨイを見て、ヒロキはほっとする反面、罪悪感もこみ上げた。
「なに。またヤヨイちゃんとなんかあったの？」
視線に気づかれたのか、ヒトツモリに斬り込まれる。すぐにクスダが反応した。
「なんや。まさかラブか？　ラブラブなんか？」
軽口に、ヒロキはとっさに反応できなかった。まずいと思ったときには、もう遅い。すっかりでき上がっていたクスダの目がギラリと光る。
「ちょお待て。マジなん？」
「いや、その」
しどろもどろになればなるほどまずい。それはわかっているのに、うまいごまかしが出てこない。
すぐそこにはヤヨイがいる。ただでさえクスダは大声なのに、酔いが回ってよけいにうるさい。こんなところで今、ヤヨイを巻き込みたくない。

その心情を、カワナが敏感に察してくれた。
「クスダさん。ちょっと向こう行こう」
「アカンよ！　ヒロキ、あやしいやん！」
「ユキちゃんの友達から、クスダさん紹介してくれって言われたんだけど」
「え、マジで？　それ早く言おうや」
ころっと態度を変えたクスダがカワナについていく。振り向きざま、カワナは小さく目くばせをした。
「イケタニくん。新天地、どう？」
「楽しいよ。ムロやんこそ東京生活どうよ？」
「まだ慣れないかな。電車が多すぎる。何か飲もうか」
「オッケイ」
イケタニとムロフシもさりげなく席に戻っていった。ヒロキは内心、先輩たちに感謝する。本当に困ったときはこうして助けてくれる、そんな人たちだったとヒロキは改めて感じた。
「で？　どうしたの」
軽く肩をすくめ、ヒトツモリが聞いてくる。その目はヒロキを見守る兄貴分のものだった。ヒロキはヤヨイを横目でちらりと見て、疑問を口にした。
「ヒトツモリさんは、なんでユキさんと結婚したんですか？」
「そりゃあ、もうつき合いも長かったし。最初からそのつもりだったしね」
もう聞かれ尽くしたのか、ヒトツモリはあっさりと答えてくる。しかし、ヒロキが望ん

だ答えとは少しちがった。
「新しくメカに入ったエンドウさんって人がいるんですけど、もう結婚してるんですよ。お子さんもいるって」
「へー。そんな人が入ったのか。おもしろいだろ、話聞くと」
「はい。何て言うか、見てるものがちがうって言うか。いつも奥さんとか子どもさんのことを考えてて、すごいです。それって、家族を支えてるってことじゃないですか。ヒトツモリさんもそういうこと考えたのかなって思って」
ヒトツモリは答えない。ヒロキは先を続けた。
「ヤヨイさんに、東京に来てほしいって言われたんです。けど、オレ、答えられなくて。それって、ヤヨイさんを支えていくことになるんじゃないかって思ったんです。オレ、まだ誰かを支えるような自信、ないんです」
うまく言葉にできないのがもどかしい。しかし、これが今のヒロキの気持ちを表す精一杯だった。
どうしてあのとき、ヤヨイに答えられなかったのだろう。ヒロキは今もよくわからない。わからないなりにひねり出したのがこれだった。
ヒトツモリはグラスをかたむけ、テーブルに置いた。
「お前、ホントに高一なの？」
感心したような、あきれたような、そんな声がヒロキの耳に飛び込んでくる。
「高校生がそんなこと考えたって、答えが出るわけないだろ。お前もヤヨイちゃんも、まだ知らないことのほうが多いんだから。東京に行くの行かないのだって、少なくともヒロ

キが今すぐ決めるのは無理だ。でもな」

ヒトツモリの目がユキのほうを見た。ユキはまだヤヨイと話し込んでいる。もしかしたら、ヒロキとヒトツモリが話しているのを察してヤヨイを引きとめているのかもしれない。ふとそう思った。

「一緒にいたいために何かするより、何をしてても一緒にいられるほうが長続きするよ。ヒロキが今からダンサー目指すわけにもいかないだろ。ヤヨイちゃんはヤヨイちゃんのやりたいことを追いかける。ヒロキはヒロキのやりたいことをやる。その結果、二人がどうなるか。そっちを考えろよ。東京行きもふくめて」

ヒロキはその言葉を受け止めた。すぐにはかみ砕けない。けれど、胸の中にしまっておく必要はあると思った。

ヒトツモリが新しいグラスを持ち上げた。

「俺とユキなんて全然ちがうことしてたし。でも、今日、ここにこうしている。そういうもんさ。それよりヒロキ自身はどうなの。ヤヨイちゃんのこと、好きなの？　キライなの？」

聞き返されて、ヒロキは返答につまる。けれど、ここで答えないのはフェアではない。

「そりゃあ……その、好きですよ」

「よし」

さすがに大きな声では言えなかったが、ヒトツモリは満足そうに笑ってグラスを差し出した。よくわからずに受け取り、口にふくむ。

途端、ヒロキは中身を吹き出しそうになった。

「ビールじゃないですか、これ」
「苦いだろ？　初恋ってのは苦いモンです。なんてな」
抗議しようかと思ったが、次の人たちが後ろにならんだため、ヒロキは席に戻ることにした。先輩たちは先に戻っており、クスダがくだを巻いているのをみんなでいじっている。
ヤヨイも帰ってきた。一瞬、ヒロキと目が合ったが、すぐにそらされてしまった。
ヒロキはグラスをもう一度かたむけた。
苦かった。

3　卒業

優華女学院の校門は、なんだか白くておしゃれだ。何の変哲もない「入り口」を毎日くぐっているヒロキからすると、装飾された石造りの門柱はそれだけですごそうに見える。
しかも今日は、立て看板やら花飾りやらでさらに特別な雰囲気が演出されている。
「花ぐらい持ってこればよかったかな」
『卒業式』と大書された看板を前に、ヒロキはぼそっとつぶやいた。
同じN市にある優華女学院だが、ヒロキは来たのは初めてだ。普通は他校、しかも女子校に行くような用事などない。
ましてや卒業式だ。親族でなければ足を運ぶことはないだろう。だいたい、昼前にはう

やく来たところで肝心の式典は終わっている。
ヒロキの目的はそれが終わった後なので、一向にかまわないのだが。
「あ」
ちらほらと下校する生徒の姿が見え始めた。と思ったら、一人がその先頭を切ってまっすぐに歩いてくる。ヤヨイだ。
最後の日も、ヤヨイはさっさと教室を出てきたのだろう。ヒロキの予想どおりだった。誰かと話ぐらいしてくればいいのに、そうはしなかったらしい。
ヤヨイは脇目も振らずに校門に向かってくる。と、その足がぴたりと止まった。
ヒロキに気づいたのだろう。片手をあげて、ヒロキは一歩、ふみ出す。
次の瞬間、ヒロキは言葉を失った。
ヤヨイはものも言わず、ヒロキに背中を向けて走り去ってしまったのだ。

学生服というのは、激しい運動をするようにはできていない。上着はひるがえるし、ズボンはまとわりつくしでとにかく走りにくい。
それでもヒロキは足をゆるめるわけにはいかなかった。
「ちょ、ちょ、ちょっとヤヨイさん！」
大声で呼びかける。聞こえているはずだが、華奢な背中は振り返りもしなかった。そのまま全速力でアスファルトの上をかけていく。
これがまた早い。ヒロキもべつに運動が苦手なわけではないのだが、ヤヨイとの距離は

まるで縮まらない。しなやかでバランスのいいフォームで走るヤヨイは、陸上部の選手のようだ。

ヤヨイの運動神経がいいだろうとは思っていた。そうでなければ、ダンサーを目指そうとは考えないだろう。しかし、これほどとは予想外だ。

助かったのは、ヤヨイがあせって道をまちがえてくれたからだ。公園の中に駆け込んで、工事中のフェンスに道をふさがれてくれた。

入り口のほうにはヒロキがいる。足を止めたヤヨイは、どこかおびえたような表情を浮かべた。が、ヒロキにそれを気にする余裕はなかった。

さすがは毎日、ダンスの練習できたえているだけはある。ヤヨイの体力はヒロキのそれを完全に上回っていたのだ。

追いつきこそしたものの、ヒロキの足腰も肺も限界だった。表情を浮かべられるだけ、ヤヨイはすごい。口を開きかけたヒロキは、そのまま盛大にむせて転がった。

「だ、大丈夫？」

追われていたはずのヤヨイが駆け寄ってくる。背中をさすってくれる手に、ヒロキは甘えさせてもらった。

暑い。汗が噴き出て、上着を脱ぎ捨てる。そうしてようやく、呼吸が静まってきた。

「そ、卒業、おめでとうございます。ヤヨイさん」

「あ、う、うん。ありがとう」

ぜいぜい言いながら、ヒロキはとりあえず、第一の目的を果たした。ヤヨイはとまどった顔で祝辞を受け取る。

ヒロキは体勢を整えた。と言っても、地面にあぐらをかいただけだ。立つのはちょっとまだ無理だった。

ヤヨイはその横に、ちょこんとひざをついている。おかげでもう、逃げ出すことはなさそうだ。けがの功名と言うやつだろうか。ヒロキは小さく苦笑する。

そして、本題に入った。

「この間は返事できなくてすみませんでした」

ヤヨイの顔がこわばった。肩が一つ、大きくはねる。けれど、拳をぎゅっとにぎって、動き出しそうな足を押し止めたのがわかった。

ヒロキはそんなヤヨイに感謝する。きちんと自分の言葉を受け止めようとしてくれることが、こんなにうれしいことだと、ようやく気がついた。

「オレ、まだ大学は決めてません。行くかどうかも。そういうの、ちゃんと考えて決めようと思います。自分で」

ヒトツモリとのやり取りを、ヒロキは何度もくり返して考えた。はっきりと結論が出たわけではない。まだ子どものヒロキには、そこまで導き出す力はなかった。

ヤヨイのために何ができるのだろう。ヤヨイと一緒にいるためにヒロキができることは何なのだろう。それはきっと、たくさんある。けれど、今のヒロキにはわからない。

だから、今のヒロキができること。これからもヒロキが決してやめないこと。それを伝えたかった。

「オレは東京に行くかどうかわからないけど、ヤヨイさんを応援します。一番近くで。だから……」

ヒロキはヤヨイの目をまっすぐに見た。

「だから、こういうオレとつき合ってください」

桜の花が、二人の間を舞い散っていく。ゆるやかな風は、ほてった体と心に心地よかった。

春風の中で二人は見つめ合う。どれほどの時間が過ぎただろう。もうヒロキがいつも通りに呼吸をできるようになって、それからしばらくして、ヤヨイがぽつりとつぶやいた。

「ダメだね、わたし」

ヤヨイの口の端が、ほんの少し、持ち上がっていた。

「わたし、ヒロキくんに頼ろうとしてた。……ううん、甘えようとしてたんだ。ヒロキくんなら、なんでも許してくれる気がしたから。でも、それじゃダメだよね」

肩の力が抜ける。ほおの筋肉がゆるむ。ヤヨイの表情は次第におだやかに、そして晴れやかに変わっていく。

「わたしはわたし。ヒロキくんはヒロキくん。おたがいの道をちゃんと歩こう。その上で一緒にいられたら、それが一番ステキだと思う」

ヒロキの想いは伝わった。

ヤヨイが立ち上がる。しなやかに差し出された手を、ヒロキはそっと握った。肩をならべると、ヒロキの視線のほうが少しだけ見下ろすようになる。

無言のまま、二人は歩き出した。ここに来るまでとはちがう、ゆったりとした歩み。けれど、その足取りは来たときよりも強く、たしかなものだった。

一年を経て手に入れた、二人の歩き方だった。

「また会おうね」
「はい」
再会の約束は短かった。二人は手を離し、それぞれの家路につく。ヒロキはふと、いつもとちがう道を選びたくなった。
ターニング・ポイント。曲がり角の先には、きっと新しい何かが見つかる。
そんな気がする。

（了）

NONSTOP

『クローバー』入江棗

それまで当たり前のように一緒の時間を過ごしてきた千伽と孝士と楓。けれど中学を卒業してから東京へ行ってしまう楓は千伽へ好意を伝えます。同じく孝士にも好意を打ち明けられた千伽は三人でいられる時間が終わることを寂しく思いながら、二人のうちの一人を選ぶのです。

背伸びしたくなる年頃の千伽が理想と現実の狭間で見つけた答えに、共感をもてる人が多いのではないでしょうか。その時の彼女の決断は本作の見所の一つです。そしてちょっぴりと語られる三人の後日談にも注目です。きっとほっこりした気分にさせてくれます。

『Dear My Life』貴水玲

本作のヒロイン花が密かに思いをよせる星流が留学することに。花がいがみ合っていた塚本ありさと和解したばかりの時分にそれを知らされます。そして花の身体は病気に蝕まれ、彼女は東京の病院へ移ることになるのです。花は星流と別れようとするその時、やっと自分の想いに気付き、彼の元へと向かいます。

やむを得ない事情で離れ離れになる花と星流。別れの季節にピッタリな物語に仕上がっています。しかし、運命に翻弄されながらも、二人は自分の幸せを掴むために精一杯の努力をします。苦しい状況に負けないで活躍する花たちを見届けてください。

『Ｆｒｏｍ・Ｎ』番棚葵

新井隆也は自分の生まれ故郷が嫌いでした。そんな隆也は幼なじみの来夢の町興しを手

伝ううちに、故郷の町のよさに気がついていきます。そしてそれを気づかせてくれた来夢に惹かれていき、留学から戻った時に返事を聞かせて欲しいと、彼女に自分の想いを打明けるのです。

嫌いなはずだった、何もない町。そんな自分の故郷を懐かしく思うのははじめてその地を離れたときかもしれません。そして彼がその地に戻りたいと思うのは大切な人が待っているからなのです。住み慣れた場所を離れた人におススメな作品です。

『響け、私たちの歌声』広野未沙

志望校に行けず、しぶしぶ滑り止めの優華女学院高校に入学したヒロインの酒井有香。居場所のなかった有香は友人に誘われて入った合唱部で居場所を見つけ、居場所をくれた合唱部の先輩たちに恩返しするため卒業前にコンサートを開きます。

小さなきっかけで変わっていった有香がどのような成長を遂げたのかが本作の見所です。そして、彼女は新しく入学してきた後輩達にかつての自分を重ねます。そんな彼女の気持ちの変化に注目して欲しい作品です。

『平行線シンドローム』水島朱音

大好きな塚本日向に告白した澤村葉月は「一年間以内に僕を見つけてくれたら返事をする」と彼に言われ、二人の関係は平行線のまま時間だけが過ぎました。ようやく葉月は日向を見つけ、どうしてそんなことをしたのか、真相を聞かされます。

長く続いた二人の追いかけっこもようやく終わりを迎えます。そして、その裏に隠され

た日向の本心を知った葉月はどんな行動を起こすのでしょうか。ようやく明かされる謎と二人の気持ちを楽しめる作品に仕上がっています。

『ターニング・ポイント』諸星崇

主人公のヒロキがバイト先で知り合い、親しくなった女性ヤヨイ。彼女はダンサーになるために上京を決め、ヒロキに「一緒に東京へ来て」と頼みます。重大な決断を迫られたヒロキはバイト先の先輩たちの生き方を見ながら、二人の将来のために結論を出すのです。

春は別れの季節ですが、出会いの季節でもあります。それらの出会いと別れには人生を左右する大切な決断を伴うことがあります。本作の主人公ヒロキもそんな重大な決断をする一人です。本作はそんな彼の姿を通して人生を考える小説になっています。

槙尾慶祐

2013年4月21日　発行

著　　者　入江聚／貴水玲／番棚葵／広野美沙／水島朱音／諸星崇

企画・監修　榎本秋

発　行　所　株式会社榎本事務所
〒178-0062
東京都練馬区大泉町2-54-8　SELLY加計呂麻402
電話　03-6750-6341

表　　紙　天倉りぃ（AMG出版工房）

イラスト　伊藤由希、ヒトエ、うらら、正午あきら、橘ぽん
永野洋生、新名描人、峯松芽夢、神内みさと（すべてAMG出版工房）

協　　力　脇功一、三浦奈緒
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンの配布、複製は不許可とする。